

スカーレット家長男の 憂鬱

田所浩二容疑者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

スカーレット家の長男として生まれたアルク・スカーレット。両親に迫害を受け『劣等種』のレッテルを貼られ、地下室に送られた彼に現世でブラック企業会社員だったおっさんが憑依した。ブラック会社員特有の死んだ魚の目で周りの姉や従者をどんどんと勘違いさせていくハートフル(?) ストーリー!

目次

幕間

幕間 「サッカーしようよ！お姉様ゴ-

ルね！」 | 1

幕間 「もしも中の人がアルクの記憶を
全く持ってなかったら」 | 10

幕間 「フラン姉様の部屋から姉弟もの
のエロ本が出てきた…」 | 20

幕間 「レミリア姉様の部屋からしわく
ちやの俺の写真が出てきた…」 | 29

幕間 「ある化け猫の視線の遷移」 | 36

幕間 「アルクの誕生日パーティー」

44

幕間 「名探偵だよ！妹紅ちゃん！」

60

幕間 紅魔館の日常 | 69

本編

プロローグ | 77

1話 | 85

2話 | 96

3話 | 107

4話 | 116

5話 | 126

6話 | 134

7話 | 142

20話 19話 18話 17話 16話 15話 14話 13話 12話 11話 10話 9話 8話

283 273 261 249 239 227 218 207 194 184 174 164 154

28話 27話 26話 25話 24話 23話 22話 21話 人斬り編

346 339 332 321 317 308 299 291

幕間

幕間 「サッカーしようよ！お姉様ゴールね！」

いつも通りの紅魔館、従者たちがあくせく働いているその館で私ことフランドール・スカレットは暇を持て余していた。愛しい弟であるアルクはあの胡散臭いスキマ妖怪の家に居るので気軽に会えない、ならば必然的に姉と遊ぶぐらいしかやることがないのだが今日はそれすらも億劫だった。

そもそも何故こんなに愛しているのにアルクに会えないのだろうか。

一瞬そんな疑問が浮かび上がるが、会えない理由は最初から自分が良く分かっているので少々我慢することにする。

本当は今すぐにでもスキマ妖怪をボコボコにして鼻にワサビでも入れて苦しめたあと、アルクを連れ去りたい気分だけど。部屋をゴロゴロ転がりながらそんな過激なことを考える。同じ気持ちであろう姉はアルクに手紙を書いているようだ。私も書いていたがさつき書き終わってしまった。そのため猛烈に暇なのだ。

「お姉様、暇」

「なら手紙を書き終わった後このボードゲームで遊びましょう。これはちよつと変わっ

てて…」

「よいしょお!!」

「何してるのフラン!？」

私はボードゲームをひっくり返した。駒らしきものがバラバラ崩れていくのが目に入る。そんな光景を見ても私の心は満たされない。破壊することこそマイライフだったというのに傍にアルクが居ないだけでここまで空虚な行為となってしまう。世の理不尽さを呪いながら膝をつく私。そしてありつただけの怒りを込めて叫んだ。

「アルクに会いたいよお!」

「このボードゲームには何の罪もないでしょうが!」

お姉様がバシイツ!と私の頭を叩く、痛い。これがドメスティック・バイオレンスというやつか、とうとう私の姉が世間の荒波の影響で鬼になってしまったことを嘆きながら私は殴られた所をさすった。対応次第ではあと二発ぐらいは追加されそうな気がする。

「ていうか暇なら図書館にでも行きなさい、パチュリー辺りが相手してくれるでしょう?」

「だつてえ…前のことがあったときから会いにくいし…」

パチュリーは正しく私達を救ってくれたのは感謝しているが少し負い目がある。レ

ミリア姉様はとうに元の関係に戻っているが私はちよつと二の足を踏んでいる。ようするに、なんとと言われるかわからないので怖いのだ。正直あの無表情で責め立てられたら泣く自信が私にはある。

「だからこそちゃんと会わなきゃダメじゃない、ほら行つてきなさい」

「わかつたよう…」

私はとぼとぼ歩きながらチラチラお姉様の方を見る、少し歩いてチラツ、少し歩いてチラツ、チラツ。するとお姉様が深い深いため息をついてこつちを少し責めるような視線で見えてきた。いやわかつてるんだけど、行かなきゃダメかなこれ？

「早く行かなきゃあんたが夜な夜なアルクの写真でナニしてるかをアルクに言うわよ」

「いってきまーす!!」

私は即退散した、いやほんとにそれバラされたらヤバいからお姉様やめて。私は図書館まで全力疾走しながら何故姉がそのことを知っているのかを考えていた。ていうか絶対お姉様も同じようなことしてるのに自分のことを棚に上げないで欲しい。私は憤慨しつっつそう思った。

「で、私のとこに来たと」

「あ、うん。えへへえ…」

にへらにへらと愛想笑いをしながらパチュリーの方を見る。相変わらず人形のような鉄仮面だ、その顔で私を見ないで!

私はパチュリーのことは嫌いでは無いしむしろ好意的に見ているところもあるが、あまりに表情に乏しいので話をするときに無性に緊張するのだ。

私達の横で小悪魔は相変わらず軽薄な笑みを浮かべている。悪魔らしいと思ったら悪魔らしいがその顔は少し従魔としてどうなんだろうかと思わないでもない。まあパチュリーの部下だし私には関係の無いことだからどうでもいいけどね。

「前のことは別に良いわよ。いいデータも取れたしね」

「データ?」

初耳だ、なんのデータだろう。

「八雲紫について。能力など細かいところまでは無理だったけど結構わかったことはあるわ」

「へえー、協力してたのはそういう目的も兼ねてたんだね」

「当たり前よ、そうじゃないと私が頭下げてまで敵陣にお願いなんて行かないわよ」

プライドは高くないが合理的なパチュリーなので無駄なところで頭は下げたくないのだろうと納得する。私はあのスキマ妖怪に頭下げるとか絶対無理だな、お姉様ではな

いが我慢出来ずに攻撃を仕掛ける未来が容易に見える。

「まあそれは置いといて、暇だから来たのよね？」

「有り体に言えばそうだね」

「ならこの本にあるスポーツをしてみたらいいんじゃない？」

「これは……？」

『『サッカー』、元は戦争で勝った人間が負けた人間の首を足で転がして戦争での勝利を祝うところから始まったスポーツよ』

「ええ……」

なんて残酷なスポーツなんだ。やっぱり人間が一番狂気に満ち満ちていることを再認識しつつその本をペラペラとめくる。今はちゃんとボールを使った遊びになっていることに安堵しながらルールを見ていく。細かいところまで見るとややこしくなるようだがようはゴールにボールを蹴って入れたら勝ちってことね、簡単だ。

「よし！じゃあお姉様誘ってしてくるね！パチュリーは来る？」

「私がサッカーしたら喘息で死ぬから無理ね」

「そっか！サッカーのこと教えてくれてありがと！じゃあね！」

そして私はボールを持ってお姉様の部屋の扉を勢い良く開けた。中に居たお姉様は

こちらを目を見開いて凝視しているが関係無くズカズカと部屋に入っていく。そして

「お姉様!サッカーしよう!」

「サッカー…?あのイタリアの宮廷の門でお金を賭けてボールを蹴り合う賭け事から始まったスポーツ?」

「え?そうなの?」

さつきと言っていることが違うがこつちはこつちで薄汚い大人の遊びという感じでなんか嫌だな、そんなことを考えながらとりあえずお姉様を外に連れ出す。なんかぎやあぎやあ言っていたが中でサッカーなんかしたら咲夜に叱られてしまう。だから外に出るしかないのだ。幸い今は夜なので遊び放題。お誂え向きな環境で興奮が冷めやらない。

「まだ手紙書いてる途中なんだけど!」

「お姉様いつも書くの遅いけど何で?」

「いや、アルクを表現するための言葉を探してるからちよつと遅くなっちゃって…」

「うわあ…」

「何よその顔は!!」

そんなの、大丈夫かとか元気にしてますかとかそんなのでいいだろうに。変に凝った言葉を使うからお姉様の文章はわかりにくくなるんだ。手紙だからこそ相手に伝わり

やすい言葉を使うのは常識だということのお姉様はそんなこともわからないのか。アルクも困惑していることだろう。

「まあそれは置いてとりあえず私がボール蹴るからお姉様受け止めてね」

「えっ」

私は魔力を足に込めて全力で走る、そして助走によってついたパワーを全てボールに流し前に押し出した。フランドール・スカーレットの全力のサッカーボールキックだ、いくらお姉様でも一週間はベッドの上での生活になる筈。だが

「くっそああ!!こんなことだろうと思ってたわよ!!」

お姉様は両手をパーにして受け止めた、しかし勢いを殺すことが難しいのかそのまま紅魔館の外壁を破壊しながらどこかに行ってしまった。私はそんなお姉様を見て腹を抱えて笑っていた、いやほんと面白い人だなあ。私のお巫山戯にも全力で応えてくれる人はやっぱりお姉様しか居ないだろうしね。

「いやー、楽しかった楽しかった。今度はこいしとかも誘ってみようかな」

「おや、フランドール・スカーレットお嬢様。どこに行かれるのですか?」

「えっ」

「たしかに紅魔館の中は何も被害はありませんが…外壁が壊れたままですよ?」

「い、いやでもそれは従者の子達にというか…」

ヤバいやばいやばい、ここをどうに切り抜けなければ咲夜からのお仕置きが待っている。それに加えたぶん私は外壁の修理をさせられるだろう。しかし私はそんなことしたくない、このまま紅魔館でまた暇をつぶす作業に戻りたいのだ。

「紅魔館の主代理ともあろうお方が自らの過失で外壁を壊しそれを従者達に任せる…ですか。わかりました、妖精メイド達にはそう伝えておきますね」

「ごめんなさい」

平謝りだった、何百年と生きているにも関わらず小さく丸まって謝るこの姿はアルクには絶対に見せられない。見せるぐらいなら舌を噛み切って死ぬ所存だ。

というか咲夜、いつもは甘々な感じなのにこういう時だけ母親みたいになるのやめて欲しい。いや、母親がどんなものかとか実際に体験した事ないけど。とりあえず反抗する気が完全に失せる。淡々と罪を暴かれるのもキツイ。

「とりあえず外壁は魔法で直しておくように、もしちゃんと出来たらプリンがありますから」

「えっ!プリン!?やったー!」

「あとはレミリアお嬢様ですが…とりあえず迎えに行つてきますね、その間に修理を」

「うん!よーし、頑張るぞー!」

これが紅魔館の日常。アルクが居ないことでどこか物足りないがそれはそれで楽し

くやっている。いつか会えるその時までは笑顔でいておこうと決めているから、また会った時に最高の笑顔で迎えられるように。

幕間「もしも中の人がアルクの記憶を全く持ってなかったら」

いや()どこよ。

昨日は三日ぶりに家に帰り布団で寝た筈なのに気がついたら何か訳の分からない部屋に入れられていた。俺はキョロキョロと部屋を見回しながら自分の頬をつねる、めちゃくちゃ痛いから現実だということを認識し現状把握に務めるが全くもって何もわからない。

いや、おかしいだろこれ。まさかドツキリか何かの企画か。とりあえず自分の身体になにかされていないか確認する。どうやら何もされていない……ん？なんか身体のバランスおかしくないか？そう思い身体をもう一度確認する。

「…いや、嘘だろ？」

まさかのまさかだ。俺の身体が魅惑のシヨタボデイにトランスフォームしていた。

ぺたぺたと身体を触るがサラサラの髪と長いまつ毛は変わらず存在感を放っている。鏡があれば全身を見れるというのには何も無い。ベッドと机しかない部屋にこんな美シヨタを放置するとは紳士の風上にも置けない奴らだな。いや紳士かどうかは知らんけど。

まあそれは置いて、とりあえず机に手を置き落ち着くことにする。どんな時にも冷静な判断を崩さないのはブラック企業では必須のスキルだ。

「とりあえず部屋を調べる……ところはないな。あとは何かあるといえればあの扉だけか……？」

部屋は一目見ただけで何も無いことがわかるのでとりあえず入口についてる扉に近づく。ドアノブがついているから一応出入りは出来るのだろう。

そう思いドアノブを握る、そして俺は後悔した。えげつない強さの電流が流れて俺を吹き飛ばしたのだ。右手を押しえながらのたうち回る、いや普通にこれ人死ぬだろ。多分手が火傷だらけになっていると思ひ、チラリと見る。

しかしそこには傷一つない手のひらがあつた。

「めちやくちや電撃食らつた筈なのに……」

俺は呆然としながらもこれがどういふことか仮説を立てる。一つ目はあのドアノブはただの電流が流れるジョークグッズだったという説。二つ目は何らかの要因で無意

識に電流を無効化したという説。三つ目はこの美シヨタがめっちゃ強いから大丈夫だったという説。

三つ目は無いな、無い無い。見ろよこの赤ちゃん肌、ツルツルだぞツルツル。しかも二の腕もプニプニしてる。筋肉の『き』の字も無い。

ということはあるは余りにも急な電撃だったから俺が勘違いしただけか。ビビらせやがって。

「まあ、あの扉が怖いわけじゃないけど…他に出入りできるところを探しますか」

そう言い部屋中をくまなく搜索していく。しかし何も無い、ほんとなんなんだこの部屋…？ 本当のリアル脱出ゲームじゃねえか。まるで頭痛が痛いのような単語を作り出しながら部屋でポーツとする。あんなことがあったから扉にはあまり行きたくない。もう一回やる勇氣は俺には無いのだ。

「でもあそこしか無いよなあ…」

葛藤しながら考えた結果、外からの助けを待つことにした。此処で待つとけば誰かしら来ると思ったからだ。もし人が来たらここから出してもらおう。あと状況説明もしてもらおう。

まあこれも長期の休みのようなものと思えば大丈夫でしょ、多分。

そこからの生活はあまりにも怠惰なものだった。毎日何故か机の上に用意されている食事を食べ、適度に筋トレして寝るといふ生活。グースカグースカ寝るだけの美シヨタ、シヨタコンには堪らない光景かもしれないが中身はオッサンなのだ。全くもって不本意としか言いようがないだろう。

だが生活の中で一番びつくりしたことがある。なんとこの世界には魔法があるのだ。それは暇がピークに達したときにふざけて壁に向かってかめはめ波の練習をしていたときだった。
出た。

出たのだ、かめはめ波が。

そのときに初めてこの部屋に人が入ってきた。しかし俺はその人達のあまりの剣幕に何も言えなくなり黙っていた。そうすると俺は恐らく父親と思われる奴に思いつき頬を殴られ腹を蹴られた。そんな児童虐待防止法に真っ向から反抗していく行為によつて意識を失い、その後はこの部屋に誰も来ることは無かった。

あ、でもたまに胡散臭い美人さんと世間話してるから全く誰も来てないわけじゃないな。

「今思い出してもろくなことやってない俺」

だがそのおかげで上に人がいることがわかったので魔法で作り出した紙とペンで書いたメッセージを食べ終わった皿に置いておくという涙ぐましい努力を今も続けている。

そろそろ外に出たいなー、なんて思いながらゴロゴロしている終身名誉二ートの俺は外から何やら轟音が聞こえてくるのに気づく。それはどんどんどこちらに近づいてくる。どうやらこの部屋を指しているようだ。

「この扉強力な結界が張られてる…」

「フラン、いける?」

「問題ないよ」

これは誰だ? 誰だ、誰だ、誰だ。いや、わからん。そんな悪魔の力を手に入れそうな音楽を脳内で再生しながら俺は扉の前を警戒していた。でも女の子のような声がいっぱいするし、俺のファンかな?

「きゅつとしてドカーン!」

何やら可愛い掛け声だな、そう思った瞬間にあのビリビリ扉が吹き飛んだ。

「よし、良いわよフラン」

何も良くねーよ、俺の部屋の扉だぞコラ。

「アルク！無事なの!?!」

「いや君誰?!ここ俺の部屋なんですけど…?」

久しぶりに人が来たことは嬉しいが優しい人じゃないと素直に喜べない。扉吹き飛ばすような人が果たして優しいと言えるのだろうか。否、それはただのヤンキーだ。

そう思つてこの人達から逃げる為に早々にこの部屋から出ていこうとしたが、壊した張本人達の顔を見て驚愕した。めちやくちや美少女なことにももちろんびつくりしたが、それとは別にめつちや泣いていたことに一番びつくりした。え、俺なんかした? そう思つてオロオロしていたが、とりあえず話し掛けてみることにする。

「あ、あの貴方達は…?」

「アルク、冗談よね…?私のこと覚えていないって…」

青髪の子に涙目で詰め寄られるが知らないものは知らない。ここはキツパリ言つた方が良いだろう。

「全然覚えてないですわね」

「うわあああああん!!」

「ちよ、やめろよ!こつちが悪いみたいな感じ!」

ほんとさつきから罪悪感凄いからやめて頂きたい。

「じゃあ、アルク私のことは…?」

「君のことも覚えてない」

金髪の子にもバツサリと言う、こういうのは嘘ついたらやばいのだ。正直に言うのが一番。

「そっかあ…仕方ないね…ひっく、うん、仕方ないよね…ぐすつ」

「心が痛い」

もぉー！勘弁してくれよなー！確かに外には出たかったけどさー！

「あの、貴方様はスカーレット家のご息子のアルク・スカーレット様ですよね?」

落ち込んでいた俺に話しかけてくれたのはメイド服に身を包んだ美人な女性だった。メイドとか初めて見たけど…趣深いな。けどその言っている内容は全く知らないものだったので首を傾げる。

「いや、そうなんですか?」

「え、私はお嬢様にそう聞いているのですが…」

へえ、俺の名前ってアルクっていうんだ。今初めて知ったわ。

「実は俺、記憶が全くといていいほど無くて」

「それ本当!?!」

青髪の子が鼻水だらけの顔でまた詰め寄ってきた。うわ、鼻水ついた、汚ねえ。

「まあ…気づいたらこの部屋に入れられていたので…」

「まさかシヨックで…?」

あの親だからな、そりゃシヨックで記憶を無くしても仕方ないだろうよ。

「そういえば貴方達は俺とどういう関係で?」

そういえばこれを聞いておかなければならない。記憶喪失ものでは定番の質問だ。

「私達は貴方の」

「フランはアルクの婚約者だよ!」

「ちよっ」

ええ!? こんな可愛い子が俺の婚約者だつて!?

「すごく愛し合っていたんだよ? 本当に思い出せない?」

「いや、その、ごめん…」

まじかあ…これは早急に思い出さなければ。

「ううん、いいの。これから私と一緒に思い出していこう?」

「フランあんた何やってんの!?!」

いきなり青髪の子が金髪の子のデコを叩いた。蹲りデコを抑える金髪の子。大丈夫だろうか。しかしいきなり叩くとは良くないな、暴力はいけない。

「アルク！この子嘘ついてるだけだから！このフランは貴方の姉！」

ああ、そういうことか。だから叩いたんだな、納得。

「本当の婚約者は私よ、信じてアルク！」

「ええ!？」

こつちの子が婚約者だったのか。どちらにしても将来有望そうな外見だから嬉しいな。

「お姉様」

「フラン、貴方は部屋に戻ってなさい。私がアルクに説明しておくから」

「ふざけんなオラア！」

そう言うなり、いきなり金髪の子が青髪の子にタツクルした。ま、まさかこれが噂の修羅場とかいうやつか…？俺は戦慄した。

「離しなさい！姉に勝てる妹など居ないのよ！諦めて部屋に戻って昔のアルクの写真で

○○○○しときなさい！」

あんたはどここの世紀末救世主の兄だ。それにそれは負けフラグだろ。

「お姉様こそ！いつも通りアルクの昔のTシャツで○○○○しとけばいいじゃん！その間に私がアルクに紅魔館の案内しとくから！」

「うわあ…」

俺は端的に言つてドン引きだった。

「アルク様」

「な、なんですか？」

メイドさんが全く目が笑つてない笑顔で話しかけてきた。

「お嬢様達はあの様子なので私が紅魔館を案内しますね。その過程で思い出すこともあるかもしれないので」

「あ、はい」

俺はもう言われるがままにメイドさんについて行つた。後ろの喧騒を無視しながら。

幕間 「フラン姉様の部屋から姉弟もののエロ本が出てきた…」

今日は紅魔館の手伝いをしている。仕事の内容は掃除を頼まれ部屋の整理整頓や身内じゃないと触れて欲しくないという部屋などの点検をしたりするというもの。メイド長はどうやら出掛けており今日だけでも頼みたいとのことだ。正直全く辛い仕事ではないので早急に終わらせて読書に勤しみたいものである。

そんなこんなで大体の部屋が終わりあとはフラン姉様の部屋が最後となった。ネズミやらが湧いていたら大変なので下から上まで隅々を箒や雑巾で埃を取る。掃除は嫌いでは無いし給料がちゃんと出るのでやる気も湧いてくる。

そんな風に意気揚々と掃除をしているとベッドの下に何かを収納できるスペースがあることに気づく。

「なんだこれ」

俺は掃除をしなければならぬという使命感と何があるのか気になるという好奇心に支配されてしまった。

こうなつてはもう後戻りは出来ない。俺は導かれるままにその収納の取っ手を掛けた。

「あれ？開かない…」

鍵がかかっているのか開かなかった。そりやあそうだ、フラン姉様にも見られたくないもの。一つや二つあるだろう。そう思い諦めて取っ手から手を離す。しかしそこで俺は取っ手の横にある四つの数字を見てしまった。

「これ数字入力で開けるタイプだったのか」

四つの数字、俺は無意識にフラン姉様の誕生日を入力していた。開かない。次にレミリア姉様の誕生日を。開かない。次はメイド長の、その次はパチュリーさんの、またその次は美鈴さんの。だが全て開かなかった。

「これはわからんなあ」

もう流石に諦めて掃除の続きをしようとする。しかし、諦めかけた俺の脳に天啓が舞い降りた。

あ、俺の誕生日だけまだだったわ、と。

「えーと、これとこれとこれと…と」

姉の収納を開けるために四つの数字を必死こいて入力する弟というただの変態の所業だということにこの時気づけば後の悲劇を回避出来たというのに、アルクは目の前の

ええ……それどっちにしても嫌なんですけど。

「私がレミア姉様の部屋でこれを見つけて没収してたの、だから違うの」

「え、ええ……」

そうなのか……そう思いその本をチラッと見る。ん？なんか白い紙が挟まれてる。なんと、そこにはフラン姉様が反論出来ぬ程に確固たる証拠が書いてあった。

「フラン姉様」

「ど、どうしたの？もう疑いは晴れたよね？」

めっちゃ目泳いでるじゃねーかこの人。やっぱお前が犯人だろ。

「この紙は何？」

「あっ」

その白い紙にはこう書いてあった。

『これはフランの本だからレミア姉様は勝手に読まないでね☆もし読んだとしても返しておくこと！』

「ごめんなさい私の本でした」

完璧なまでの土下座、この人プライドを完全に捨ててるようだ。

「端的に言つて最低だよフランドルさん」

「名前にさん付けで呼ぶのは死にたくなるからやめて！」

見たくもないがとりあえずその本をパラパラとめくる。案の定どこか俺に似た弟くんは大変なことになってた。

「『頑張ったねー、偉いぞー』」

「お、音読するのは本当に勘弁してください」

ますます小さくなっていくフラン姉様。流石に言いすぎたか。いや、よくよく考えてみると弟もののエロ本溜め込んでる姉ってヤバいからもちょうど言うべきか？

「どんだけマニアックな本持つてるのさ」

「いや、でもそれはまだ普通ぐらいのやつだから…」

え、これで普通なの？こんなやばいことになってるのに？弟くんエグい目に遭ってるよ？

「まあとりあえずこれは見なかったことにするね。フランドールさん」

「ちよつ、見なかったことにしないでいいからその呼び方がいい加減やめてよう！」

しょうがないだろ、距離取らなきゃ襲われそうだし。

「襲われそうだし」

「いや、そんなこと…」

え？断言できないの？嘘だろこの人。

「これから一週間は近づかないでね」

「無理です死んでしまいます…」

いつその事三日ぐらい死んだらその変態性も治るんじゃないか？

「じゃあ聞くけど、フラン姉様的には何処までが姉弟間のスキンシップなの？」

「え、今それ聞くの？」

むしろ今聞かなきゃ俺が危険だろ。全部姉弟のスキンシップで済まされたらたまつたもんじゃない。

「とりあえずフラン姉様の思う姉弟間のスキンシップを言ってみてよ」

「えっ…そうだね」

フラン姉様は少しの間考えて口を開いた。

「まずはキス！」

「ちよつと待て」

こいつの頭がおかしいのか、俺の耳がおかしいのか。どっちだ。

「え、姉弟でキスはするじゃん！」

「しないよー！」

するわけねーだろ！いい加減にしろ！

「キスって言ってもあれだよ？○○と○○同士でのキスとかじゃないよ!？」

「当たり前でしょ、ぶん殴るよ？」

この人と喋ってたら頭がおかしくなりそうだ。大分俺も語気が荒くなってしまっているが仕方ないだろう。悪いのはフラン姉様だ。

「とうかアルクもアルクだよ！いつつも私がどれだけ我慢してるかわかる!？」

「わからないからこうやってキレてるんだよ？」

まさかの逆ギレだ。ガバツと上げた顔に膝蹴りを叩き込んでやりたいが、もしやったとしても俺の膝が壊れるだけなのでやめておく。やだ：俺の身体貧弱すぎ：!？」

「いつつもお風呂上がりの赤らんだ顔で私に擦り寄ってきて！一緒にお菓子食べてるときにどれだけ私が歯を食いしばって耐えてるか！もはや食べるべきものがアルクなのかお菓子なのかわかんなくなるよ!!」

「知らないよ」

ほんと知らねえよ、二億回ぐらい死ね。

「今日はいつともと違って冷たい態度だけどそれもまた好き!!抱いて！いやむしろ私が抱く!!」

「いや近づかないで、これ以上近づいたらレミリア姉様に言うから」

「もう我慢の限界!!問答無用!」

フラン姉様がいよいよ強硬手段に出てきた、見事なまでのルパンダイブだ。俺は成すすべもなく狩り尽くされる、そう思っていたが突如フラン姉様の頬に拳が突き刺さつ

た。そのあと何者かがフラン姉様に馬乗りになって殴った。

「オラツ！オラツ！！」

「グバツ！グバツ！」

「フラン！何してんのよあんだあ！」

レミリア姉様がギリギリで助けてくれたようだ。やはりこの人は頼りになるな。紅魔館の主なだけはある。半泣きではあるが。

「話を聞いた時、どんだけ私にハチャメチャが押し寄せてきたと思ってるのよ！」

「泣いてる場合じゃないよ、お姉様……」

お前はもう黙って大人しくしてろ。

「レミリア、持ってきたわよ」

「パチュリー、ありがとう」

お、パチュリーさんまで来てたのか。何やら頭につけるヘッドギア的なものを手に持つてるけどそれ何に使うんです？

「とりあえずアルク、つけなさい」

「え」

なんで？

「これは辛いことゼーんぶ忘れられる夢の装置なの。だから身を任せてくれたら明日か

らまたいつも通りの日々に戻るわ」

怖い怖い怖い怖い。笑顔でとんでもねえ事言ってるんなこの人。やっぱりまともなのは俺だけのようだ。しかしどれだけ俺がまともでも反抗などできる訳もなく為す術なくその装置をはめられる。

「おやすみなさい、アルク」

「おはよう！アルク！」

「ああ、おはようフラン姉様」

今日はいつも通り紅魔館の手伝いだ。部屋の掃除を…ん？何か忘れてるような…

幕間 「レミリア姉様の部屋からしわくちやの俺の写真が
出てきた…」

俺はこの前の掃除を任されたとき以来、もう掃除をしなくていいと言われた。俺の掃除の仕方が悪かったのかと疑問に思い聞いてみたところ、そうではないらしい。なら何故と思ったがレミリア姉様が笑顔でもういいの、と言ってきたのでそれ以上聞くのはやめた。俺は賢明な判断をしたと思う。

それからはもっぱら書類の整理をしている。特に難しいわけでもなく惰性で出来る仕事だ。ただ、量だけは多いので少し手は早く動かさないといけない。まあそれも前世に比べたらぬるいものだ。俺は仕事部屋のレミリア姉様の横でそんなことを考えながら仕事をしていた。

「アルク、無理はしないでね」

「大丈夫、すごく楽だよ」

そう、楽すぎる程にこの仕事は楽なのだ。小学生でも教えたら一日で覚えられる。

「あらそう？ならちよつと私の部屋に行つてこの資料取つてきてくれないかしら」

「お安い御用だよ」

メモを渡され資料の内容と保管してる場所を把握する。レミリア姉様の部屋は二つほど横にあるので歩いて向かう。

ドアの前についた。がちやりとドアノブを開けて中に入る。中からは不快にならない程度の薔薇の匂いがし、鼻腔をくすぐる。このまま匂いを嗅ぐというのは変態臭いでとりあえず指定された場所に資料を探しに行く。

机の棚の中にあるとのことだが何段目だろうか、とりあえず三段目から開けてみるか。棚を引く、今度はすんなり開いた。ん？今度は？前があつたかのような言い方になってしまった。俺はこんなことをしたのは初めてだというのに。

「えつと……ここじゃないのかな……？」

どうやらここには無いようだ。香水やなんやらが一杯入っている。うわ、これめっちゃ高そう。しかし俺はそこで違和感に気づいた。

「んっ」

二重になつてる。

そう、何やら二重底になっておりこの下があるのだ。まさかここに資料があるのか。なんとわかりにくい。俺は少し怒りながらその二重底になっている板を外した。

そう、外してしまった。

「ひっ……」

そこにはおびただしい量の俺の写真。しかもその全てがカメラ目線では無く何処か違うところを向いていた。さらに何故か全てしわくちや。その事実が指し示すものは、この写真は、

——盗撮だということだ。

「嘘だろ…あのレミリア姉様が…」

俺の顔が冷や汗でジトリとぬめり出す。そこに俺の焦りが現れていた。フラン姉様ならまだ冗談で済ませられた。しかしあの人は、レミリア・スカーレットは、そんな人じゃないはずだ。そんなことを考えていると俺の入ってきた扉がギイイ…と開いた。そこには

「あ」

惨めにも扉で身を隠そうとしてるレミリア・スカーレットが居た。

「最低だよ」

「いめんなさん」

綺麗な土下座だった。三指をついた優雅な土下座。あの後は凄まじい程に怒涛の展開だった。おずおずと姿を現しゆつくりと土下座を始めたので面白くて少し笑ってし

まったじゃないか、いや笑つてる場合じゃないよ。

「というか言つてくれたら写真ぐらい写つたのに」

ほんとこれだ。言つてくれたら何枚でも写るよ俺。

「いや、その」

言いにくそうにするレミリア姉様、何故そこでどもる。めつちや気になるんですけど。尋問するの怖くなつてきた。

「まあいいよ、とりあえずこれ全部処分ね」

「え」

当たり前だろ、これなんかほぼ裸じゃねーか。何処にカメラ仕掛けてんだよあんた。

「それだけはーせめて一枚ーせめて！」

「ええ……」

プライドの欠片も無く俺の足にすぎり付くその姿に涙を禁じ得ない。あのかっこいいレミリア姉様は何処に行つてしまったんだ。カリスマ終了のお知らせにより俺のS AN値も急下降していく。

「ていうか何でこれ全部しわくちやなの」

「えっ!?!いや、あの、勘弁してください……」

あつ……(察し)

「最低」

「ぐうの音も出ない」

いやほんとこれはヤバいだろ、何故姉が自分の写真でいろいろしてることをここで暴露されなきゃならないんだ。こっちは弟としての記憶がバツチリあるからなんか気まずいんだよ！

「咲夜さんにも報告させてもらおうから」

「いや、それだけは、ほんとに。紅魔館の主クビになるから…」

「クビになったらいいと思うよ」

出ていけと言わないだけマシだと思って欲しい。

「だって…」

「ん？」

「だってアルクがエロいのが悪いんだもん！」

「ええ!!」

嘘だろ!!この人逆ギレし始めたぞ！立ち上がってこちらににじり寄ってくるその姿はさながらプレデターだ。俺は哀れな捕食者によって

無残にもいろいろなもの scatter されてしまうのだろう。いや、そんなこと認めてたまるか。

「だ、ダメだよ！姉弟だよ俺達！」

「そんなの関係ない！やってしまえばそれはもう男と女！やれば良からうなのだー!!」
「め、めつちや本性現してるううう!!」

俺はもう死を覚悟した。ここで哀れにも何もかもを奪われ気がつけば弟兼夫となっているんだろう。もうおしまいだ、俺は諦め身を委ねた。

しかし、天はまだ俺を見放さなかったようだ。

突如としてレミリア姉様の頭がガツシリと何者かによってアイアンクローされる。

「お嬢様」

「あつ」

「何を…やってるの？」

レミリア姉様の悲鳴が紅魔館中に響き渡り、この異変は幕を閉じた。

「あの、ありがとうございます。咲夜さん」

「いえ、当然のことをした迄ですわ」

そう言つて瀟洒に笑うメイド長、まあ美人。

「アルク様、もう眠られた方が良いのでは？今日はいろいろなことがあり疲れたと思わ

れるのですが」

「そ、そうですね…もう寝ます」

「ええ、ええ。そうされるのが一番かと」

そう言つて部屋まで俺の横に着いてきてくれたメイド長。やっぱりこの人が一番の良識者だな。この人に一生ついて行こう。

「ではおやすみなさい、アルク様」

「うん、おやすみなさい…」

ふう…今日は色んなことがあつたけど、明日は楽しいことがあるといいな…

「いい夢を…アルク様」

「アルク様！この美鈴が庭の手入れの仕方を御教授します！」

「あつ、はい！お願いします！」

今日は庭の手入れの手伝いらしい。あれ？また何か…忘れている気がする…。

幕間「ある化け猫の視線の遷移」

朝だ、そんな分かりきったことを呟きながらムクリと起き上がる。今日は従えた野良猫を集めて集会をするつもりなので早く起きなければならぬ。最近には妙に上手いく野良猫集めを嬉しく思いながらも、部下が増えることの責任に少し戦々恐々とする毎日だ。まあこれも八雲の名を貰うための修行の一つ、手を抜くつもりは無い。

少し寝癖を気にしながら手で弄り、直そうとする。しかし結構しつこいようで諦める、水で濡らして乾かすとしよう。リビングに向かいながらそう考える。すると前に見た金髪がふわりと揺れていることに気づく。

「お、橙か。おはよう」

「おはようございます！藍様！」

此方は藍様、私の主であり八雲紫様の従者である御方。九尾という妖怪で文字通り九本のフワフワの尻尾を持っている。妖怪としての格はかなりのもので、妖術を巧みに操り地殻さえ変動させる程だ。あの紅魔館とか言う館の奴らを完膚なきまでに敗北させたと言えばどれ程強いかわかるだろう。

私があの中華服の奴を倒してる間に全て終わらせていた藍様には尊敬の念しか送れ

ない。それに比べ私はまだまだ修行が足りていない。

妖術も体術もまだまだ基本レベルだ。搦手でこられたら結構手こずってしまう。だからこそ仲間を増やし、実力をつけ、八雲家に相応しいものにならなくては。

「朝ご飯出来てるみたいだぞ、食べるか」

「はい！ありがとうございます！」

朝ご飯はだし巻き玉子と鮭の塩焼きと味噌汁だった。やっぱり藍様の作る料理は美味しいなあ。…けど味噌が変わったのか作り方が変わったのか少し味が違うように感じた。なんでだろう。顔に出っていたのか藍様が悪戯が成功したような顔をする。

「それ誰が作ったと思う？」

「え、藍様では無いのですか？もしや紫様ですか？」

紫様も料理は一応できる。食べたことはあまり無いが。

「違うよ、これはアルクが作ったんだ。橙が早く起きて修行しに行くと言えたら俺に朝ご飯を作らせてくださいって言ってきてな」

「え…」

驚きだ、アルクは前までこんなにも美味しい料理は作れなかった筈だ。形容するならば『普通』という言葉が一番似合う料理だった。特段まずいわけでは無いが美味しいわけでもない。そんな料理。

しかし今食べてるこの料理達は藍様の作ったものと遜色無いほどに完成度が高い。だし巻き玉子は焼き後が全くないほど綺麗で艶めいている。鮭の焼き加減も身がプリプリとしつつ中まで火が通っている。味噌汁に至っては私個人の意見だが藍様の作ったものより好きかもしれない。

「あいつ、俺に出来ることはこれぐらいなのでつて笑つてたよ。後でお礼の言葉でもかけてやれ」

「は、はい！」

弟分のまさかの進化に戸惑いつつ朝から美味しい料理を用意してくれたことに感謝するのであった。

「もうそろそろ行くのかな」

集会の時間が近づいて来たので行く準備を整えることにする。きちんとした身なりでないと八雲の名に泥を塗ってしまう。まだ名は貰ってはいないといえど私も八雲家の一員だ。細かいことを気にしていかなければならない。そんなことを思いながら鏡を見て変なところはなにか確認する。いつも通りの顔がそこにあった。身なりの確認は出来たのもう行くこうと玄関に向かう。

「あ、いた。橙、ちよつと待つて」

「アルク？どうしたの？」

そこにはエプロンを纏い、三角巾を頭に巻いたアルクがいた。男の子だが可愛いという印象が真つ先に出てくる辺りこの子は本物だな、と突拍子も無いことを考えながら何故引き止めたのか問う。

「お弁当、作ったから持つていつて」

「え、良いの？」

「良いの良いの、朝ご飯のついでに作ったただだから。あ、あと次からは朝早い時は言つてくれたら朝ご飯とお弁当作るからね」

なんだこの可愛くて優しい生き物は。思わず飛びかかつてほつぺたをスリスリしてやりたい欲に駆られるが寸でのところでこらえる。私はあの吸血鬼姉妹とは違うんだ。

しかし朝ご飯まで作つてくれてさらにお弁当までとはまるで良妻だ。全ての男が想像する女性の理想像に近いだろう。アルクは男だが。

「あの、朝ご飯ありがとうね。凄い美味しかった！」

「そつか、良かった。作った甲斐があるよ」

そう言つて笑うアルク、腰が凄く色っぽくてドキドキする。

私は朝からなんてこと考えてるんだ。これじゃまるで色情魔じゃないか。この前の

おままごとから私は少しおかしいのだろう、アルクの至る所に色気を感じてしまう。腰に肩に脇というマニアックな部分にまで。だが今はとりあえずそんな思考を振り払う。

「アルク、帰ったらまた遊ぼうね！」

「うん、待ってる」

野良猫達は今のところ三つのパターンに別れている。従順と様子見と反抗。全て文字通りだ。従順と様子見はまだいいが反抗が少し厄介。隙あらば私が作った群れの長になろうとしてくる。その度に叩き落とし格の違いを見せつけているのであまり問題は無いが、めんどくさい。

気持ち少し落ち込みつつ休みをとる。そして、どれだけ憂鬱でも腹は減る。私はアルクに渡されたお弁当の巾着をスルスル解く。すると何かメモのようなものが一緒に入っていた。そこには一言。

『無理はしないようにね』

と書かれていた。

なんで私が無理してるとわかったんだらうか。アルクはまだうちに来て全然時間が経ってないというのに。

涙が拭つても拭つても溢れてくる。自分でも気づかないうちにいろいろ溜め込んでいたのかもしれない。相談する相手は居ないから吐き出せていなかったのもあるだろう。

「あはは、ちよつと急ぎすぎたかなあ…」

その後のお弁当は今まで食べた何よりも美味しかった。

「ただいまー」

「おかえり、橙」

アルクはどうやら玄関で待つててくれていたようだ。凄く嬉しい。思わず笑顔になつてにやけてしまう。少しアルクが怪訝な顔をするがまあ仕方ない。今の私は少し気持ち悪いと自分でも思うから。

「なんか良いことでもあつた?」

「うん!」

そう返事をする目と目を細めてアルクも笑顔になる。それが嬉しくて私も笑顔で返す。

「そつか。晩御飯作るからお風呂入つてきなよ」

「あ、うん。臭かった？」

「いや？土汚れが所々あったから」

臭かったかと匂いを嗅ぐがどうやら違ったらしい。面と向かって臭いと言われたらシヨツクを受けてしまうので良かっただろう。とりあえずお風呂場に向かう。あ、お弁当のことにしてお礼言わないと。

「あ、アルク。お弁当凄く美味しかったよ」

「良かった、どれが一番美味しかった？」

「全部美味しかったけど一番は卵焼き…かなあ」

暖かい気持ちになる卵焼きだった。もしかしたらああいうのをおふくろの味とか言ううのかも知れない。アルクママ、いや、アルクパパか。

「結構自信作だったからね」

そう言って少し自慢げな顔をするアルクを見て私は

——顔真っ赤になるまで恥ずかしがらせてやりたい。

という思いにしかならなかった。もう自分の気持ちを包み隠すこともしなくなつた私は無敵だ。

端的に言うとは私はアルクのことを大好きになった。それは家族として？異性として？それはどちらとも言えない。

愛に大ききの違いはあれど種類は無い。愛は愛だ。

だからこの『アルクを虐めて可愛い顔を見たい』という気持ちもそんな大きすぎる愛の代償だろう。そして、可愛いもの程虐めたい。それは自然の摂理のようなものだ。自然に抗うことなど不可能、だから私はこの気持ちを受け入れて行こうと思う。

私のことをちやんと見てくれたアルクを私の全力でもって愛したいから。

「…あ、あの橙。顔ちよつと怖いよ？」

「あ、ごめんね。瞬きするの忘れてた」

まあ、まだまだ先は長いし焦ることは無いだろう。いろいろな本を見たりしてアルクを落とす方法を考えよう。アルクといえど男であることは変わらない。

ドロドロに蕩けさせてあげるから、待っててね。

そんなことを考えながら妖しい笑みをアルクの後ろで浮かべる橙であった。

幕間「アルクの誕生日パーティー」

「アルクって誕生日いつ？」

唐突に橙がそう聞いてきた。俺にその質問が地雷だということにも気がつかずに。

俺は自分の誕生日を知らない。俺の誕生日祝いだけやってなかったのでお姉様達も実は知らないらしく俺の誕生日を把握しているものはこの世に居ないことになった。

え？出産の立ち会いはしたんじゃないかって？いやあのクソ親父が低脳が移るとか言って赤ん坊の時ですら俺を姉様達に会わせなかったらしい。ほんとクソだわ。まあ自立出来るようになり姉様達に会いに行っていたが、その後すぐに監禁だ。どんだけハードモードだよアルクの人生。

「俺、自分の誕生日知らないんだ。だから誕生日わかんないや、ごめんね」

「ぐふう!!がはっ!!」

申し訳なさそうにそう言うとき橙が吐血した。いや今の発言でなんでそんな口から大量の血が出てくんだよ。まるで槍にでも刺されたかのような吐血の仕方だな。

「こんなの望んでない、こういうのじゃないんだよう。あつ、良心の呵責で死ぬ」

「別にそんなことで罪悪感覚えなくて良いよ」

「私は気にするんだよう」

そう言つてぐすぐすと泣き出す橙。なんか俺が悪いことしたみたいじゃねえか、やめろよ。

「俺はここに來ただけでも幸せだから」

「あるくううう、うっ、ぐすっ」

いきなり抱きついて押し倒してきた橙。離れる離れる、そこから先は有料だぞ。

「私、ちゃんとアルクの誕生日祝つてあげるからね。あつ、そうだ毎日アルクの誕生日にしようよ、そうしよう」

「流石にそれは」

「いい事を言つたわ！橙！」

襖がガラツと開き、紫様が出てくる。なんでいつもここぞというタイミングで現れるんだよ。無駄に目をキラキラさせやがって。

「アルクの誕生日パーティーをしましょう！盛大にね！」

誕生日わからないの？

「アルクの誕生日パーティー？」

「そうよ、一応呼んでおいた方がいいかと思つて。ほんとは呼びたくなかつたけど。あ、ちなみに一週間後ね」

「もし呼んでなかつたら刺し違えてでも殺してたぞ」

私は立ち上がり、何をどうするかを考える。何せこの誕生日パーティーは普通ではない、愛する弟のものだ。張り切るに決まつている。今までも落ち着いたらそういうイベントをしようと考えていたが狂気のせいで無理だった。しかし今は当然大丈夫。ならば盛大に盛り上げてやろう。

「やはりサプライズにすべきかしら……」

「あまり派手なのはアルクは好まないわ、やり過ぎないようにね」

「貴様に指図される筋合いは無い」

正直こいつは今になつても好きになれない。いや大嫌いだ。この世で一番嫌いと言つても差し支えないだろう。なし崩し的にアルクを預けることにはなつたがいつか必ず奪つてみせる。

「あとアルクは和食の方が好きみたいよ」

「なにっ！」

それは聞き捨てならない。まさかアルクが和食の方が好きとは……しかしこの館に和

食を完璧なレベルに作れるものは居ない。ならばどうするか…あ、和菓子なら咲夜が作れたな確か。

「料理はアルクの希望ですき焼きにしようかと思ってるわ」

すき焼き、一度だけ食べた覚えがある。中々に美味しかった。特に目を見張ったのはあの醤油とかいう調味料だ。豆を発酵させて作ると聞いたときは驚いた。

「まあそれはいい、アルクの望みならそれを叶えるまで。和食ならそっちの方が理解はあるだろう、メインの料理は任せる」

「お安い御用よ」

そう言つて胡散臭い笑顔で笑うスキマ妖怪。イライラさせてくれるな。

「しかしメインの菓子はこちらで用意させてもらう、それでいいな」

「別に構わないわ」

そうと決まれば早速咲夜に和菓子を練習させよう、一週間しか時間は無いが咲夜なら能力使つてでもなんとかしてくれるだろう。相変わらず有能な従者だと実感する。

「ダメです」

「な、なんでよ咲夜！」

まさかの従者の裏切りに驚愕しながら咲夜の返答を待つ。返答次第では私は怒り狂

うだろう。しかし、帰ってきた答えは全く予想もしないことだった。

「正確には私だけが作ることを良しとはしません」

「それはどういう…」

「お嬢様達も作ってください」

「な、何故!?!」

ほんとなんでなんだ。私達が作ったところで咲夜やあのスキマ妖怪の従者レベルのものを作れるわけがない。恥を晒すだけだ。

「いいですか、お嬢様。今お嬢様は完成度が高くなければいけないという固定概念に囚われているのです」

「どういうことだ…?」

「家族の誕生日を祝う為の料理を家族が作らなくてどうしますか。私は所詮アルク様から見れば他人。そんな他人の作った菓子で真にアルク様が喜ぶわけがございません」

青天の霹靂、驚天動地、雷に打たれたような言葉だった。考えてもみなかった。そりやそうだ、私は完璧主義だったから。しかし今の咲夜の言葉で家族というものの複雑さを学んだ気がした。

「ですから今からフラン様も交えて一緒に作りましょう。安心してください、そんな難しいものを作る気はないですから」

そこから一週間、咲夜の料理教室が始まった。

「誕生日パーティーですか」

「ええ、来るでしよう？」

「友達なので聞くまでもないですよ」

友達っぽいイベントがきたことで私のテンションは有頂天です。当然のことながら何をあげようか考える。あ、ペアでつける指輪とかどうですかね？旧地獄で採れたダイヤモンドを使ったやつ。え？重い？

「相変わらず友達に拘るわねー」

「ふん、友達や知り合いが沢山居るあなたにはわからないでしょうね」

妖怪の賢者とかいう人に慕われるような日の目を見る役職の方にはねえ！わからないでしょうねえ！

「まあ、誕生日パーティーではあんまりギスギスしないでね」

「当たり前です」

それはアルクさんにとって負担になるので絶対にはいけないことだ。

「こいしちゃんにも聞いておかないとね」

「あの子なら絶対来るでしょうけどね」

最近は良く部屋にこもって何かしているようだがあの明るいこいしの事だ、必ずアルクさんのお祝いをしに来るだろう。

「しかし姉妹で見事に性格が反対ね」

「ほつといてください」

それは自分でも理解してるし今更言わなくていいことだ。

「じゃあ一週間後に私の家でやるから、宜しくね」

「了解です」

とりあえず今はアルクさんに送るプレゼントのことだけを考えておこう。そうしよう。

そこから一週間さとりは旧地獄の各地の鉱石場を渡り歩いた。

誕生日当日。俺は結構ワクワクしていた。前世の時も祝ってもらったことなど皆無だったのであまり誕生日を意識したことがない。

そんな俺が誰かに誕生日を祝ってもらえるのだ、気分が高揚しても仕方ないだろう。

「すき焼きの用意はもう出来てるぞ」

「あ、はい！ありがとうございます」

そんな様子を見て藍さんはどうやらお腹が空いたとでも思ったらしい。頭に尻尾を置きながらすき焼きの様子を教えてくれる。

「しかしすき焼きが食べたいとはまた意外なことだな、寿司でも良かったんだぞ？私が握ってやろう」

「た、多彩ですね」

「紫様の右腕ならばこれぐらいできなくてはな」

そう言つて腕をまくる藍さん、まるで板前のようだ。

「でもすき焼きで良かったんですよ、食べたかったので」

「まあアルクがいいならいいんだがな、少しチョイスが渋かったから笑つてしまった」

まあすき焼きは美味しいから仕方がない。しかもあれは後日すき焼き丼にして食べられるというお得感まである。

「あ、もう皆来たみたいですね」

「みたいだな」

外から話し声が聞こえる。これは姉様達と紅魔館の皆だ。あとさとりさんとこいしさんにお燐と、あと誰かの声。

「来たわよ！アルク！」

「私も来たよ！」

二人が障子をガラツと開けて入ってきた。相変わらず姉妹で凄いい仲良いなこの人達。

「私達もいるよアルクくん」

「私もです」

さとりさんとこいしさんも横からひよっこりと出てきた。

「これで全員集まったわね、じゃあアルクの誕生日パーティーを始めるわよ！」

紫様がそう宣言する。まあそんな大層なパーティーでもないけどな。とりあえずすき焼き食おう、楽しみで仕方ないんだこっちは。もう藍さんが用意してくれていたみたいなのであとはすき焼きの具材を入れるだけだ。

「よし、すき焼きを作っていくぞ。手順としてはまず最初に牛脂をひく、そしてネギを焼いてから牛肉を焼く。ここまでいいか？」

ジューっと肉を焼いていく、どうやらメイド長がメモを取っているみたいだ。藍さんが懇切丁寧に解説してるわけがわかった。

「そして両面がこのように程よくピンク色が残るぐらいまで焼いたら、用意していた割り下を入れる。そこから他の具材を入れるんだ、手順が違うだけで大きく味が変わるから気をつけろ」

「ありがとうございます、勉強になりました」

「別に構わない。主同士で仲が悪いからといって私達まで険悪になる必要は無いからな」

そう言つて少し微笑む藍さん、紫様よりよっぽど大人の女性という感じがする。この前橙と一緒にコマ回しをして大人気ない姿を見せていた紫様に見習つて欲しいものだ。

「よし、そろそろだな…アルク、皿を貸してくれ。入れてあげよう」

「あ、ありがとうございます」

肉、白ネギ、豆腐、糸こんにやくと満遍なく入れてくれる。卵に浸かったそれらはキラキラと輝いてまるで宝石のようだ。

「いただきます」

「冷めないうちに召し上がれ」

肉を選ぶ、めちやくちやデカイ。黒毛和牛とかいう幻のお肉らしい。俺の前世でも見たことない肉だ。それを卵にタップリと潜らせて口に入れる。

舌がとろけた。

比喩や嘘では全くなく本当にとろけてしまった。まるで飲み物のように柔らかく肉本来の旨味が口内で爆発物のように弾ける。それは例えるなら肉の兵器。肉のC4爆弾だ。

「う、美味すぎる…」

「はっは！それはよかった！作ったかいがある！」

俺の素が出るほどに美味い。これがすき焼き…？俺が今まで食ってきたすき焼きって何だったんだ？

「ほお…中々美味しいわね」

「お姉様！めっちゃ美味しい！はぐっ！むぐっ！お肉柔らかくて…もぐもぐ…美味しい！」

フラン姉様は少し落ち着いて食べ。まるでスラム街の子供が初めてまともな食事をとったかの如くがつつく姉を見ていると少し将来が心配になる。

「私は中華しか作れませんからねー。和食作れる人は凄い憧れます」

「あら、じゃあ美鈴藍さんのところに弟子入りでもしてきたらどうかしら」

「私門番なので…」

美鈴さんは意外にもゆつたりと食べているようだ。この人めっちゃガツガツ食いそうなイメージだったんだけど。

「私も…私もこれぐらい上手く和食を作れたなら…」

「まあ一応お姉ちゃんも調理師免許持つてるしいんじゃない？」

「確かに作れる料理の種類なら勝てるかもですけど…」

あ、そういえばさとりさん調理師免許持ってたなそういえば。

「私もタイ料理とかならさとり様にお教え出来るんですけどねー」

「私は料理はダメかな…」

お燐さんと…誰だこの人。あれ、今更だけどほんと誰だこれ。

「あの」

「んー？どうしたの？」

カラスのような羽根を持った黒髪の女の子だ。こんな子見たことない。お燐さんの隣にいるということは地霊殿関係の人だろうけど。

「はじめまして、ですよね？お名前は？」

「ああ、そういえば。私の名前は霊鳥路空、お燐と同じさとり様のペットだよ。君さとり様の友達なんだよね、宜しくね」

「よ、よろしくお願いします」

へえ、やっぱりお燐さんと同じような人か。

「あ、あと誕生日おめでとうね。特になにかあるというわけじゃないけどさとり様からのプレゼントは私も手伝ったよー」

「あ、ありがとうございます」

お礼を言うのにへへと笑う、邪気のない人だな。

そんなことを言ってるうちにすき焼きを食べ終えた。お腹いっぱい肉を詰め込んだので満足だ。しかししょっぱいものを食べると甘いものが食べたくなる。なにか甘いものは無いだろうか。そう思っているとレミリア姉様がいきなり声をかけてきた。なんだろう。

「アルク。アルクって、和菓子って好き？」

「はい、大好きです」

和菓子は洋菓子より好きだ。特に餅類の和菓子が。

「あの、和菓子、食べる？」

「え、食べたいです！」

やった、この世界に来てから和菓子は結構食べたがそれでもやはり嬉しいものは嬉しい。
い。

「おはぎ…なんだけど」

「凄く嬉しいです！」

「あつ、そうなの？」

やった、やった。おはぎは大好きです。俺の和菓子ベスト3に入ってる。

「これがそうだから…開けてみて」

「ありがとうございます！」

受け取った重箱をパカツと開けてみると形は不揃いだが確かにちゃんとおはぎが入っていた。感動だ。

「その形の不揃いなのは、あの、私とフランの作ったやつで。あとは咲夜のやつだから、咲夜のやつ食べなさい」

なにかレミリア姉様が言っていたが俺は聞いてなかった。真つ先に不揃いなやつを手につけて食べる。

美味い

甘いものというのは口に入れるだけで幸せになれるとはまさにこの事。小豆と餅の相性の良さを噛み締めながら一つ二つと口に放り込む。

「あ、アルク。それ私達の作ったやつで…」

「美味かったです！全部！」

「え!?もう食べたの!?!」

一気に食べてしまった。喉を詰めるか不安だったがそんなことを気にしないほどうまくいった。やはり菓子は和の方がいい。

「…こんな嬉しいものなのね、自分の作ったものを美味しいといって貰えるのは」

「私も作ったんだよ！」

あの不揃いなやつは姉様達が作ったのか。全然話聞いてなかったから今気づいたわ。

「ありがとうレミリア姉様、フラン姉様」

「ええ、こちらこそ」

「うん！また作るね！」

じゃあ次はきな粉餅で。

そこからは誕生日パーティー恒例のプレゼント渡しだった。姉様達含めた紅魔館からは大量の本と魔道具をいくつか。そして八雲家からは何やら武器を贈られた。

「まあ護身用だ、一応身長と重心に合わせて作ってあるから持つてみる」

それは一本の刀だった。小太刀ほどの長さの小ぶりのもので俺にピッタリとフィットする長さで重さだ。いい刀だなコレ。まあ使う時がくるかはわからんけど。

まあここまでは良かった、実用的だし特になにか重いわけじゃないし。本とかは特に俺にとって嬉しいものだ。

しかし問題はさとりさんのプレゼントだった。

「こちら旧地獄で採ったダイヤを鬼の研磨師に削らせたもので作ったペアリングです」
いろんな意味で重いわバカ。

「これで一層私とアルクさんの友情は深まるわけです」

「あれ流石に重いわよね？」

「シツ…紫様、ここは黙っておきましょう」

しかもなんで左手薬指につけてんだ！このバカは！

「あ、私がつけてあげますよ。ふふ、アルクさんに絶対似合います」

「あ、ありがとうございます…」

そんなハプニングもありながらも最終的には平和に終わった。そして最後まで誕生日の主役の気持ちを味わってみた感想だが

まあ、悪くないんじゃないかな。

幕間「名探偵だよ!妹紅ちゃん!」

何の変哲もない平和な幻想郷、こんな日は風にゆらりゆらりと身を任せうとうとと寝てしまいたいになる。藤原妹紅はそんな当たり前な日常を謳歌していた。

職場であり趣味でもある焼き鳥屋も客足が落ち着いたので、夜まですることが無い。友人である慧音の所にでも向かおうかと腰をあげる。どっこらしよ、とおよそ女性が一般的に使うことのない掛け声を出しながら。

スタスタと人里の方に歩いていく、お土産に持ってきた焼き鳥の冷めないうちに向かわねばと、ある種の使命感に駆られながら。

人里の守衛に少し会釈して人里に入る。里の守護者も兼業している自分は顔パスで入れる、そのうえ歩いていると野菜や魚を押し付けられいつも慧音の元に着くまでに大荷物になってしまう。

そんなにいらないと言っても、無理矢理笑いながら渡してくるから少し困るのだが。まあ人柄が良い奴らばかりなので困る事はあつても怒ることは無い。実際、焼き鳥屋の箸休めみたいなものを作るときには便利だったりするし。

両手に食材や調味料を抱えながら寺子屋の扉を叩く。この時間なら慧音は授業も終

わり休んでいる筈だ。

「はいはい、つて妹紅じゃないか。どうしたんだ？」

青髪がひよこりと扉から頭を出しこちらを不思議そうな目で見てくる慧音。あの可愛らしい容姿から、あの威力の頭突きが炸裂するのだから恐ろしいものである。

「遊びに来たんだ、焼き鳥屋が暇になつたし」

焼き鳥を入れてある容器を見せながら慧音に笑いかけると慧音も笑い返し、快く中に入れてくれた。

焼き鳥を片手に慧音と駄べる。慧音は酒を飲んでいないがそこには和気あいあいとした雰囲気満ちていた。

慧音はあまり酒は飲まない、飲むとしても次の日が寺子屋の授業じゃないときと決めてるらしく、私が飲んでいても慧音が飲んでいないことはざらにある。何とも教育者のお手本のような奴だ。

そんな慧音が、素面だから余計にだろう。凄く深刻な顔をしていた。慧音がそんな顔をするときというのは生徒か、もしくは近しい間柄の人間に何かあつた時だ。一体どうしたというのだろう。

「あ、いや。ちよつと今相談を受けていてな」

「相談?」

まあ、教師としてかなり慕われている慧音に相談するのは、至極真つ当なことだろう。私が仮に生徒でもそうする。

「お前なら言つてもいいと思うから言うが：それがアルクからなんだよ」

「アルクから?」

へえ、あいつから。友人である私より先に慧音に言うというのは、よつほどの事なのか。

正直検討がつきすぎて、どれなのかわからない。悩みの種は姉か、居候先か、さとり妖怪かどれだ。私がそうしてうんうんと唸っていると慧音がその相談内容を言いにくそうに話し始めた。

「それがだな：下着泥棒が頻繁に起こる、らしいんだ」

「ああ、なんか納得だ」

「ええ…」

慧音が困惑しながらなんとも言えない表情を浮かべるが、こつちにしてみたら予想してたものの中の一つだ。あいつらならやりかねん。

「それでだな、妹紅。お前さえ良ければ犯人を突き止めてくれないか?」

なんでも、寺子屋の生徒では無いとはいえ、相談してきたいたいけな子供を見放す訳には行かない。ということらしい。私としても友人が変態共に困らされることを見過ごすつもりは無い。全員罪を裁いてやる。

犯人は震えて待っている。

「と、いうわけだ。自首しろお前」

「開始早々、推理放棄し過ぎじゃない？」

恐らく犯人だと思われる奴らを、全員寺子屋の一つの教室に集めた。そして一人ずつ隣の教室に呼び出し事情聴取することになった。まずはレミリアだ。こいつは犯人確定、速やかに豚箱にゴールインしてもらおう。

「そもそも私の何処が犯人だっていうのよ。私はアルクの姉よ？そんなことする訳ないじゃない」

「いやお前今までのこと振り返って、もう一回その言葉を言ってみろ」

そう言うとも明後日の方向を見て口笛を吹き出した。ぶん殴りたくなる欲を抑えながら取り敢えず事情聴取っぽく話を聞いていく。

「パンツが無くなったのは三日前、その日お前は何をしていた？」

「三日前…三日前は、あの、あれよ」

あれってなんだ。嘘つくの下手かお前。

「えっと、そう!中庭でカバデイしてたわ!」

「犯人だ。捕まえろ」

部屋の前で待機していた守衛達と慧音に連れていかれるレミリア。自分が悪いことをしたと自覚しているのか抵抗はしなかった。

手錠がかけられ、上着を頭から被せられる。まさに犯人という言葉がお似合いの姿だ。

そして、ちらりとこちらを哀愁漂う目で見るレミリア。何か言いたい様子が伺える。

「覚えておくといいわ…アルクのパンツは嗅いでよし、見てよし、食べてよしのよ…」
「早く連れていけ」

次は妹のフランドール・スカーレットだったが、あいつは頭にアルクのパンツを被っていたので事情聴取をせずに現行犯逮捕した。

私は犯人じゃない、と最後まで暴れていたがあれは無理があると思う。正直、脳味噌

が空気かなんかで出来てるんじゃないかと考えてしまうのも致し方ない。

「よし、次も頑張ろう」

紅魔館組が終わり、次は八雲家になる。

一人目の八雲紫は終始胡散臭かったが、どちらかというといつは母親ポジションなので犯人ではないと考えた。

二人目の八雲藍も無いな、無い無い。あいつは事情聴取中も犯人に対して憤慨していたのでわかりやすかった。

「ということでお前が犯人だ」

「ええ！私じゃないですよ！」

橙、八雲藍の式。そしてアルクの姉貴分。こいつを見た時に、私は直感した。

『真性のサディスト』そして『狂愛主義者』だと。

長い間生きてたら、目を見ただけでこういう危険な奴は分かるようになる。

「そもそも、私が犯人だと言う証拠は何処にあるんですかあ？」

「じゃあアリバイだ、そこまで言うならあるんだろう？」

そう言うニコニコしたまま、その日は藍様とお仕事でしたよ、と答えた。念の為八雲藍に聞くと橙の言う通りだと言う。

「ならばお前の持つ能力は?」

「妖術を扱う程度の能力、ですね。手品レベルですけど」

聞くと視覚トリック的なものの上位互換程度らしい。少し姿をくまますという程度。

「八雲藍と仕事と言っていたがそれは泊まりがけか?」

「いえ、晩御飯頃には戻りますね。アルクが作ってくれたので嬉しかったのを覚えてます!」

笑顔でニコニコと嬉しそうに話す姿は、本当に幼い子供のようだ。まさか私の気のせいだったか?

「…そうか、どうやら私の気のせいだったみたいだな」

「いえいえ、今日の予定といっても、この後野良猫達に会うぐらいなので!」

……ようやく尻尾を出したな、このサディストめ。

「最後に一つだけいいか?」

「なんででしょう?」

「お前、野良猫を操れたりしないか?」

「…まあ、簡単な命令くらいなら。けど、パンツを取ってこいなんて命令は出してませんよ。」

実は私は慧音と共に一度現場に行ってる。依頼を受けて直ぐにマヨヒガまで飛んでいったのだ。そこで慧音と共に何か証拠はないか探していた。

そして、突然だが慧音の能力をご存知だろうか。

そう、『歴史を食べる程度の能力』だ。そして、能力を発展させて食べた歴史を自身で確認することも可能となっている。

これはかなり制限のある能力でもあり、格上の相手などの歴史を食べることは出来ないなど、色々な制限がある。

しかし、それが野良猫の歴史ならば？ 答えは容易にその歴史を確認することが可能だ。

マヨヒガに居る野良猫の歴史の一部を食べた慧音が見たのは、野良猫がアルクの部屋からパンツを持っていった一部始終。そこで犯人は猫を操ることが出来る能力、もしくは種族。私はそう考えた。

「と、いうわけだ。最初からお前の負けは確定的だったんだよ。おつかれさん」

「あ、ありえない……完璧な計画はずだったのに」

いや、結構穴あるしガバガバだろこの作戦。インテリそうに見えて頭悪いのかこいつ。てか野良猫に頼むくらいなら潔く自分で盗め。

守衛達に橙は連れていかれ、八雲藍と八雲紫が愕然とした表情でそれを見ている。そ

んな状況でも橙はニコニコと笑ってこつちを見てきた。

「覚えておいてください、私もまたアルクのパンツに狂わされた被害者の一人だということ…」

「連れていけ」

そして、あと残すところはさとり妖怪の姉妹となった。

「まあ、私が犯人なんてことは方に一つも有り得ないんですけどね。そんなのアルクさんを裏切る行為と同義じゃないですか、ふざけないでください」

ドヤ顔でふふん、とこちらを自信満々に見てくる古明地さとり。

「お前ポケッツからトランクス出てるぞ」

「えっ!私がつってるアルクさんのコレクションはボクサーパンツの筈です!嘘おっしゃい!」

「お姉ちゃん?」

こうして幻想郷から悪は滅びた。またその悪が復活するときまで、名探偵妹紅は頑張らなければならぬ。一人の大切な友人を守るため。

幕間 紅魔館の日常

穏やかな紅魔館、チュンチュンと鳥が囁り、朝の訪れを予感させる。そんな穏やかな朝に不釣り合いな程に紅魔館の雰囲気は淀みに淀みきつていた。

「フラン、貴女またアルクの部屋で寝ようとしたわね？普通に考えてそこは長女である私がアルクの横で寝るものでは無くて？」

「いや、ていうかお姉様がアルクの隣で寝たら何するか分からないから、私が横で寝てるんだけど？まあアルクには断られたけど、多分照れ隠しだし、私の方がお姉様よりおっぱい大きいし」

そう言つてドヤ顔でレミリアを煽るフラン、アルクに添い寝を断られているというのに凄まじい余裕だ。

「胸の話は今関係無いだろ！いい加減にしろ！！てか、そんなに変わらないじゃない！」
「でも実際私の方が大きいよね？」

むむむ……とレミリアは頬を膨らませて怒る、生きた年数は何百年といえど吸血鬼の年齢で換算するとまだ子供だ、感情的になるのも仕方ないことだった。

「何がむむむ……だ!!」

「は? 殺すわ」

レミリアは完全にキレた、堪忍袋の緒が。フランに飛びかかるレミリア、それに対抗するように構えるフラン、お互いの拳が交差し部屋にある物が次々に壊されていく。

「オラア! 生意気なのよ妹の分際で!!」

「その妹に色んなところで負けてどんな気持ち? ねえ、どんな気持ち?」

「又ウン! ヘッ! ヘッ! アッ! アッ! アッ! アッ! アッ! アッ! アッ! アッ! →アッ →アッ →アッ →アッ →アッ!」
アッ! アッ! アッ! アッ! アッ! (マジギレ)」

完全に口ではフランの方が上だ、冷静な状況での知恵勝負なら確実にレミリアの方が上だがこの煽りに黙っていらられるほどレミリアは大人ではなかった。

「フラン姉様、レミリア姉様、朝ご飯の時間ですよつて、ええええええ!!」

アルクは扉を開けた瞬間に、朝から姉二人がマジの殴り合いをしているという状況に早くも脳の処理が追いつかなくなっていた。

「ちよっ! やめてくださいい姉様達! 屋敷が壊れますから!!」

「四人に勝てるわけないだろ!! (フォーオプアカインド)」

「馬鹿野郎! お前私は勝つぞお前!! (スピア・ザ・グングニル)」

槍とか炎とかも飛んできてるんですけど!? と、アルクは部屋の端でヒイヒイ言いながら蹲るしか無かった、彼は強者にはとことん弱いのだ。そもそも、あんな質量の魔力を

くらったら確実に消滅は不可避である。

「た、助けを呼ばなければ…」

「ずりずりと四つん這いのまま部屋を出るアルク、そのまま向かった先は…」

「パチュリーさん！助けてえ！」

「アルク？どうしたのかしら、そんな血相を変えて」

「姉様達が…」

パチュリーさんには姉様達が狂ってしまい殴り合いをしていること、あと多分部屋が壊れてしまつてることを話した。すると、みるみるうちに目が死んでいき青筋が額に浮かんできた。

「曲がりなりにも紅魔館のツートップが殴り合いの喧嘩なんて…情けないにも程があるわね…」

「な、何とか出来そうですか？」

「何とかするわ、伝えてくれてありがとう」

「そう言うとは何冊か魔導書を持ってパチュリー様は図書室から出ていった。」

「あ、アルクさん！こんにちは！パチュリー様はどうされたんですか？」

「小悪魔さん…」

「こあでいいですよ！」

ひよこつと本棚から顔を出す小悪魔さん、この人いつも図書室で掃除とかパチュリーさんのお世話とかしてるけど、何者なんだろう？全然この人のこと知らないんだよな俺。

「パチュリーさんは暴走した姉様達を止めに行っていたみたいです…」

「へえ…また喧嘩してるんですねレミリアお嬢様とフランお嬢様」

「いつも姉がすいません…」

平謝りで小悪魔さんに頭を下げる、なんで俺がこんなペコペコしなきゃいけないのかは謎だがまあしょうがないだろう、一応弟としての態度というものもある。

「いえ、アルク様も大変ですねえ、結構ストレスとか溜まるんじゃないですか？」

「え？ええと…」

「良かったら私が発散させてあげましょうか…？」

そう言つて小悪魔さんは俺の耳にふっ…つと息を吹きかける。「ひゅいつ!!」つと変な声が出てしまうが、それよりもいきなりの展開で頭が上手く回らない。

「ふふっ可愛いですね…耳、弱いんですか？」

「こ、小悪魔さん…だめえ…」

「ああ、そんなトロトロな顔してると、悪い悪魔に食べられますよお？」

「何を、してるのですか？」

「アツツツシヌツツ」

小悪魔さんは身体中にナイフが刺さって死んだ、ご丁寧におしりの穴にまで刺さっていた。ピクピクと動くその姿は、先程までの妖艶さは微塵も感じられない。ツンツンと啄くと死にかけのゴキブリのようにジタバタして少し面白い。

「アルク様、大丈夫ですか？何もされていませんか？」

「あつ、うん…」

「あのゴミ…失礼、小悪魔は後ほど拷問にかけるので、今後一切あのようなことは起きません、ご安心ください」

この人今、曲がりなりにも同居人なはずの人を「ゴミ」って言わなかった？

「ところで耳が弱いのですか？」

「え？」

「いえ、なにもないです」

いや、バツチリ聞こえてたからな、この鉄仮面むつつりメイドが。

|||||

「このっ！さっさと倒れなさいよ！」

「そっちこそ！」

ドンツッ！ゴキヤツッ！メキヤツッ！とおよそその体軀からは出ないような音が次々と辺りに響く。しかし、いつまでもその争いは続かなかつた、何故ならばその二人を拘束するように重厚な鎖が上から降ってきたからである。

「うおっ！」

「キヤツッ！」

「レミリア、「うおっ！」は無いでしょ、貴女一応女の子なんだからその反応は……」

「うるっさいわね！パチュリー！」

「これで私が女としても優れていることがわかつたね（笑）」

「フラン、女の子はマジの殴り合いはしないし、そんな性格の歪んだ煽りはしないわ」

パチュリーは天井から吊るされる二人を見て深々とため息をつく、友人としてもこんな状態の二人をこのままにしておくべきか、迷っていた。

「貴女達、アルクが困っているわ。少し落ち着きなさいな」

「アルク!?アルクは何処!?」

「レミリア貴女、麻薬中毒患者みたいになってるわよ」

目を血走らせアルクを求めるその姿は、確実に紅魔館の主としての矜持を失っていた。

「お姉様、おちおち落ち、着いて、てててて」

「落ち着くのは貴女もよ、フラン」

そもそもアルクに好かれたいなら、その態度を今すぐ改めないという意味が無いと思うんだけど……と、パチュリーは嘆息する。

スカレット姉妹、最強最悪の吸血鬼の姉妹、破壊と運命を司る災厄。パチュリーはこの二人をそう認識していた。アルクと二人が出会うまでは。

「それが今ではこれだものね……」

「何か言った？パチュリー」

別に何も無いわ、と話を切り上げ部屋から出ていくパチュリー。魔法で作った鎖を解かず。

「パチュリー？これ解いてくれないかしら、ていうかこの鎖どうなってるの？全然壊れないんだけど」

「私の能力も効かないよ！詰んだねこれ！」

「私は分析と実験、それを実践する行動力が自らの取り柄だと思っっているわ。ともすれば、魔法の才能よりも」

「そんな私が、紅魔館ひいては外の世界でも最強クラスの貴女達に対する対抗手段を作らないわけじゃないじゃない」

いい実験が出来た、とパチュリーはその場を後にした。鎖の名は『グレイプニル』神

話におけるフェンリルを封殺した縄の名である。

「まだ穴があるわね…あの二人にしか効かないし」

「え、待つてえ!! パチュリー! このままじゃ咲夜に半殺しにされるわ! 何でもするから待つてえ!!」

「オイオイ、死んだね私達」

後ろから阿鼻叫喚が聞こえてくるがパチュリーはあえて無視した。日頃暴れている二人には良い葉だろう。

「レミリア・スカーレットお嬢様」

「ヒイツ!」

「フランドール・スカーレットお嬢様」

「アツツ」

「おしおきの時間です」

「アー……! というおよそ淑女の叫び声では無いであろう声が紅魔館に響いた。ア
ルクは南無阿弥陀仏とそれに唱えるのであった。

本編

プロローグ

『とんだ劣等種』

『スカーレット家の恥さらし』

『何故お前みたいな奴が生まれてきたんだ』

親と思われる男と女が、口々に罵詈雑言を吐きかけてくる、いつものように、会社に行こうと朝起きたらこれだ、どうやら最近流行りの異世界転生とやらをってしまった、と状況把握する。

パワハラ上司に比べると、かなりマイルドな暴言に、特に心動かされることも無くボーツと聞いておく。話を聞く限り、どうやら俺は地下に連れていかれ、密閉された部屋に入れられるようだ。

「お前はここにこれから生活しろ」

「はあ」

青髪の美丈夫が、威圧感たつぷりで、俺に淡々と話し掛けてくる。余りにも事務的であり、所々で見え隠れするプライドの高いやつその話し方に、少しだけ苛立ちながら

話半分に耳を傾けておく。

「感謝するんだな、飯は届けておいてやる」

「それはどうも」

そりや飯無いと死んじやうからね、なんか身体の構造が変わったような気がしないでもないがどんな生物であろうがエネルギーを摂取しないと死ぬのは常識だ。

「ふんつ、その余裕がいつまで続くか見ものだな」

「ここつて本とか無いんです？」

かなり凶々しいお願いだが、欲しいものは欲しいと言わなければあのブラックな毎日の二の舞になってしまう。

「贅沢な奴め…メイドに取ってこさせるから何が欲しいかは自分で言え」

「意外と優しいんですね」

知ってるか？好きの反対は無関心なんだぜ？

「勘違いするな、一度生んだものは劣等種であろうと死ぬまで面倒は見る、ただ、お前のようなクズを世に出すにはこちらも恥ずかしいのでな」

「そりやごもつとも」

特にやることも無いので、備え付きのベッドでゴロゴロ横になる、いきなりの転生だった為、少し困惑はあるが、あのブラックな日常から考えると、かなり今の状況は幸

せなのではないだろうか。これから始まる二ト生活を享受しつつ死んだ魚の目で天井を見る。

そういえば、このシヨタの体の記憶というものもあることにはあるみたいだ、今暇だし少し思い起こしてみるか。ええつと、姉が二人居るようだな。

まるで外側からアニメでも見るかのような思い出し方に違和感を感じざるを得ない。それで：二人とは結構仲が良かったみたいだな、うわ俺が地下に連れていかれるときめつちや止めてんじやん。なんか可哀想。

『アルクは劣等種なんかじゃない！やめて！連れていかないで！』
『うわあああ！アルクウウウ！！やめて、やめてよお！！』

これは酷い、かなり必死に止めとるやんけ。なんか悪いことしたなあ：いや、よくよく考えると俺悪くないし。恨むなら親父とお袋を恨め、俺はその間ここでずっと二トやつとくから、出来ればあと400年は起こさないでくれ。

そういうえば飯も運ばれてくると言っていたな、どんな感じだろう。洋食より和食派の俺は納豆ご飯や味噌汁を夢見ながらお腹の虫を盛大に鳴らしていた。この男かなりいい加減である。

その頃上の階では

「ふざけんじやないわよ！アルクは、アルクは優しくて思いやりのある一生懸命な子じやない！何であの子があんな所に！」

「お姉様、どうする？」

姉妹は怒り狂っていた。一人は激情に身を任せ机に蹴りを入れ、一人は酷く冷たい目で何かを見据えていた。反応は違えども同じことに怒るもの同士、通じ合うものが二人にはあった。

「とりあえず今はまだ手出し出来ない、力をつけることに全力を注がなければいけないわ」

「私の能力さえ制御出来ていればこんなことにならなかつたのに……」

「それは私もよ、もう少し力が足りていればあのウジ虫共の喉笛を今すぐ抉り割いてやるのに……!!」

二人の姉は最愛の弟を助けるための算段を建てた、一人は破壊を、一人は運命を操る姉妹は自らの親を殺すために力をつけ始めたのであった。

あれから何年経っただろうか、いや何百年だな。とりあえずかなりの年数が経った、その間に自分は魔法書や色々な武術の書を読みそれを試してみたり、その魔法で生み出した道具で生活を快適にしたりしていた。自らの死んだ魚の目を治す道具を開発したりもしたがどうしてもこれだけは治らなかつた、ちくしょう。

まあそんなこんなで今は全てやることが終わってしまい暇である。最近は何かに変な紫の美人な妖怪が訪ねてきて『私の式にならない?』って聞いてくること以外では誰かとの繋がりが無い。なので誰かとお喋りがしたい、そう思うようになってきた。というか今までそれが無かつたことがおかしいのだ、だからそろそろ外に出てみるのもいいかもしれない。

そう思い準備を始めようと思ったそのとき、扉の方からかなり鈍い破壊音がこちらに向かつてくるのがわかつた。なんだ、侵入者か。とりあえず迎撃の準備を整える。魔法の道具を全身につけ、いつでも戦えるように構えをとる。

「これが最後の扉! キュツとして…ドカーン!!」

「フラン! 良くやったわ!」

「お嬢様! やりましたね!」

「レミリア、私のお陰でもあるから感謝しなさいよ」

「ここにスカーレット家のご子息様が居られるのですね…」

「よし、じゃ扉を開けるわよ……」

いや、これは侵入者と言うよりも完全にあの方達やんけ。え？ここまでかなりの迷宮っぷりだったと思うんだけど、俺が魔法でダンジョンみたいに入り組んだ構造にしていたのを全部突破してきたの？この人達。あ、もちろん飯を持ってきてる場合は普通の道になるんだけどね。

「アルク！遅くなつて本当にごめんなさい！助けに来たわよ！」

「アルク！フランも来たよ！」

俺はこの方達の知つてる弟さんとは外面は一緒でも中身は違うんだよなあ。どうしようか、まあバレたら絶対タダじゃ済まないし誤魔化すか。とりあえず死んだ魚の目は絶望しきつた感じで淀ませておこう。どよーん、どよーん。

「アル……クなの？」

「え……そんな……うそ」

「ね……えさま？」

「っ！アルク！しつかりしなさい！咲夜！今すぐこの子を上に運んで！」

「かしこまりました！」

「アルク……！ごめん……！ごめんなさい……！」

「フラン！謝るのはあとでも出来る！今はここを離れるわよ！」

「うん！」

俺は『長年監禁されて心に深い深い傷をおった吸血鬼の少年』を演じることでボロが出てもなんとか出来るようにした。しかしこれがかなりの波乱を生むことになるはこの時予想だにしていなかった。

＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝
＝

「藍」

「なんでしようか紫様」

紫のドレスを身に纏い、この世の全ての美を集めたような容姿をしたその金髪の女性は、自らの従者に声を掛けた。酷く嬉しそうな顔で、子供のような顔で。

「弟、欲しくない？」

「は？」

従者は従者でまるで正反対の表情をする。突拍子のないことを言うのは常であったがとうとうボケたのか、と失礼なことを思う。まあ仕方ないことだろう、それ程に突然のことだったのだから。

しかし主は自慢げに語り始める、己の正しさを信じて疑われない子供のよう。

「いや橙にも同年代で競え合えるような子が居てもいいかなって思ったんだけど」

「ああ、そういうことですか…いいのではないですか？」

ああ、そういうことだったのか、と従者はひとまず納得する。

「そうよね！ちようどいい子見つけたのよー！」

「弟が出来るのですか！紫様！」

「そうよー、橙がお姉様って呼ばれる日も近いかもね」

「やったー！」

勝手に人の弟を攫って式にしようとする紫のスキマ妖怪はこの後紅魔館をどんどんと引つ掻き回していく存在になっていく。頭はいいのに馬鹿で胡散臭いところが無ければこんなことにはならなかったというのに。

1話

無事とは言えないが弟を解放することに成功した紅魔館のメンバー達は今、一つの部屋に集まりその顔を歪ませていた。理由は言わずとも分かるだろう、アルクの状態についてだ。

上の部屋に連れていった後も何か怯えるようにブルブルと震えており、レミリア達はアルクが心的外傷後ストレス障害（PTSD）に陥っている可能性が高いとみていた。自分達がもっと早くあのゴミ虫達を殺せていれば、力を制御出来ていれば、もっと仲間を集められていれば。後悔は次々と脳内に駆け巡っていく、しかしそれは考えていてもしようがないことなのだ。当の本人はかなり快適に地下室暮らしをしていたし、震えていたのはボロが出ないようにするタダの演技なのだから。

「レミリア、これからどうするの」

「どうもこうもないわ、アルクの住みやすい環境をこの紅魔館に作る事が最優先事項よ。何かお世話をしてあげるときは咲夜、貴方に頼んだわよ」

レミリアは鎮痛な表情を浮かべるが一瞬で紅魔館の主としての顔になり指示を飛ばした。

「はっ！私の命に変えても！」

「フランは、何が出来るかな」

不安げな表情を浮かべる妹に対しては優しい口調で語り掛ける、妹もまた弟と同じように自分の大切なものだと思っているから。

「貴方はあの子の話相手をしてあげて？私では威圧感を与えてしまうかもしれないから」

「うん、でもお姉様も来てね？絶対アルクもその方が嬉しいと思うから」

「わかったわ」

肯定しながら思考を巡らす、まだなにか出来ることがある筈だと。

「私は何かやることはある？」

「パチュリーは精神を安定させるマジックアイテムを作っただけで、その場しのぎにしかならないけど無いよりマシだから」

「それぐらいならお安い御用よ」

そこまで指示を出した後レミリアは一息着いた、長年の悲願を達成出来た喜びと、この紅魔館の一番の宝を壊された怒りで目に見えて疲労していた。それに気づかない他のメンバー達では無い。

しかしレミリアならば自分を気遣うくらいならその分アルクに優しくしてあげると

言うのは明白だったので何も言わなかった。

全てを振り払うように大きく息を吐いたレミリアは考え始める。まずはこの幻想郷で何か精神的な傷の治療に詳しいやつを探すことを決めた。心を治すという行為は生半可な気持ちでは到底不可能だ。優しくされてしまうと逆に自分を責める者まで居ると聞く。

アルクは今何をするときが一番癒されるのだろうか、その為ならなんだって叶えてやる、外で走り回りたいというのなら太陽すら墮としてみせようではないか。それ程までに私達スカーレット姉妹はアルクを愛しているのだ。

「レミリアお嬢様、弟君の様子を見てまいります」

「ええ、分かっているとは思うけど刺激しないようにね」

「はっ!」

固くなる従者に対して心配をしつつ、適任はこの従者しか居ないとも考えていた。

「あのさ…私も行つていいかな」

「フラン、いきなり無理をしなくてもいいのよ?話し相手になるのはもう少し先でも…」

そうだ、妹がそんな無理をする必要は無い。一番上である姉が本来する仕事なのだから。それは。

「アルクに伝えておきたいことがあるんだ、だからお願い」

「……ふう、わかったわ」

そんな真つ直ぐに目を見られると折れてしまふ、私の悪い癖を見抜いているよく出来た妹だ。

「ありがとう」

「ただし、アルクが何を言ったとしてもちやんと受け止めてあげなさい。約束よ?」
「わかった!」

決心したような顔でフランは了承した、この子も少し落ち着きは無いけど、優しい子に育つてくれて嬉しい。本当に、あんなコウモリ以下のクソ雑魚共に似ないで良かったと姉妹共々思っている。

血が繋がっていることすら忌み嫌っているというのに思い出すだけで虫睡が走る。最後は断末魔をあげさせ死ぬ限界まで痛めつけ放置し、衰弱死させた、最後まで往生際の悪い奴等だ。さっさと死んでいれば苦しまずに済んだものを。

二人を送り出しパチュリーと二人つきりになる、美鈴はいつもより真面目に門番をしてくれているのでここには居ない。とりあえず落ち着くために紅茶を飲んでみるとパチュリーがこつちをじつと見つめてきた。無言の圧力のようなものを感じて居心地が悪くなる。一体どうしたというのだろうか。

「別に馬鹿にするつもりはないのだけれど」

「なに？」

馬鹿にするつもりはないという前置きが気になるが話を聞く体勢を整えた。

「貴方があの弟にあんなに固執する理由とかはあるのかしら」

「大切な家族だからよ」

即答だった、まるで準備でもしていたかのようにすつと答えが出てきた。

「食い気味に答えるのやめて、ちよつとびっくりしたじゃない」

「あの子は、いつも私達を励ましてくれたのよ。スカーレット家に生まれたことによる重責や使命を忘れさせてくれる唯一の存在だった。いつも笑って、泣いて、怒って。精一杯生きていた」

そう、まるでスカーレット家の吸血鬼では無いんじゃないかと考える程に。

「ふーん、私には家族なんてもの居なかったからその気持ちはわからないわね」

「あら、この紅魔館に住んでいるものは皆家族よ？」

「そう」

そう言うのとそっぽ向くパチュリー、しかし耳が少し赤くなっている、いつも冷静なこの子が自分の感情を出すところを見るとたまらなく愛おしい気持ちになる。友人のような双子の妹のような、お互いに遠慮もしないこの関係は何にも変え難いものだと思ひリアは思った。

「大丈夫ですか？入りますね…」

「……」

「つ、怯えなくても大丈夫ですよ…私は今日からアルク様のお世話係に任命されました。どうぞ咲夜とお呼びください」

「……ヒツ」

「アルク様、私は貴方を傷つけたりしません、大丈夫、大丈夫ですよ…」

「近…寄ら…ないで…ください…」

「っ…かしこまりました、御用があれば私の名前を呼んでください」

「……」

メイド長は落ち込んだ様子で姿を消した。こんな具合でどうだろうか？

いや悪意は無いから、生き残る為に仕方なくやっている事だから、この演技やめたら即バレて殺されちゃうからね俺は。正直俺だってめちやくちや心痛いよ、あのメイド長の胸に飛び込みそうになったもん。けどしようがないよね、死にたくないし。

そうだ、俺は死にたくないのだから

「アルク…入っても…いいかな」

フラン姉様ー！もう疲れたので帰ってもらっていいですか！かなり失礼なことを言っている気がするが仕方ない。色々あり過ぎて疲労マシマシなのだ。

前世ならばラーメンを食べに行くことでその渴きを潤していたがもちろんこの世界にはラーメンなど無い、自力で何とかするしかない。世知辛い、世知辛いのじゃ…

「入るね…」

「……」

ど、どうする…どう動く…

「あの、私謝りたくて…今までアルクに我慢させてきたから…」

「……」

あの生活に我慢もクソも無かったけどな

「これからは何も考えなくていい、私達がアルクを守るから、だから」

「な…んで」

なんか喋らなきや不自然だから頑張ろうと動き始める。

「え？」

「なん…で…僕は…あの部屋に…入れられたの…？」

「っ!!」

うわあ、ごめんなさい。俺は罪悪感が芽生えるがすぐに抑える。これは仕方ない事なんだから。

「暗く…て…寂しくて…怖かった…!」

「アルクは悪くないの…悪いのはアイツらだから」

そうだな、俺全然悪くないな。

「僕は悪くないのに…あの部屋に…」

「アルク…」

「…出ていって…一人にして…」

「うん…ごめんささい…」

ふうー！疲れたー！ひと仕事終了あとのような達成感を抱きつつ、ベッドにゴロンと横になる。

しかし自分に演技の才能があったとは驚きだな、スラスラと思ってもないことが口から出ていく、前世でも詐欺師とかの方が向いてたかもしれない。まあ出来たとしても小悪党みたいなちっぽけな詐欺ぐらいだろうが。

ゴロゴロとベッドを転がりつつポケットから指輪型の魔法道具を取り出す、これは中にかなり大きい空間を作り出し、物をしまっておけるといいう便利なものだ。

転生者風に言うアイテムボックスだ、しかしそんな便利なものにも不便な点もある、中の時間は止まってないので食べ物を入れると腐るし、一度に出せるものは一つだけだ。どこかの雑種王のように武器を飛ばしたりはできない。ちよつとデカめのカバンを指輪サイズに縮めたと思うてくれたらいい。

そこから本を取り出す、もう紙が擦り切れるほど読んだものだが素晴らしい物語は何度読んでも素晴らしいものだ。ストーリーがお粗末でも文体で、文体がぐちゃぐちゃでも表現で、作家というのは様々な自らの経験に基づき描写を書く。人それぞれ好みはあれど人が魂を込めて作り上げた作品というのは種族や年齢に関わらず心を揺らし人を動かす。これは前世からの自分の考えだ、特に趣味の無い自分だったが読書だけは好きで休みの日は図書館に通っていた。

今回読んでいるのはある王様の話、その王はなんの才能も無いのにも関わらず王に選ばれてしまった。もちろん自分に務まらないと辞退しようかと考えるが時すでに遅し、民は期待の目で己を見ている、そして家臣達は何故か自分に全幅の信頼を置いている、そんな袋小路の状況で王がとった行動は、いかに自分を賢王のように見せるか、という破綻するのが目に見えているようなものだった。しかしその王は運だけは良く、戦に勝ち続ける、そしてその過程で様々なことを学び本当に賢王となりその国は末永く発展していく、という結末だ。

他の本もあつたはずなのにこれを選んでしまった、何か学べることもあるかと考えたがこの王は元より賢王となる才能があつたからこの結末が有り得たのだ、俺には今を誤魔化すことで精一杯、しかも俺はひ弱な少年を演じなければならぬ、何を学べというのだ。

俺は少し嫌な気持ちになったので本をしまい眠りに着いた、明日のことは明日の自分に任せる。どこまでも他人任せだ、いや、この場合は自分任せか？

アルクは特に気にもしなかった、何故あの本を無意識に手に取ったのか。しかし、ここで深く考えようとも気づかなかっただろう。あまりに自然に身体がその本を選んだのだから。

2話

妹が泣きながら部屋に戻ってきたから何事かと思ひ話を聞くとどうやらアルクに拒絶されたようだ。絶対に起こり得た可能性だった、しかしそんなことフランにとっては慰めにもならないだろう。

「フラン、泣かないで？ 貴方は間違っていないから」

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

うわ言のように呟くフラン、思わず目を逸らしそうになるが私はフランの頭を撫で続けた。これが姉として出来る最善の事だと信じているから。

「私も拒絶されてしまいました…申し訳ありません」

「問題無いわ、初めから上手くいくわけではないもの、気長にあの子に寄り添ってあげましょう？」

「はい！」

やはり咲夜の方も上手くいかなかったようだ、だが触れ合い話しかけなければ進展はしない。向こうから来るのを待っていたら一生元の関係に戻るのは無理だろう。

「お姉様、フラン頑張る」

「ええ、頼りにしてるわ」

フランが泣きながらもこつちを見てくれたので少し安心した。まだ大丈夫そうね。

「精神安定のブレスレットが完成したわよ」

「ありがとうパチュリー、あとはこれをどうやってあの子に渡すかね…」

たとえ私達であろうとあの子は警戒して何も受け取らないだろう、何百年と孤独にしめられたあの子を救うことが出来るのは同じ孤独を背負ったものだけ。私が代わりに背負ってあげたい、苦しんであげたい、あの子を喜ばせてあげたい、家族として、あの子に愛を注いであげたい。

あの子はほかの吸血鬼と違って羽根が半分程しかない、吸血鬼にとって羽根というのは権威の象徴、フランも変わってはいるが宝石のように美しく大きいので受け入れられていた。羽根が小さいと吸血鬼特有の能力も満足に使えない、力も魔力もあの子には無かった。

けどあの子には誰にも負けない優しさがあつた。それに何度救われただろう、恩を返したい、このままでは与えられてばかりな自分が惨めだ。満足に恩返しもできないのか、私は。

「だからこそ…私は…」

「お姉様……」

私達には時間が無いというのに……かくなるうえは……

「……この紅魔館に居てはあの子にとって負担になるのかもしれない……」

「じゃあ……どうするの?」

「もつと安らげる場所にあの子だけ移ってもらおう、とか……」

「折角また会えたのに……?」

フランが悲しそうな顔をする。そして、そんな表情をさせてしまう不甲斐ない自分を責めながら思考だけは巡らせておく。

「それは最終手段だけど……、そういうことも考えていけないといけないのも確かだね」

距離感を間違えてしまえば即アウト、今のアルクは爆弾のような存在だ。不用意に扱いを間違えればもう取り返しのつかないことになってしまうのは言うまでもないだろう。

けどその重さを心地いいと感じてしまう、もつと弱音を吐いて欲しい、わがままを言つて欲しい。それを叶えることが姉として私が出来る唯一のことだから。

さて、どうしようか、これからのことを思うとかなり憂鬱な気持ちにならざるを得な

い。ただ震えているだけではいつかバレてしまうと考えている、それに徐々に徐々に前の自分に戻していかないとこの身体の持ち主の少年も浮かばれないだろうからな、まあ身体返す気は無いけど。
バレたら死んでしまうしな。

「頑張ろう、頑張ろう」

「アルク…どうしたの？」

「…っ！」

正直めっちゃびつくりした、変な事言つてたらやばかったな。とりあえず怯えた目でいつの間に入ってきてきたレミリアお姉様の方を見る、ガチ演技だ、ちよつと涙を浮かべておく。これぐらいしておかないと演技だとバレるからな。

「ヒイツ…」

「ご、ごめんなさい…」

ヒイツ…つて言っておけば何とかなると思っている節はある。

「ど、どうしたの…なにか用…」

「特に用はないのだけど…大丈夫…？」

まあ完全防備のこの館でなにかあることなど万に一つも有り得ないだろう。

「うん…ちよつとだけ落ち着いた…」

「それは良かった……でも無理をせずちよつとずつで良いのよ」

しかし用がないのに何をしに來たのだろうか？お姉様には悪いが逃げないように監視の目を光らせているようにしか見えない。ふるふる、僕は悪い吸血鬼じゃないよ。仲間になりたそうにお姉様を見たりはしないがとりあえず無難なことを言つてお帰り願おう。

「それで……アルクに質問があるんだけど」

「……なに？」

「何かして欲しいことや欲しいものは無い？何でも叶えてあげるから」

ん？今なんでもするつて……というのは冗談だ。しかし何かして欲しいことねえ……自由に本が読みたいな、いちいち欲しい本を書いた紙を食器と共に扉の前に置いておくのは面倒になっていた。

あとは……寝てたいな、寝ることこそ我が人生。就寝と俺は切つても切れない関係なのだ、好きな時間に寝て好きな時間に起きるのは最高に気持ちいい。

そうやって思案顔で固まっているとお姉様が口を金魚のように開けたり閉めたりしていた。いったいどうしたのだろうか、お腹でも減っているのか、あいにく俺は食べ物を持っていない、あのメイド長に頼むのが最良だろう。

「えつと、アルク……ここに居るのは嫌……？」

「……別に大丈夫」

むしろここに居なきや普通に野垂れ死にする。

「それなら良いんだけど…」

「…いきなり…どうしたの」

ほんといきなりだな、急なイベントとかに弱いんだよ俺は。

「もし、アルクがここに居て気が休まらないというのなら…私は他のもつと安らげる場所を探してあげるから」

「…俺のこと…ここから追い出したいの…？」

「違うー！」

「…ヒツ…！」

っ、怖え…素でビビっちゃまったじゃねえかよ…

「あつ、ごめんなさい…」

「…大丈夫、だよ…あと俺が欲しいものは本だけだから…それだけ」

とりあえず早いとこ出て行って貰おう、怖いし。

「えっ、本当にそれだけでいいの？」

「うん…わざわざありがとう…お姉様…」

どこまで頼めばいいかわからないしそれでいいよ。

「何かもつと望んでくれてもいいのよ？」

「これ以上貰ったら…罰が当たりそうだから…」

強欲なことは悪いことだとは思わないけど人間謙虚じゃないとすぐに足を掬われるからね。

「っ！わかったわ、いっぱい面白い本持ってきてあげるから…」

「…うん、ありがとう」

「いいのよ…私は、お姉ちゃんだから」

そう言ってお姉様は俺の頭を優しく撫でて部屋から出ていった、途中お姉様が凄叫んだところで漏らしそうになった。しかし今回もいい具合に演技出来ていたのではないだろうか、やはり俺には演技の才能がある、表情まで自在に変えられるとは自分に恐れ入ったね。

でもどこまで元気になっていいかが分からない、心に傷が残った感じで今のままいくのか、最終的に治った感じでいくのか。どっちの方が自然なアルク・スカーレットを演じてるといえるのだろうか。まあケースバイケースでいけばなんとかなるだろう、俺は難しいことを考えるのをやめた。

俺は、アルク・スカーレットなのだから。

アルク作戦本部と化した部屋にレミリアが帰ってきた、椅子に座るなり大きなため息を吐き目を手で覆った、そしてアルクの話の話を始めた。

「アルクに会ってきたわ」

「どうだった？お姉様」

とりあえず現状のアルクを把握する為に足を運んだものかなりレミリアは疲弊していた。

「なんとか気丈に見せようとしていたけど…正直何度目をそらそうと考えたかわからなかった」

「お姉様…」

そこで一息つき天井を仰ぐレミリア、それはまるで溢れそうな涙を我慢しているようだった。

「あの子に欲しいものを聞いたら本が欲しいと答えたわ、もつと凄いなものだって用意出来ることだってあの子は知ってるのに」

「お嬢様…」

そこまで話をしたところで少し顔を明るくさせて紅魔館メンバーの顔を見渡す。

「けどそれを話してくれたという事実は一歩前進したと言える、とりあえず今はみんな
で面白い本を掻き集めるわ、そしてその中でアルクが気に入るようなものを厳選する。
今夜は徹夜よ」

「うん！」

「分かりました！」

「私も司書として協力するわ」

「ありがとう、みんな」

紅魔館メンバーは図書館に向かった、全員の顔はやる気で満ちあふれ闘志でメラメラ
と目が燃えている、ここまでしてくれる家族が居るにも関わらず、当の本人は思考を放
棄しベッドでうつ伏せになっていると考えるとあまりの情けなさに涙が流れるばかり
である。

その頃、胡散臭いスキマ妖怪は自らの能力で、ある少年とその姉のやり取りを覗き見

していた、ただの変態にしか見えないうところが彼女の性根が表に出てきているといえる。

「ああ、助けだしちゃったのね…」

「どうかしたのですか、紫様」

「前言つてたあの子、もうちよつと遅れるかもしれない…」

「あの弟にすると言っていた？」

従者は主が前から話していたその人物を思い起こす。

「そう、元々監禁されていたから簡単についてくると思っただけど…」

「え、野良妖怪ではないのですか？」

ギョツとした顔で目を見開く従者、まさか…と自らの主を見る。

「一応家族は居るわよ、虐待されていたけど」

「……」

「けど今その子のお姉さんが助け出しちゃったのよねー」

「貴方は馬鹿ですか！」

ペシーン！とデコを叩かれる、従者の九尾が怒ることはめつたに無いので焦るスキマ妖怪、半泣きになりふええ…となつている、こうなつてしまつてはただのゲームのやりすぎが見つかった小学生のようである。

「人様の子に手は出さないのは常識です！」

「だってだって、可愛かったし可哀想だったもん！」

「それでもダメなものはダメです！」

「うう…わかつたわよ…」

そう言つてスキマを閉じようとする紫、しかし次の瞬間ガバツと近づくようにしてその二人を見る。何があつたのか分からない従者はとうとうボケが始まったかと思い、介護のしかたなどを頭に思い浮かべていた。

『『アルクがここに居て気が休まらないというのなら…私は他のもつと安らげる場所を探してあげるから』…これよ!!』

「紫様、とりあえずお布団しきますから一緒に行きましょうねー」

従者はいつもの三割増の優しい声で主を布団まで誘導しようとしている、後から帰ってきた式の黒猫が焦ってしまうのも無理は無い話であつた。

3話

朝起きたらメイド長が凄い量の本を持ってきてくれた。

内容はファンタジーから魔導書まで何でもござれという至れり尽くせりのラインナップ。しかも俺が好きな感じの本だらけ。

あの人達良い人過ぎるだろ……。それをパラパラと読みつつ並行してこれからの段取りを考える、とりあえずこの部屋から出ることが出来るようになるまで回復した姿を見せるとかどうだろうか、少し早すぎるだろうか。とりあえず、来てくれた人を無条件で追い出すのはやめよう。

アルク・スカーレットという吸血鬼の情報はかなり持っているからといって、それを完璧に模倣し演技することが可能という事ではない。感情の出し方や表情は結局のところ「アレク・スカーレットならこうするだろう」という予測でしかないのだから。本当に面倒くさいところに憑依したものだ、けどやり遂げるしか自分に出来ることはないので諦める、とりあえずご飯の為にメイド長を呼ぼう。

「…咲夜…さん…」

「お呼びでしょうか、アルク様」

一瞬で目の前に現れて心臓が止まりそうになる、まだ死ねない。

「あの…お腹が空いて…」

「かしこまりました、すぐに持つてまいります」

やったあ！俺ご飯食べるの大好き！そんなふうは無垢な少年を心の中に飼っておく。男はいつだって純粹な心を失わないんだ。

「…あ、あの」

「何でしょうか？」

優しそうな笑みを浮かべてこちらに振り返るメイド長。

「さつきは…ごめんなさい…謝りたくて…」

「！」

これを言うておくだけでも印象は違うだろう。俺は細かいところまで手は抜かない性分なんだ。

「それで…これから…よろしくお願ひします…あの、それだけです…」

「もったいないお言葉です」

「うん…ありがとうございます…」

俺がそう言うのと微笑み、凄い優雅な足取りで部屋を出ていくメイド長。惚れてまうやろ…いや本当にめっちゃ美人でびっくりしたわ、元々顔は良いと思っていたんだけど今

回のことでも本気で惚れそうになった。もう演技とかどうでも良くなりそう、いやダメだ、それやめたら確実にキユツとしてドカーンされて汚い花火になる。

葛藤しながらも置いていた本をまたペラペラとめくる。今読んでいるのは影武者の話、影武者というのは王や国の重要人物の偽物だ。暗殺や襲撃が起きた際にその影武者に身代わりになってもらい難を逃れる為に使われるという何とも哀れな役職。俺ならこんな仕事死んでも就きたくないな。

わざわざ誰かの代わりに死ぬ為に生きるなんてまともな神経じゃない。誰だって自分のことが一番大切に大好きなんだ、口でどれだけ自分のことを貶めようとも必ず心の中では自分を守ろうとする、俺だってそうなのだから。

「アルク様、お食事をお持ちしました」

「早い…ですね…」

「私は時を操る能力を持っております、食事を一瞬で作るなど朝飯前です」

「凄い…」

「ふふ…ありがとうございます」

時を操るとかチート過ぎないか。俺もそんな能力欲しかったな。心の中では哀愁を漂わせながら表面上は尊敬の目をメイド長に送る。でも操るってどこまで可能なのだろうか、止めること、進めること、戻すこと。全て可能ならばこのメイド長に勝てる生

物はこの世にもあの世にも居ないだろう、負けそうになれば時を止めてから巻き戻せばいいのだから。

想像通りだろうが俺は能力を持っていない。これはアルク・スカーレットが元々持つていなかったのか俺が憑依したことにより無くなつたのかは定かでは無いが記憶を見る限り自分に能力が無いことを悩んでいたようなので元々無かつたのだろう。羽根が小さいことも関係しているのかもしれない、まあ効率のいい魔力の使い方や武術の基本は修めているのでその辺の妖怪には負けられない筈だ。この紅魔館クラスの妖怪になると瞬殺されると思うけど。

「アルク様」

「どう…したの…?」

「差し出がましいことを言ってもよろしいでしょうか」

「ん…?」

「私達は貴方様の味方です、どうか…どうかそれだけはわかっていて欲しいのです」

「大丈夫…わかつてるから…」

「そう…ですか、ならば私から言うことはありません。不躰な言葉を投げかけてしまい申し訳ありません」

アルク・スカーレットは愛されているようだ、だからこそそこに居るのが全くの別人だ

と知れば悲しみ、怒り、攻撃してくる。あの子を返せと、そうなってしまうては誰も幸せにはなれない、誰かを幸せにする為に行動する気は無いが、自分が幸せになつて周りが不幸になるよりは、自分も周りも幸せになつた方がお得だ。損得勘定で考えて人生過ごす方が楽しいし後悔しない、だからこそ演技して切り抜ける、これが自分にとって得になると信じているから。

そんな少しシリアスな雰囲気を醸し出しつつ食事を始める、うんいつも通り美味しい、ある日を境にいきなりご飯が美味しくなつたんだよな、あれはメイド長が来たからだったのか。自分の中で納得しつつご飯を頬張る、パンはふわふわだしスープは温かい、人は美味しいご飯を食べるだけで何処までも幸せになれるのだ。

「…♪?」

「美味しいですか?」

「うん…いつも美味しく食べてたよ…ありがとうね」

「それは良かった…! 光栄の極みです!」

会話は弾むことは無かったが心地の良い静寂の中で食事が出来て満足だ、全て完食し水を飲み一息吐いた。

実はいくらか回復した姿を姉様達に見せずにメイド長にのみ見せたのは理由がある。

この人は俺に対して、姉様達に比べると執着は無い、何故ならば昔のアルク・スカー

レットを知らないからだ。ならばボロを出したところで比べる対象が居ない、メイド長が俺を励ます言葉を言ってきたのも当然織り込み済み、これが少しの不自然さを完全に打ち消してくれる。そうすると『メイド長が励ましたことで少し元気を取り戻したアルク・スカーレット』という構図が出来る、そうなってしまうえばこつちのものだ。あとは徐々に元の自分に戻るだけでいい。

「咲夜…さん」

「いかがなさいましたか？」

「俺…紅魔館の為に何かしたいです…」

「まだ無理はしない方が…」

「みんな優しくして…俺なんかのことを心配してくれているのに、俺がここでずっと休んでいるのはイヤ…です」

「そう、ですか…わかりました、お嬢様にそう報告しておきます」

「お願い…します」

そう言うときメイド長は姿を一瞬で消した、あ、これが時を操る能力か。この能力持った人と絶対に敵対したくないと思った。俺なら二秒で確実に殺られる。

お皿を洗った後、お嬢様の部屋に向かう、アルク様からの伝言をいち早く伝えなければならぬと思つたからだ、あの方は心に数え切れない傷を抱えているにも関わらず紅魔館の為に何かしたいと仰つてくださった。これ程までに優しい心を持つた方を監禁していたという事実を怒りを隠せない。

「お嬢様、入ります…」

「ふざけんじやないわよー！」

「!?!」

ノックをした後扉を開けるとそこには、怒り狂つた顔を見せる主の姿と、この幻想郷で最も発言力を持つた妖怪の賢者、八雲紫が居た。

「別に変な話はしてないじゃない、この紅魔館はあの子にとって最良の居場所とはいえないことは貴方もわかつているのではなくて?」

「だからといって貴様に何か口出しする権利があると思つてるのか…?」

犬歯を剥き出しに相手を威圧する主、ここまで怒つた姿を見るのは久しぶりだ。

「お姉様、こいつ壊してもいい?」

「相変わらず本当に落ち着きの無い姉妹ね、あの子を少しは見習つたらどう?」

あの子というのはアルク様を指しているのだろうか。

「そもそも何故貴様がアルクのことを知っている？答えろ！」

「あの子が監禁されていた時に何回かお部屋にお邪魔したのよ、あんなに魂が純粹で清らかな妖怪は見たこと無かったもの、気になるに決まってるじゃない」

「殺す…」

レミリアお嬢様が槍を顕現させ、フランお嬢様が右手に目を集め始める。紅魔館最強の二人の本気がそこに現れていた、かく言う私もナイフをいつでも出せるように構えている。

「はあ…話し合いにならないわね…まあ良いわ、また来るから」

「逃がすと思ったか？やれ！咲夜！」

「はっ！」

私は能力を発動しその余裕に満ちた八雲紫の全身に何百ものナイフを投げ放ち、完全に動きを止めた筈だった。

しかし投げてから少し瞬きしたその瞬間、視界から八雲紫の姿が消えていた。何処に行ったのかと部屋を見渡すがどこにも居ない、この能力を破ったものはお嬢様達以外に居ないというのにこれは一体どういう事だ。

「時を止めた」ときで私に勝とうだなんて、百年早いわね」

そんな嘯きが聞こえた瞬間に発動時間の限界を超え、時間は元の流れに戻った。酷くプライドを傷付けられ悔しくなる、次に会った時は確実に殺せるように修練を積まなければならぬ。

「申し訳ありません…お嬢様」

「別に大丈夫よ、けど対策は考えないといけないわね」

すぐに冷静さを取り戻す主、それを見た私も反省はそこそこにし何故あのスキマ妖怪が私の能力を破ることが出来たのか考える。

「逃げることで出来たことは、時を止めても動けてたことだよね？」

「そうね、どんな能力をもっているかは知らないけど厄介極まりない奴だわ…」

皆が皆警戒心を強めながらアルクを絶対に守ろうと決意したのであった。ただ、アルクにとっての紫は美人な話し相手ぐらいでしかないので自分にとって得になることがない限りは絶対について行くことなどないのだが。

4話

そろそろ動き始めようと思う、何日か経ちこの紅魔館で俺という存在も馴染んできた筈だ、前から言っていたようにここから前の自分に戻していく。

どう足掻いても俺はアルク・スカーレットの偽物でしかないので慎重に動かざるを得ない、姉様達に比べると平凡で、凡才で、凡愚でしかない己が嫌になり始めるが、最初からこの精神状態ではいつか破綻してしまうので空元気を出しつつ自分を鼓舞していかなければならない、辛い。

「…なーんてことがあったのよねー」

「ゆ、紫さんは俺なんか拘らなくても良いのでは…?」

これは本心からの一言だ。俺にこだわる必要無いだろ。

「私は式にする相手は誰でもいいわけじゃないのよ。どれだけ醜くても、その根が宝石のように輝いているものこそ八雲の名に相応しいと思っっているわ」

根が宝石ねえ…腐ったみかんと見間違えてません?

「そ、それが…俺…というわけですか…?」

「そうね、藍を見つけた時と同じ高揚感よ、貴方は自分の事をもっと誇っていいわ」

この人はどうやら目が節穴のようなので俺をしつこく勧誘してくる。魔力も腕力も並以下だというのに俺の何処に惹かれたのだろうか。妖怪の賢者という重要な役職についてるからこそ力というのは重要なファクターではないのか。力の無い妖怪など八雲紫にとつてはタレの付いていない納豆みたいなものではないかと思うんだがな、いやそれはちよつと違うか。

八雲紫さんの話を聞く限り姉様達は俺をこの人に渡す気は無いということがわかった、ならばついて行かない方が良いだろう。その方が自然だ、まあ初めからこの人について行く気は微塵もないが。

何故ついて行きたくないかというのも理由がある、この人の能力は『境界を操る程度の能力』というものだ。

「式にする相手には教えるのは当然よ」とか言い出して勝手に教えてきたが、よくよく考えてみるとこれは咲夜さんクラスのチート能力なのだ。自分と世界の境界を希薄にしてしまえばどんな力もこの人には届かない、そして俺の心と紫さんの心の境界を密接にされたら考えていることがバレてしまう。

腹の探り合いや戦闘においてこの人に勝てるものは幻想郷に殆ど居ないと考えている。姉様二人がかりなら普通に戦えそうだけど。

「あの…：何度も勧誘して貰って嬉しいんですけど、僕は式にはなれません」

だから早くおかえりください。

「…いつもの事だけど何でなのか聞かせてもらえるかしら」

「僕は…力も能力もなくて…もし式になったとしてもそちらの迷惑にしかありません、だから…申し訳ないです」

迷惑かけたらかけただけ失望の目で見られるんだ。俺は詳しいからよく知ってる。

「アルク、力だけで式が決まるわけじゃないのよ、私は式のことを家族だと考えているわ、私は貴方を愛すべき家族として迎え入れたいだけなの」

「…でも」

仮にあんたが認めても周りは絶対に認めないだろうな。世間っていうのはそういうふうに出てくる。

「答えにくいことを言つてごめんなさいね…でもこんなこと言ってしまうほど貴方が魅力的なの。あつそうだ、何か欲しいものは無い？何か貰ったとしてもそれをダシに迫ったりはしないから言ってみて？お詫びのプレゼントみたいなものよ」

…こんな問いを家族以外にされたならばどう答えるだろうか。アルクは愛に飢えていた。親に愛されたくて認められたくて、何より暖かさを求めていた。母に抱きしめて欲しくて、父に遊んで欲しかった。普通の子供なら普通に甘受して当然の幸せが欲しかったのだ。アルク・スカーレットは。

しかし姉には求められない。アルクにとって本当の家族という存在は自分の心の楔の一つだから。今優しくされていてもいつか見放されるのではないかと、裏切られるのでは無いかと考えてしまう。

ならば家族以外になら？それは須らく偽物でしかない、しかし心の拠り所にはなる、偽物が本物の代わりにならないということは無いのだから。だから

「抱きしめて……くれませんか……」

「っ!!」

「やっぱり駄目……ですか……」

「そんなこと無いわ、大丈夫よ」

ふわりと正面から抱き締められる、花の香りがする、母の温もりなど感じたこともないのにこれは確かにそれそのものだと思った。

他人に母性を求めるなど正気の沙汰では無いが俺が居た環境もまた普通では無い、ならばこれはアルク・スカーレットにとって正常なのだろう。

俺なりにアルク・スカーレットを分析して行動してみたがボロが出てないだろうか、俺はきちんとして演じられているだろうか。不安な気持ちが出来する。

「貴方は——ここに居たい？」

「分かりません……ここに居ていいのか……という気持ちがありますけど……」

「なら、考えておいて？ 私達八雲家は貴方を歓迎するわ」

「わかり、ました…」

「ふふ…やっぱり貴方はいい子ね…」

抱き締められながら頭を撫でられる、頭が暖かくなってきてブーツとなってくるが頭の回転を止めると何が起こるかわからないので自分に喝を入れる、具体的には魔法で体内を活性化させて常時脳みそフル回転状態だ、後で死にそう。

「もう…大丈夫です」

「あら、もう良いの？」

「これ以上は俺が死ぬ。」

「これ以上やるともつと甘えてしまいそうなので…」

「もつと甘えてくれていいのよ！」

「ふふ…もう十分元気を貰ったので大丈夫です…」

「あつ…アルクが、初めて笑ってくれた…」

俺なんかの為にここまでしてくれたのだ、笑顔ぐらいは見せても罰は当たらないと思う。

アルクは優しいからこれぐらいするだろう、個人的な分析をしつつ今回の事で余り感傷的な気持ちにはならないでおこうと誓った。

ヤバかった、完全にアルクの方に意識が引つ張られてた、記憶を見ているからたまにリンクしたように感情が流れ込んでくることがある、これが今の一番の危険材料、冷静な判断力が完全に無くなってしまふ、そうするといつもの俺とズレが生じるのでバレる。真に迫る演技をすればする程ちよつとヤバいので程々にしようと決心した。

「何かあつたら呼びなさい、飛んでいくから」

「うん…ありがとう…紫さん」

「こちらこそ話を聞いてくれてありがとね、じゃあまた」

「さようなら…」

スキマから出ていった紫さんを見送った後ベッドに倒れ込んだ、さすがに疲れた、静かに本が読みたい、そう思った俺は新たに部屋に設置された本棚を見つつ本を物色した。

読み終わった本はメイド長に渡し新たな本に変えてもらっているので毎日ラインナップが違う、読書好きには堪らない環境だ。

「これ…かな」

そう思い手に取った本は、自分を普通の人間だと思つて疑わない青年の話だ。

妻や子供は居なかつたが毎日を平穩に過ごしていたその青年は、ある日自分の思考が普通の人間とはあまりに乖離したものであることに気づく、その異常な思考というのは

青年が『変わらない』のだ。

どういふことかと説明するならば、ある日突然向かいの家が全焼してしまうとする、原因は放火魔でまだ捕まっていない。

普通の人間ならば恐怖し早く捕まって欲しいと願うことだろう、しかし彼は何一つ日常に波を立てることなく過ごす、その事を聞いて、考えたとしても何も感情の落差が無いのだ。ああ、そんなこともあったのか、で済ましてしまう。これだけ聞けば、冷たい人間だな、で終わるだろう。

だが彼は『両親が目の前で殺されても』変わらなかつた。目の前に犯人が居て、両親を刺し続けていたとしても、微塵も恐怖も悲しみも怒りも浮かんでこなかつた。その青年は運良く警察に助けられたが事情聴取を受けている時もいつもと変わらぬ声色で答えていた。

ここまでの話の進み方ならばこの小説はサイコホラーのようなものになると思うのが普通だ。しかし違つた、その青年はその後厄介事に巻き込まれ続ける、それは銀行強盗や通り魔などの犯罪だ。

なんと青年はそれを淡々と解決していくのだ、何故ならば『変わらない』から、何が起きてても冷静沈着に物事を見れるから。俺もこんな風になりたいものだ。

この小説はそんな青年の日常を描いた半分コメディイのようなもので中々面白かつ

た。

「アルク…入ってもいい？」

フラン姉様の声がした、正直俺としては疲れたから余り相手をしたくない、しかしここで追い返すのも後で禍根を残しそうなので入れることにする。どちらにしても後日また来る可能性もあるしな。

「いいよ…入って…」

「うん、ありがとう」

何しに来たんだこの人。怖いから早く要件を言っほしい。

「何か…あったの？」

「いや、元気にしてるかなーって思って」

すこぶる元気だから放っておいても大丈夫だよ。

「今日は元気だよ…」

「そっか！お姉ちゃん安心だよ」

「あの…フラン姉様、前はごめんね…追い出しちゃって」

「あれは私が悪いから大丈夫だよ！こっちこそ無神経な事言っごめんね…」

「じゃあこれで仲直り…」

「うん！」

前の一方的に追い出したことを謝罪しておかなければいけないと思った俺は謝った、むしろこっちが謝られてしまったがうまいこと話を持っていけて満足だ。フラン姉様はわかりやすい、レミリア姉様に比べると圧が無く思っていることが表情にすぐ出るので、そこまで緊張せずに接することが出来る。

「そう言えば、もうそろそろ俺も…この紅魔館で働きたいって考えてるんだ…」
ブラック思想はそうやすやすと抜けるものじゃないんだ。働いてないと不安になるもんで。

「咲夜から話は聞いていたけど…大丈夫？無理してない…？ずっとこの部屋に居てもいいんだよ、お世話ちゃんとしてあげるから」

「もう決めた事だから…」

俺もずっと部屋に居たいけど必ず限界は来る、早めに自由に動けるようにしておいた方が賢い行動と言えるだろう。

「そっか…じゃあお姉ちゃんが言うことは何も無いね」

「心配してくれてありがとう…」

「ふふっ、どういたしまして！」

こころごとと変わる表情を見ているとこの人の本来の性格が滲み出ていると言えるだろう、初めの方はかなりキツい感じの性格だったから感動ものだ。アルクの人柄に感化

され今のフラン姉様が居ると言えるので余計に過保護になるのだろう。

その後は他愛のない話をしてフラン姉様は帰っていった、まあレミリア姉様よりかは緊張しないし良い話し相手だと言えるだろう、メイド長は：畏まり過ぎて世間話が出来ないからなあ…。

平穏な時間だ、しかしこの時はまだ誰も気づかない、アルク自身も何も感じ得ない。少しの違和感、変化、狂気、本当に微量なものであったから気にも止めなかった。それが後々牙を向くことになる、他ならぬアルク自身に、そしてその周りにも。

5 話

あの子はどんな声で鳴くのだろうか、どんな顔で苦しむのだろうか、どんな言葉で私を責め立てるのだろうか。

そんなことを少しでも考えてしまう自分が嫌になる、これはただの独りよがりの情欲でしかないことはわかっている、しかし考えれば考えるほどドツボにハマっていきドロドロに思考が溶けかける、まるで真夏に置いておいた氷菓のように。それを理性で押しとどめる、もうあの子を傷つけたくないから、家族だから、そんな譲れぬ理由があるのだ。そうやってその少女は、フランドール・スカーレットは今日も一日を始めた。

そもそも正史ならばフランドール・スカーレットが長年の間幽閉される筈だったのに何故、今こうして普通の吸血鬼として暮らせているのだろうか。その理由はアルク・スカーレットにある。勿論彼が何か特別なことをしたという訳では無い、しかし歴史というものは少しの差異、少しのズレで方向を変えてしまう、バタフライエフェクトというやつだ。それに伴い、フランドール・スカーレットという吸血鬼は己の内に秘めた『何か』を押しとどめることに成功していた、今までは。

「本当に鬱陶しいね……これは……」

「どうしたの…？ フラン姉様」

「ううん！ 何も無いのよ！」

「そう…？ だつたらいいけど…無理しないようにね？」

愛しい弟が目の前に居るといふその事実だけで理性の鎖が解けそうになる、自分の中の『何か』が飛び出していく、目の前の弟の尊厳を奪おうとする。今日は書類の整理と一緒にする約束をして、舞い上がっていたというのにこれでは天国か地獄かわからなくなってしまう。一旦深呼吸し自分を落ち着かせる、これをすればもう大丈夫。

それにしてもアルクは中々に手際が良い。勿論、今までこれをしてきた私達に比べると遅いが、初めてとは思えぬ処理能力の高さだ。

自分も手を動かしつつ弟の様子もチラチラと見る、全体的に青みがかっているが所々金色のその髪をジツと見つめる。こちらには気づいていないようなので少しそのまま見続ける。

——ああ、あの髪を全て私の色にしてやりたい。なんて、お姉様に怒られてしまう、こんな考え。頭の中が桃色になりかけるが慌てて打ち消す。弟が頑張っているのに自分が書類整理をサボってどうするんだ。

従者からの意見などが届くことがあるので一つ一つ丁寧に見なければならぬ、まあ妖精メイドからの意見はめちやくちやなものが多いんだけど。やれケーキを毎日食べ

たいだとか、館の中に森を作って欲しいとか。別に不可能では無いがいちいちそんなことに時間を使うのは勿体ない、お金はきちんと払っているのだから自分で人里にあるケーキ屋で買ってくれば良いのだ。森は知らん、勝手に休みの日に行け。

「フラン姉様……こちよつと教えて貰って良いかな……？」

「どれ？」

「(ト)ト……」

そう言つてアルクが傍に寄つてきた、めちやくちやいい匂いがする。自分の理性の鎖が一本、二本と破壊されていく音がする。これはまずい、このままだとヤバいかもしれない。とりあえず、そこはこうするのよ、と素早く言いなんとか難を逃れた。

そもそもアルクが可愛過ぎるのが悪いのではないだろうか、そんな荒唐無稽な考えが頭に去来してくるがすぐさま自己嫌悪に陥る、自分の堪え性の無さを大好きな弟のせいにしてしまった自分に対して。

しかしこのままではいつか襲いかかってしまうことは明らかだろう、後でパチュリー辺りに何か良いマジックアイテムは無いか聞きに行こう。

「そろそろ休みませうか、(ト)飯でも食べに行こう？」

「うん」

「今日は咲夜がアルクの為にローストビーフ作ってくれたみたいだよー！楽しみー！」

「後でお礼言つとかないかね…」

やはりアルクは優しい子だ、ならばそんな優しいこの子に劣情を抱いてしまう自分は最低な姉だろう、だからこそ頑張らなければならぬ。姉として、一人の女として、そんな卑しいところは見せてはいけないと私は覚悟を決めたのであった。

|||||

どうも、紅魔館で書類整理の仕事を始めたアルク・スカーレットです。こうやって書類とにらめっこしていると前世を思い出すな、三徹して会社に泊まり込んで本当に死にかけて何を何故か今思い出した。仕事が出来なかった訳では無い、しかし俺はイエスマンだったことが災いした。全て言われたことを断らずにやっていたので、てんてこ舞いになっていたのだ。

しかし今はゆつたりと書類整理をすることが出来る、食材の調達のための納品書やらなんやらを分類によって分けられたファイルに閉じていく。かなり古いやり方だがこの幻想郷にはパソコンなどという便利な物は無い筈なので仕方ないと諦める。

「本当に鬱陶しいね…これは…」

俺のことか…!?と思ひ聞いてみたがどうやら違つたようだ、そもそもアルク・スカー

レットに対してこんなことを言うわけはないので何か違うことに言ったのは明白だった。ならば何に対して？書類か？だがフラン姉様の顔を見る限りそんな単純な話では無さそう。この人が何かに対して悩む姿とかアルクのこと以外では想像がつかない。とりあえず無難に無理はしないように、と言っておいたが中々気になる。

いきなりだが勘というものを皆はどう考えるだろうか、勘は凡人ならば適当なことを言ったり大体こうだろうと言った憶測でしかない、しかしその道のプロ、もしくは勘に頼らざるを得ないような人生を歩んできたものならば？

それは凡人の言う勘とはひと味もふた味も変わってくる。自分の生きてきた経験や判断材料などを全て統合し導き出すのだ、ならばどうなるのか、それはもはや未来予知だ。

アルク・スカーレットの中の人間は勘だけは凄まじかった、しかしそれは何故か悪い方向にしか当たらず毎回毎回辟易していた。

精度は百発百中に近い、しかし何かが起こるとわかっているにもかかわらず回避は出来ない。むしろ何か来るとわかっているからこそ嫌な気持ちは倍増する。そんな勘は年を重ねる毎に精度を増していった。

そんなアルクの勘が嫌な予感を感じていた。何かヤバいかもしれない、確実に自分

に対して不幸な出来事が起こる前兆が今まさに起きていると。

しかしここにはフラン姉様というこの紅魔館で最強の人物が居るのだ、何か起きたとしてもこの人が何とかしてくれるだろう、とひとまず落ち着いた。その後はわからないことを聞きに行ったりして区切りのいいところまで一応終わらせた。すると

「そろそろ休みましようか、ご飯でも食べに行こう？」

とフラン姉様が言ってくれたので頷いておく、休み時間までしつかりある職場など天国じゃないか？一応給料も出るようだしもう少し時間が経ったら姉様達に人里にでも連れて行ってもらおうかな。

「今日は咲夜がアルクの為にローストビーフ作ってくれたみたいだよー！楽しみー！」

何ー！ローストビーフは俺の大好物の一つじゃないか！ワクワクしながら食事場に向かう、何気にこれが初めての食事場での食事だがこれからは慣れていかなければいけない。

ここで俺がローストビーフなどにうつつを抜かさなければ確実に何かやりようはあったというのに、ここから俺は、自分の身を脅かす悪意に晒されていくのであった、他ならぬ自らの家族の手によって。

「藍、今回も駄目だったわ」

「いい加減諦めましょうよ…」

藍は己の主の諦めの悪さにため息をついた。

「駄目よ、絶対に駄目」

「なんでそんなにあの吸血鬼の子供に拘るんです?」

「まあ容姿が可愛かったり魂が清らかだったりとか色々理由はあるんだけど…」

「だけど、なんですか?」

紫は凄く言いにくそうに口を噤んでからその言葉を言い放った。

「このままじゃ確実にアルクはあの館の者によつて殺されるわ、しかも唯一の肉親にね」

藍はその言葉に目を見開いた。驚きを隠せないといった表情で。

「!?!」

「最初あった時は巧妙に隠してて気づかなかつただけど、この前会った時に確信したわ、狂気に囚われた奴がいることにね」

「それは…どつちですか…?」

6 話

狂気、という概念は余りにも広いもので、それはいく重にも人生を折り重ねて積み上げた人間性の中から見える少しの違和感でしかない。何が言いたいかという生まれ時から狂っている者など居ないということだ。

友人や両親などの周りの環境が否が応でも変えてしまう、望んでなどいない、臨んでなどいない。いくら心の中で繰り返そうとも変わっていく自分を変えられない。そうして怪物が出来上がる。

二人の姉妹の話をしよう、その姉妹には弟が居た、賢く優しく愛しい大事な大事な弟が。愛せど愛せど溢れる愛情を持って余しつつも、幸せな生活を送っていた。——自らの親が弟を見限るまでは。

悔しくて情けなくて、何よりも自分達の命よりも大切な物を取り上げられたことに対して怒り狂った。だから殺した、不甲斐ない大人を、自分達の手で。

後悔など微塵もないと言った、むしろ清々しいとまで。いくら姉といえど弟に対してそんな過保護になるのだろうか。

そういえば話は変わるが妹の方は『破壊する程度の能力』とかいう能力を持っていた

と聞く、それさえあれば何でもし放題だ。

勿論姉の方も凶悪な能力がある、『運命を操る程度の能力』というものが。

あの二人は実の親を殺し、弟を救った。しかし何故か釈然としない、何か見落としてる気がする。

パチュリーはそこまで考え、筆を止めた後にバカバカしい、と頭を振る。そしてすっかりぬるくなった紅茶を口に含んだ。

「あの姉妹でミス터리小説風の出だしを考えてみたのだけど、とんだ駄作ね、いつそ笑えてくるわ」

だが何故だろうか、パチュリーはその文を見て全く笑えなかった。

|||||

今日も一日簡単な書類整理をした、その後は自室に戻り本を読んでいる。

しかしどうしてだろうか、全く文が入ってこない。理由はわかっている、あの時の胸騒ぎのせいだ。何故か今もずっとずっと続いている。そのせいで全然読書を楽しむことが出来ない。そんなとき

「アルク、入るけど…大丈夫？」

「私も居るよ！」

姉様達が二人揃って訪ねてきた。珍しいな、というか初めてだ。いつもは姉妹別々に現れるのでそういうふうにならぬか、と決めているのかなあ……って思っていたがどうやら違つたようだ。

「あら、本を読んでいたのね」

「また難しそうな本だね……って、この作家凄い社会不適合者だつた気がする……」

「知ってるの？」

「一応新聞取つてた時期もあるから、なんとなくこの作家の死亡記事覚えてただけだよ」

へえ、どれぐらい前の作家なのだろうか。俺が監禁されていた時か？それともそれより前か？まあ特に気になる話題の話でも無いのでスルーしておく。とりあえず今は何故俺の部屋に二人揃って来たかが凄く気になつて仕方がない。

「それよりなんで俺の部屋に来たの？」

「いや、特別なことは無いのよ？ただ元気がどうか確認しに来ただけ」

「うんうん、お姉ちゃん達はアルクが心配だからね！」

「そつか、ありがとう」

「アルクー！今日も来たわよー！」

嫌な予感が何を指していたのか今明らかになった。そして、姉様達の顔がまるで能面のように変化した様はこれまで生きてきた中で一番恐怖を感じた瞬間だった。

|||||

『一触即発』

今の様子を表すならこの言葉が一番だろう、姉妹は人食い妖怪であっても一睨みだけで殺せそうな眼力で紫を見つめていた。

「遺言はあるかしら」

「お姉様、そんなの良いからもうやっっちゃおうよ」

「アルクー！貴方のお姉ちゃん達が私を虐めるのー！」

「ゆ、紫さん…抱きつかないで…」

「殺す」

その豊満な胸をアルクに押し付けながら泣いた振りをする紫を見て二重の意味で殺意を抱く姉妹、吸血鬼は発育が遅い種族なので仕方ないと自分で理解はしていてもムカつくものはムカつくのだ。とりあえずあの胸は最初に削ぎ落とそうと槍を突き出す姉、しかし。

「ね、姉様、やめて」

庇うように前に出る弟、予想もしていなかった横槍で攻撃をやめるしかなかった姉。何故ここで庇うのか、理解が出来ない。私達は弟に擦り寄る蛆虫を駆除しようとしただけなのに。そんな思いが脳を支配する。

「やっぱり……うまく押しとどめてるみたいだけど、もうそろそろ解放されるわね……」

先程までのお巫山戯がなりを潜め、そこには妖怪の賢者としての八雲紫がいた。

「え……？」

「緊急避難よ、これ以上は流石にヤバいから、掴まってアルク」

「は、はい……!？」

困惑する。なにがなんだかわからない、アルクの顔にはそう書いていた。

「アルク、後でどれだけ私のことを責めてもいいわ、けどこれだけはわかってちょうだい、私は貴方を絶対に助ける存在だということを」

「……………わかりました、紫さんの言葉なら……信じます……」

させてたまるか！弟を連れ去ろうとしていく紫に対してレミリアは必中の槍を放つ、その間にフランは紫の破壊の目を右手に集めていた。しかし紫は普段いい加減な態度を見せてはいても大妖怪、瞬時にアルクを腕に抱きスキマに飛び込んだ。

——必中の槍と共に

「くっそがあアアア!!あの腐れスキマ妖怪イイイ!!」

「お姉様、今は叫んでいる暇は無いよ」

「わかっている!!!今すぐ戦力を集めあの蛆虫の根城にアルクを助けに行くぞ!!」

「言わずもがな、だね」

アルクがその場面を見ていたなら、こう思っただろう。

——誰?この人達?、と

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「グッ!!やってくれたわね…あの吸血鬼…」

「そんな…ああ、紫さん…ごめんなさい…ごめんなさい…俺が弱かったせいで…」

完全にお腹貫通してるわね、これ。治療しにくいように御丁寧に魔法まで付与されてる、しかも能力のせいで避けるという認識すら無くなったとこに追尾してくる槍だ、いくら私の能力が強くてもアルクを守りながらあれを避けるのは不可能だった。

涙を浮かべながらこちらに謝罪してくるアルク、しかし私が聞きたかった言葉はそれじゃないのよ。私は謝りたいからこんなことしたんじゃないんだもの。

「ア、ルク、こういう時はね…ありがどうって言われた方が、嬉しいのよお…?」

「ありがどうございませす…!ありがどうございませす!!なんだって言います…!なんだっ

てやります…！だから起きててください…！今助けを呼びますから…！」

私は聞き逃さなかった。その言葉を。

「ん？今何でもするって言ったわよね」

「え」

「言質取ったわよお！」

槍を腹から引き抜き狂喜乱舞する私を呆然と見るアルク、そしてその顔がみるみる真つ赤に染まっていく。

「さ、最低ですよ…！騙してたなんて…！」

「あらく、でも私のお腹に風穴空いてたのは本当のことだし？」

「うう…心配して損しました…」

「でも嬉しかったわ、ありがとうアルク」

「ど、どういたしまして…」

可愛い、圧倒的可愛さだ。会った時の捨てられた子犬のような顔もあれはあれで可愛かったけど、やっぱり元気にしてるアルクの方が私は好きね。

「そ、それで聞きたいことがあるんですけど…」

「何故貴方をここに連れてきたか…よね？」

真つ当な疑問だ、誰だってそう聞くだろう。

「はい…」

「それについてはこつちで説明するわ、藍！」

「はい、紫様」

すぐに現れる藍、待機しといてくれたみたいね。

「流石にやばいと思つたから連れて来たわ、お茶とお菓子を出してあげて」

「了解いたしました」

「あ、あの…」

「ああ、君の話は紫様から聞いている。私の名前は八雲藍だ、よろしく頼む」

「あ、はい…よろしく、お願いします…」

とりあえずどこから説明しようかと考える、アルクが傷つかないように最低限配慮しないとね。

そう思い紫は居間に入つていった、時間は有限だ、急がなければならない。なぜなら、もうすぐそこまで狂気が迫ってきているのだから。

7 話

俺は居間に座り紫さんと向き合っていた。話を聞くために。

「そ、それでの、姉様達は どうしてあんな豹変して…」

ほんとそれである。誰なんだあれは…

「それに答えるには少し昔の話をしなければいけないわ、貴方は昔のあの子達を知っている？」

「い、いえ、何も聞いていません」

頑なに姉様達は俺が地下に籠っていたときの上の様子について話さないんだよな、いつも答えをはぐらかされまた今度ね、と返ってくるので聞いてはいけないことなのだと自身で認識していたがよくよく考えると何故話さなかったのか気になってしまう。

「あの子達はね、幻想郷に来たその日に親を殺したのよ」

「えっ…!?!」

まさかの驚愕の事実が発覚。

「一応貴方は父親から幻想郷に来たということは教えられていたでしょう？」

「ええ、まあ扉越しですけど…」

めっちゃ塩対応だったから覚えてるよ。

「その後すぐにレミリアとフランは父親を、そして母親も同様に惨たらしく殺したの」
「そんなことが…」

ひええ…怖い怖い。やっぱやべー人らじゃねーか。

「その事自体はおかしいことでも無いと思うのだけど…問題はその後ね」

「それ以外にも何かあったんですか？」

これ以外にまだ何かあるのか、これ以上は胃が持たんぞ。

「その後レミリア一派は妖怪の山に攻め込んで来たわ」

「ええっ!」

妖怪の山、天狗や河童の住処と聞いている。そんなところにカチコミをかけたのかお姉様方は。

「暴虐の限りを尽くし、殺し続けた。弟を助けずに何故こんなことをしたのか…それは己にある『狂気』を抑える為、一時だけでも弟と居たいという思いだったんでしょうけど…もう無理ね」

狂気とはまた物騒なワードが出てきたな、ここまでの話の流れからして碌でもないことだとは思っていたがここまですりだつたとは。我が姉様達もどうやらまともな吸血鬼ではないようだし、ここはどうすべきか…

「狂気に囚われたものは相手を傷つけ、蹂躪し、殺すことに喜びを感じるようになってしまふ。それは家族も例外ではないわ。アルク、もう貴方はあそこに戻らない方がいい」俺がどうするか…というよりも、アルクならどうするか。家族がまさかのイカれた奴だったら、信じていたのに裏切られた気分になるかもしれない。むしろ全然平気という奴のほうがイカれてしまつてるだろう。

「ハッ…ッ…！…ッ！」

「アルク…？アルク！」

極限まで追い詰められたものというのは、精神が圧迫され過呼吸を起こす。実体験だ。

「紫様！いけません、急激なストレスによる過呼吸です！」

「なんで…信じて…たのに…！…ッ…！」

「アルク！大丈夫…大丈夫だから…」

「紫様、このハンカチで口を塞いでください。そうすれば治まるはずですよ」

俺程の役者になれば過呼吸を自発的に起こす事など造作もない、魔力で血中の酸素の速度を限界まで上げて無理に過呼吸を起こしているだけだな。花の香りのするハンカチを押し付けられ、徐々に落ち着きを取り戻していく（という演技）。ついでに意識を落とす、意識があると不自然だからな。それでは、おやすみなさい。

「アルク…私が何とかしてあげるから…！」
「紫様…」

|||||

薄暗い森の中で凄まじい威圧感を持った集団が佇んでいた。その影響により森の生物は軒並みその姿を消していた。

「それで？ここがあいつらの根城に続く入口なのか？」

「まあここ以外見つからなかったしねー、行くしかないでしょ」

そう言ったフランの口の端は釣り上がっていた。しかし目は笑っていない。

「お嬢様、美鈴も準備完了致しました」

「遅れて申し訳ありません」

美鈴と呼ばれた中華服の女がレミアに頭を下げるがレミアはそれを手で制す。

「いい、ただし結果は出せ、それだけだ」

「後はー、パチュリーだけだねー」

「それが…」

「私は行かないわよ」

パチュリーの確固たる意思がそこにはあった。

「パチュリー、聞こえなかった。もう一度言ってくれ」
「だから行かないわ」

その言葉には取り付く島もないことが感じ取れた。

「何故だ！」

「今の貴方について行く気はないという事よ、そもそも私従者じゃないし」

「くっ!!もういい!勝手にしろ!」

本当に哀れだ、まるで大好きだったおもちやを親に取り上げられた子供のように怒る友人を冷ややかな目で見ながらパチュリーはそう思った。

何故こうなったのか。理由は明白、『狂気』の影響だ。『狂気』というのは生きているならば誰でも持っているものの一つ、それが大きいか小さいかの問題。

しかし、あの姉妹はそれが大きすぎた、親を殺す為に尋常なやり方ではあんな早く遂行出来なかったのも確かだ。しかしそれを選んだ友人を止められなかった私もまた共犯者のようなもの。ならばどうするか、覚悟を決めようじゃないか。パチュリーはそう思い行動を開始する。

パチュリーは友人が入っていた入口とは別の入口を自ら作りそこに飛び込んでいった。

マヨヒガでは八雲家が集まって顔を突き合わせていた。全員覚悟を決めた顔をしている。そして、一番に紫が口を開いた。

「橙、藍、今回は覚悟を決めて欲しいの、最悪死ぬかもしれないから」

「大丈夫ですよ紫様」

「はい！橙も大丈夫ですよ！」

そこに現れるはずのない客が現れた。紫の洋服に身を包み、魔導書を片手に持った人形のような顔の女性。パチュリーだった。

「ねえ」

「何者だっ！」

突然の声に藍は殺気を向ける。

「怪しいものじゃないわ、ちよつと話し合いに来たの」

それを飄々と受け流すパチュリー。まるで正反対の性質を持った二人だ。しかしそこで紫がパチュリーが何者か気づく。

「つて、貴方紅魔館の魔法使いじゃない」

「ならば話し合いなど不要！ここから今すぐ立ち去るか私達に無惨に殺されるか選べ

！」

一二つに一つ、是非もなし。しかしパチュリーは違う選択肢を選ぶ。

「私の友人を……助けて欲しいの」

「貴方の友人というと……レミリアとフラン？」

紫が合点の言ったような顔をする。何故パチュリーがこの場に危険を犯してまで来たのかわかったのだろう。

「ええ、あの子達は今狂気に支配されているだけのただの吸血鬼、まだなんとかなる。いや、私が何とかする。だから協力して欲しいの」

「紫様！聞く必要はありません！」

「藍、ちよつと黙ってなさい」

「なっ……！紫様?!」

まさかの主の言葉に藍が目を見開いて驚く。何故、といわんばかりの顔だ。

「話を聞いてくれて助かるわ、今のあの子達はいわば二重人格の裏側の人格のようなものなのよ、記憶は共有しているけど感情は別にある。つまりあれは本来のレミリア・スカーレット、フランドール・スカーレットとは別人と考えてくれていいわ」

「それは知ってるわ、けどどうするのかしら。私の能力でも面倒臭いことこの上ないわよ？あれを分離させるのは」

自分に不可能なことをこの魔法使いが出来るとは思えない。そう思った紫。しかしパチュリーはそこで初めて表情を変え、得意気にこちらを見据えた。

「そんなものをつくにこっちで対策してるわよ。これを見て」

「それは…?」

何かを懐から出てきたパチュリー。怪しいものかどうか警戒する藍。まだ信用してはいないようだ。

「私の全てを注ぎ込んで作った魔道具よ、これには形無いものであろうとも分離させ、バラバラにする力があるのよ。それは概念であろうと感情だろうと関係ないわ」

「へえ…そんな便利なものが…」

とは言いつつもこれはこの魔法使いが作れるレベルのものじゃないことに違和感を覚える。

「まあフランが居なきやこんなもの作れなかったことは魔法使いとして悔しいけどね…」

なるほど納得がいった、と紫は頷く。パチュリーは首飾り状のそれを少し自慢げにそれを紫に見せ、そして作戦の説明をし始める。

「作戦は本当に単純よ、まずは貴方達に囿になつてもらおう。そこで隙を見てこの首飾りをつけさせて私が魔力を注ぎ込むだけ。ね？簡単でしょう?」

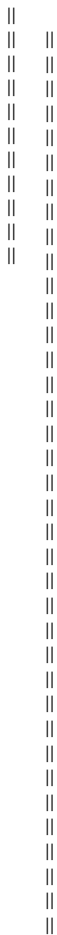
「はあ…貴方無茶言うわねえ…」

「無茶も通すわよ、友達の為ですもの」

「まあいいわ、乗りましょう。アルクにとつてもお姉さんが生きていた方が良さだろうし…」

「決まりね」

こうして一時だけとはいえ協力関係が結ばれたパチュリーと紫、各々が大事なものを守る為にこの戦いに勝つと決めている、そこには一片たりとも恐怖の感情など無かった。



嫌だ。

なんで自分だけ。

『僕』はただ『普通』が欲しかっただけなのに。

——別にお前のせいじゃない、気にすんな

なら誰のせいなの？

——あ、誰かのせいだ。少なくともお前じゃない。

ねえ

—— どうしたよ

君だけは『僕』の味方で居てくれる？

—— 味方で居るかどうかは知らんが…一緒には居てやるよ

そっか、ありがとう。

—— はいはい、どういたしまして。それより今日は何するよ？

本が読みたいな

—— 良いぞ、俺も本は好きだからな

そっか、良かった

—— なんだ、笑えるじゃねえか。なあ、ア・ル・ク

8 話

——何が正しいかなんてどうでも良かった。

弟を救うためにレミリアが最初に捨てたのは情けだった。冷徹に、冷酷に、冷静に。目的の為ならなんでも殺した。

親も、同胞も、罪の無い赤子でも。正しいか間違ってるかでいえばレミリアは間違はなく間違ってる。踏み抜き、踏み外し、落ちていくだけのそんな自分の一生。それでも弟に会いたかった、会って話して遊んで、姉として接したかった。

それなのにあいつは、八雲紫は私からアルクを奪った。何でも持っている筈の八雲紫がだ。私はアルクと紅魔館以外何も持ってない、なのに何故私の唯一のものを奪っていくんだ。アルク以外ならなんでもくれてやる、でもそれだけは、その子だけは譲れないんだ。アルクから直接出ていく旨を言われたなら納得しよう、だが連れていくのだけは許さない。アルクを渡さないというのなら私は何処までもこの強さに、堕ちていく。

どれだけ身を滅ぼそうとも、魂を削ろうとも、私はここで戦わなければならぬ。だが無情にも今まさに八雲紫の攻撃が私の右腕を吹き飛ばした。ほかのメンバーは九尾の従者にボロボロにやられている。そしてフランも私と同じような状況だった。

——同情の目がこちらに向けられていた。

パチュリーもどうやら向こうについたようだった。そりやあそうか、こんな不甲斐ない友に味方する訳が無いものな。そして何やら首飾りのようなものをつけられる、絶対服従のマジックアイテムか何かかと思いつつも抵抗できるほどの気力も無い。フンは暴れているようだが九尾に拘束され身動きが取れなくなってる。

そこにパチュリーが近づいて首飾りに触れる、するとフランからふっ、と表情が抜ける。そのすぐあとにポロポロと泣き出した、どうしたのだろうか、もう諦めるしかないと思ひ抵抗はしなかった。そして私の首飾りにも触れた。

私は頭の中から何かが消えたのがわかった、その何かの正体もまた同様に。すると自然に涙が溢れてきた、溢れて溢れて、拭えども止まらなかつた。喜び、悲しみ、怒り、後悔。様々な感情が一気に押し寄せてくる。

そうして無様にも泣いていると、八雲紫の家の障子が開き。そこには

——探し求めていたものがそこに居た

「レミリア姉様、フラン姉様。お話があります」

少し驚いたが、まっすぐアルクの顔を見る。罵詈雑言だろうが私は受けなければならぬ。この子に求めていた劣情や邪な妄想はいくら狂気のせいとはいえ許されるもの

では無いだろう。今はなんでもいいから私を罰して欲しい、殴つても蹴つてもいい。どうか、傷をつけて欲しい。

「僕」はこの八雲紫さんの家に少しの間居させてもらうことにします」

当たり前だな、そんな気持ちが出来する。フランも同様に沈痛な面持ちでアルクの顔を見ている。たしかに紅魔館に帰って来てくれる可能性は低いと思っていた。

「僕は姉様達に醜く嫉妬していました、なんで僕だけこんな目に遭わなきゃいけないんだと。そんな自分が大嫌いです、今も」

そんなこと当たり前前に考えることだ、何も気にしなくていい。事実なんだから。私達もつとちゃんとしていればそんなことにならなかつた筈だ。そう言いたい、けどそれを言つてしまえばアルクの覚悟を邪魔してしまふ。

「だからこそ、ここで一から自分を見つめ直そうと思います。まだ紫さんの式になるつもりは無いですし、どうなるかわからないですけど。スカーレット家の長男として胸を張つて帰つてくれるように努力します!」

そう言つてアルクは笑つた、久しぶりに見るアルクの笑顔だった。それを見た私達はたまたまアルクに駆け寄り抱き締めた。切なくて、寂しくて、悲しい筈なのに、嬉しかった。また笑顔を見ることが出来た、なんの混じり気もないまっさらな笑顔。

「たまには帰つて来てくれる…?」

「うん、約束する」

「ごめん、ごめんねえ……」

「姉様達が僕に謝る必要は無いよ」

こうしてこの騒動は幕を閉じた。けしてハッピーエンドとは言えない、けれどみんな泣くのをやめて前を向き始めた。それは些細な事だが意味のあることなのだろう、少なくとも当人達にとっては。

|||||

よく眠ったと思って起きたら勝手に話が進んでた件について。え？嘘でしょ？

あの後起きたら紫さんが泣いていて、どうしたのか聞いたら俺がここに住むことを決めてくれて嬉しいなどとほざきやがったのだ。

俺は否定することなどもちろん出来ず、曖昧な感じに頷くことしかできなかつた。

藍さんも良く自分の口で言ったな、偉いぞと言いつつ始末である。藍さんの式の橙に至っては弟が出来て嬉しい！とか訳の分からんことまで言い出した。まともなのは俺だけか……！

そんな俺は今藍さんに尋問のようなものを受けている、辛い。

「ここに住むにあたってとりあえず何が出来るかを聞いておこう。アルクは家事などで

「これが得意とかあるか？」

「自炊したり家事は全般的に出来るんだ、凄いだろ。」

「多分全般的に出来ないことは無いと思います…」

「ほう、料理も出来るのか」

「少し感心したような顔でこちらを見る藍さん。ふふん、もつとちやほやしてもええんやで？」

「まあ本職の方や主婦の方などには及ばないと思いますが…」

「それならばこれから覚えていけばいい、基本さえ出来ていけば上々だ」

「ところで尻尾の毛並み綺麗ですね、何か特別なこととしてらっしゃる？」

「は、はい」

「…あと、もう一つ」

「なんででしょうか…？」

いきなり尻尾で絡め取られる、毛がモフモフで有り体に言って天国だ。俺はここが幻想郷か…と思いつつその感触を享受する。

「お前はもうここの家族だ、好きならだけ甘えていい。もちろん私以外でも大丈夫だ。あ、紫様に甘える場合は一回伺えよ？」

「は、はい」

「ん、いい返事だ」

顔を手でグツと向き合わせてからニコツと笑う藍さん。並の男ならあれで一生魅了にかかっていただろう。恐ろしく速い優しいさによる攻撃、俺じやなきや見逃しちゃうね。

「じゃあとりあえず晩飯の準備を始めるとしようか」

「で、では、具材を切りますね」

前世では男料理バンザイだったから切るのは得意だ。カレーも具がゴロゴロしてる方が好き。

「いや、今日はそこで座って見てくれていたらいい、お前の歓迎会でお前が料理を作ったと紫様に知れたら私が叱られてしまう」

「あ、ありがとうございます」

そう言つて藍さんは白菜や鶏肉や白葱を切っていく。え？何を作っているかつて？

——鶏の水炊きだ

紅魔館では洋食しか出てこなかった。当たり前前だろうな、あの館の様子で晩飯に肉じゃがでも出てきたら景色に合わないだろう。

しかし俺は洋食より和食の方が好きなんだ、米が食べたくて仕方なかった。そう考えると過程はともかくここに住むのも悪くないだろう。

藍さんは既に野菜を切り終え今は中に具材を入れて煮込んでいます。お揚げを入れるときだけめちやくちや目が輝いていたのは少しときめいた。あれは卑怯だ。

「大体この家の調理器具の位置はわかったか？」

「はい」

余裕だな、記憶力は結構良いんだ。

「なら今度は一緒に作ろう」

「はい！」

「ふふっ」

わしゃわしゃと頭を撫でられる、なんだか気恥しい。例えるならばかなり年の離れた美人な従姉妹に可愛がられているような気恥しさだ、どこかくすぐつたい。

「藍ー、もう出来たー?」

あんたはもっと年上っぽくしろ。

「今運びますよー」

「藍さま、お手伝いします!」

「あ、僕も…」

「「アルクはいいから」」

「は、はい」

食卓のテーブルに半ば強制的に座らされて次々と運ばれてくる食材を見る。鶏は人里から貰ってきたかなり新鮮なものようだ。俺がスーパーで買ってきて食べていたものとは確実に格が違う。

「じゃあ、みんなアルクがここに住むことを祝って」

「「「いただきます」」」

「アルク、私が入れてやろう」

「あ、ありがとうございます」

藍さん優しく好き。前世でもこんな奥さん居ればなあ…

「あつ、藍ずるい！私もアルクに入れてあげたい！」

あんたは一番年長でここで一番偉いんだから座つてろ。

「藍さま！私も！」

橙は元気だね、オジサンにちよつとは分けて欲しいよ。

「いや、橙はともかく紫様はこの主なのですから。アルクが恐縮してしまうでしょう？」

「そんなの関係ないわ！もう家族ですもの！」

紫様はお母さんというよりお婆ちゃんって感じですよね。

「はあ…アルク、どうする？」

「大丈夫ですよ、俺も紫様に入れて欲しいです」

「ほらー!」

「まあいいか…」

そう言つて藍さんにまず鍋の具材を入れてもらった。白菜、鶏肉、お揚げ、お揚げ、お揚げ、お揚げ…お揚げばつかじやねえか! いや、別に良いんだけどね? まあとりあえずいただきます。

うつまあ! え、いや嘘でしょこれ! こんなに鍋つて美味しいものだっけ? 白菜は少し食感を残し、鶏肉は弾力豊かで味も芳醇だ。お揚げも多分これ手作りだな、めちやくちや美味しい。しかもあらかじめ器に入れてたポン酢との相性抜群だ。あ、やばい泣けてきた。

「ど、どうした!? 何故泣いているんだ!」

「藍! 鍋に何か入れた!」

「い、いえそのようなことは!」

「美味しい…です」

「え?」

「美味しく暖かくて…今まで食べたことがないくらい、美味しい…です」

うま、うま、うま。くっそお! ただの水炊きがなんでこんなうまいんだよお!

「っ！そうか！それは良かった！ほら、まだまだあるぞ！」

「あつ、次は私を入れるわ！」

「その次は私です！」

「ありがとうございます」

その顔を見た八雲家はこの子を守ろうと一層決心したと言う、涙で濡れていても幸せそうに笑顔を作ったその少年を。まあただただ鍋が美味すぎて感激して泣いてるだけの馬鹿とはまさか思わないだろうから、これは仕方ないことだろう、

9 話

今俺は藍さんの尻尾に絡め取られ昼寝をしている。何故か鍋を食べていた時を境に、藍さんがよくこうして構ってくることが増えた。別に嫌な訳では無いがモフモフしているこの感触に包まれていると一生ここから動けなくなりそうで少し怖い。

肝心の藍さんとはいうとどうやら仕事のことを書き記しているようだ。そして橙は野良猫達を配下にする為にどこかに出掛けているし紫様は『博麗神社』なる建物に居る。そこでは博麗の巫女という妖怪に対する抑止力とも呼べる人物が代々幻想郷を守っているらしく、今その次代を担う巫女を育成しているところらしい。

「藍さん」

「どうしたアルク、眠たかったら寝てくれていいぞ。今日は良く働いてくれたしな」

優しい、理想の上司。

「あ、ありがとうございます。いや、博麗の巫女というのはどんな人物だろうと疑問に思っています…」

「あー、あれは一言で言うと天才だな」

「天才、ですか?」

そうなんだ、藍さんが言うからよっぽどだな。

「ああ、どんなことでも一度見ただけで吸収してそれを使いこなすことが出来る」

「それは…凄いですね」

それ人間なのか？

「その代わり、少し人間性に問題があつてだな…」

「人間性という」と

「余り他人に興味が無いんだよ、まるで空気のような雰囲気を纏っていてな。そのせいで人を寄せ付けないのも偏屈具合に拍車をかけてる」

要するにぼっちか、人間というのは他人と違うというだけで疎外してコミュニティから排除しようとする。

凡人ならばそこで折れてしまうことだろう、しかし天才は違う。

何故ならばそれを乗り越え人の上に立つことが出来る才能を持っているからだ。

俺にはそんなこと到底理解も出来ないが、博麗の巫女がそんな人間だということは今わかった。

そして、出来るだけ博麗の巫女には関わらないでおこうと決心した。俺は天才とか才能とかいう言葉が嫌いなんだ、姉様達？あの人達は天才というよりは怪物だ、嫉妬する気すらおきない。俺の醜いところが全面に出ているなあと思った。まあ直す気は無い

けど。

「気になるならば会ってみるか？」

「遠慮しておきます」

会ってたまるか、意地でも会わんぞ俺は。

「め、珍しく食い気味で答えたな…」

「それよりも、今日の晩御飯の話をしましょう」

辛い時は飯の事考えるに限る。

「ああ、今日は紫様が持ってきてくれたホツケという魚の干物とほうれん草の味噌汁だ、あと白菜の漬物もある」

「ホツケ…？」

ホツケ、ホツケ！いい響きだ！大好きな干物をここでも食べられることに感動する。やったぜ。

「海というところで捕れる魚だ、この幻想郷には海が無いからな。海の魚は必然的に外から持ってくることになる」

「海…本で読んだことがあります」

そういえばあの本はどんな内容だったっけ？確かサメが出てきて…なんかクソみたいな内容だった気がする。

「そうか、なら今度紫様に言つて外の世界の海に連れて行つて貰うか？」

「外の世界……」

「そうだ、こことは違つてお前にとつては新鮮だろうな」

今、外の世界はどれぐらい時間が進んでいるのだろうか。もしかすると俺の前世の世代くらいかもしれない。

ならば、俺の家族に会えるかもな。そう思い自分の住んでいたところを思い出す。

——あれ、俺の家族つてどんな人だっけ？

……いや、まあ何百年とこつち来てたら忘れるわな。特に今は前世に思い入れも無いので思考を破棄する。考えなくていいことは深く考えないタチなんだ俺は。それよりも海か、いいかもしれない。行くとしたら夜だけだな。

「日光なら紫様がどうかしてくれるぞ？」

「本当ですか!？」

嘘?!マジで!

「一時的なものだがな。永続的に体質を変えてしまつたら吸血鬼として存在を維持出来なくなる可能性がある」

「そ、そんなことが……なら海に行きたいです!」

海は好きだ。冷たいし、近くの飯屋美味しいとこ多いし。

「そうか。わかった、そう伝えておく」

「ありがとうございます！」

やったぜ、これで海の近くの海鮮料理の店も行けるし海で涼むことも出来る。藍さんの水着姿見たいのもあるしな。紫様？ あの人は脳内小学生だから別にいいや。

「ただいまー！」

「紫様、おかえりなさい」

「おかえりなさいませ、紫様」

「ええ、つてアルク！尻尾に埋もれすぎてほとんど姿見えないわよ?！」

ホントだよ、めっちゃモフモフしててすごい気持ちいいけどね。

「すいません、こんな格好で」

「いえ、まあいいのだけど…」

中々に困惑しているようだがひとまず納得したように居間に座る紫様、そうしていると藍さんがお茶を入れに行くために動き始めた。

——俺を尻尾で持ち上げたまま。

俺はされるがままに尻尾に巻かれた状態でキッチンから居間まで往復した。紫様は笑いを堪えることが出来ないといった表情でそれを見ている、絶対許さねえからな。

「あ、忘れてた」

これが居間に戻ってきた藍さんが言い放った一言だ、それで紫様は完全にツボに入り過呼吸になっていった。そのままあの世に行ってしまえ。

少しバツの悪そうな顔をする藍さん、まあ悪気無かったみたいだし別にいいよ。

「余りに自然だったから…すまない」

「別に大丈夫ですよ、けど紫様は許しません」

そうだぞ、反省しろ。

「あつ、あつ、ごめんごめんごめんなさい、許してアルク！」

「冗談ですよ…」

「良かった…」

ホツとしたような表情をする紫様、単純だなあと思いながら尻尾でモゾモゾと動く。昼寝するとしよう、特にやることも無くなったからな。寝ることが大好きな俺からしたらこの環境は最適だ。フワフワでモフモフでいい匂いがする。

「どうした、眠くなつたか？」

「はい、少しだけ眠ります…すいません」

尻尾布団すっごい気持ちいい。永住しよう。

「ああ、別にいいぞ。おやすみ」

「おやすみなさい…」

おやすみなさい。

「おやすみなさい、アルク」

「……………」

むにやむにや…BBA…BBA…

「あれ、私におやすみは？」

「紫様、静かに。もう寝てます」

藍は尻尾を前に持つてきてアルクの頭を撫でた。まるで母親のような顔で。

「え、嘘でしょ？寝るの速くない？」

「疲れが溜まっていたのでしよう、良く働きましたからね」

紫は自らの従者のそんな顔を見てふんわりと笑いながら自分もアルクの頭を撫でる。

手で払いのけられた、涙目である。

「まあいろんな家事してくれているみたいだし、仕方ないか…」

「私も家事だけに専念は出来ませんからね、助かっています」

「料理も最近うまくなってるみたいね？」

「ええ、中々筋がいいです」

二人の保護者は笑い合いアルクの寝顔を微笑ましく見続けた。紫はたまにアルクの頬をつついたりして藍に怒られていた、それはまるで父を叱る母のようだったという。

ここは旧地獄、そして私はこの主である古明地さとりです。地霊殿というところに妹とペットと共に住んでいるのですが、実は私には今悩みがあつてですね、私には友達
が居ないのですよ。

いや別に性格が悪いという訳では無い筈です。しかしこのあまり変化の無い表情と心を読むというさとり妖怪の特性によりどんな種族からも嫌われているわけです。

しかし私は諦めません、絶対に。友達の性別は問いません、容姿は出来るだけ可愛い子が良いですね、あと性格も良くて…出来れば心が読むことが出来ないような…自然体で付き合える子が良いです。休みの日とかにクッキーとか差し入れて来てくれるよ
うな子だつたらもう完璧ですね。

え？高望みしすぎ？何を言っているんですか、私が読んでいる本には友達とはそういうものだと書かれています。本の名前？ええと…『猿でもわかる！友達の作り方！』

ですね：猿でもわかるんですから頭の良い私が読めばもつと知識をつけることが出来るということですよ。

いや、お隣やお空はペットなので友達にはなれませんね、というかあつちがめちやくちや私に対して恐縮しているので絶対無理です。前に「そこのお玉取ってください」と料理中に言ったら「わかりました：今すぐ邪魔な奴のタマ取ってきます！」と言われた私の気持ちわかりますか？

何やら妹のこいしは友達を見つけたようだし姉としてもここで友達が一人も居ないなんて言えないじゃないですか、情けないですし。

そういえば前に妖怪の賢者である八雲紫さんに会ったんですよ。凄いですね、彼女。私相手なら二秒もかからず倒してしまおうでしょう。それに心も読めませんでしたから。

心が読めないなら友達になったらどうだつて？はは、面白い冗談ですね。ミミズとライオンが友達になれますか？つまりはそういうことです。

心が読めない相手といつてもいろいろ居るんですよ、まずは意図的にブロックしてもの、意図せずブロックしてもの。意図せずしている人は誰かから守護されていることが多いですね。結界やらなにやらを貼りまくってます。私が友達になりたいのはそういう人です。

守られているということとはそれだけ素晴らしい人だという証明のようなものですか

らね。

そんな人を見かけたら絶対逃がしません。地霊殿で保護します。私は優しいですからね。

まあ何が言いたいかという友達居ないからそんな人を探しに地上に行きたいということ。この旧地獄は荒くれ者しか居ませんからね。

鬼と友達とか絶対嫌です、胃が縮こまって最悪の場合過労死します。

鬼といえは勇儀さんですね、あの人は苦手です。酒臭いし。何故か私に話しかけてくる奇特な人もあります。

そんなことを考えながら今日も今日とて地霊殿で旧地獄の仕事をします。私はいつになったらこんなことから解放されるのでしょうか。

ああ…地霊殿の主辞めたい…友達作って一緒に遊びたい…

10話

今日は人里に買い物だ、客が来るようなのでお茶菓子を買うのと米を買ってくるように言われ一人で来ている。仮にも妖怪なので米ぐらいなら一人で持てるが正直な話をするとな面倒臭い、帰って昼寝でもしてご飯食べてまた寝たい。まあ居候させてもらって身でそんなことを言えば確実に居場所が無くなるので絶対にそんな事言わないが。

マヨヒガから森の中に出て直進したところにあるようなので迷うことも無いだろう、問題はこの森に妖怪がいる場合だ。中級妖怪までならギリ倒せる程度の実力しか無い俺にとつてはここに長居したくない、意識的に足を速めて進んでいく。

ところでどれぐらい直進なのだろうか、こんな時に空を飛べたら話は別だろうがあいにく俺は飛べないんだ、悲しいな。

特に飛べなくても不便はしていないのでそんな卑屈にはならないが、飛べた方が便利なのもまた事実。帰ったら紫様あたりに翼無くても飛べる方法とか聞いてみようかな。あの人普通に何も無くても飛んでるし俺も努力すればいけるだろ。妖怪としての格は確実にあつちの方が上だからなんて言われるかはわからんが。

そんなこんな考えながらとぼとぼ歩いていく、ていうかこのシヨタボデイでは歩幅

が小さいから全然進まん。吸血鬼って何歳になれば成長するんだろうか、今でも結構歳はとってる気がするんだけどな。ふと、俺より年上の姉様達の姿を思い出し納得する。たぶん吸血鬼は成長が遅いんだろう。そう言い聞かせながら歩く、すると

「ばあ〜〜！驚け〜!!」

「うおおおおおおお!!」

横から何か出てきたので雄叫びを上げながら魔力弾を撃つ。正直めちやくちやびびった、魔力弾は見事に当たりその何かは沈黙した。

いやしゃーなししゃーなし、こんな絶対びびるやつやん。心霊スポット行って白装束の女が襲いかかってきたらびびるだろう？それと同じだって。まだドクドクと鼓動を鳴らしている心臓を落ち着けつつその物体に近寄る。

なんだこれ、傘か？目と舌がある、気持ち悪つ。そしてその下に居る妖怪らしき女を見る。中々の美少女だ、魔力弾を撃たれて白目を剥いていなくなったらさぞかし可愛かっただろう。傘をそつとその女に被せつつ立ち上がる。とりあえず起きる前にここから立ち去ろう、バレなきや犯罪じゃない。

そもそも俺悪くないだろこれ、いきなりなんかしてこようとしたから反撃しただけであつて悪気があつたわけじゃないし。スタスタ歩きながら言い訳がましいことを心の中で垂れ流す。しかしあいつはなんであんな所であんなことしていったんだろうか。疑

問に思うばかりである。

そこからは何事も無く人里の近くまで一直線に行く事が出来た。門番のようなやつが俺を見ても何も言わなかったところを見ると明らかな妖怪でもない限りは通して貰えるみたいだな。良かった良かった。

安堵しつつ里を回りお茶菓子と米を買った。その後は特にすることも無いので団子屋で団子を食べつつゆつくりする。一応小遣いは貰っているので安心だ、橙より少ないのは少し不満だがな。

「そういえば聞いたか？」

「ああ、あの鍛冶屋の唐傘妖怪が誰かにやられたらしいぞ」

「死んではいないみたいだがひでえ話だな…」

…ふう、帰るか。

そう思い立ち上がろうとする、お代はもう払ったし団子は食べたし人里にやり残したことは無くなったからな。早く帰らないと茶菓子が傷んでしまうし、米も早く炊かないと晩御飯に間に合わなくなってしまう。仕方ないことなんだ、別に逃げようとしてるわけじゃない。

「おい」

「ヒッ」

いきなり後ろから声をかけられる、声質は少女のものだったがそこには確かな凄みがあった。ヤクザかなにかやつてらっしやる？

そう思い振り向くとそこにはもんぺを着た白髪の日付き悪すぎな美少女がいた。明らかに纏っている覇気は少女のものではないということを除けばドストレートの容姿だ、致命的な欠点だな。

「お前妖怪だろ」

「い、いえそのようなことは…」

ガチビビりしているがここはどうかこうにか切り抜けなければ見世物のように殺される、いや殺されはしないだろうけど絶対監禁されて尋問されるだろう。そうなれば八雲家の皆に迷惑がかかる上に姉様達が入りに攻め込んでくる可能性がある、オイオイ俺死んだわ。

ぷるぷる、俺は悪い吸血鬼じゃないよ。アルクは仲間になりたそうにヤンキー少女を見た。アルクは無視された。アルクは逃げ出した。知らなかったか？ヤンキー少女からは逃げられない。

そんなやり取りを繰り返しているとため息をつかれた。ため息つきたいのは俺だつていうのに。

「別に今すぐ何かする訳じゃないよ、大人しく付いてきてくれたら何もしないし」

「いや、本当に面白い物来ただけなんです…!信じてください!」

そんなこと信じるわけ無いだろ!いい加減にしろ!絶対何が目的かをジワジワ拷問しながら聞き出そうとするにちがいない。この女が放っている威圧感がこの後起こる残酷ショーの凄惨さを教えてくれている。俺は絶対に屈しないからな!

くつ殺くつ殺と心の中で叫びながらビクビクと怯える、どれだけ虚勢を張ろうが怖いものは怖いのだ、気分的にはオヤジ狩りに遭った中年の気分。もしくは何も怪しくないのに職質されて荷物全部出されたときの気持ち。

「とりあえずこつち来い」

「ヒツ、ごめんなさい!ごめんなさい!」

「ちよつ、やめろよ。私が悪いみたいじゃないか」

「おい…妹紅さんがちつちやい男の子連れて行こうとしてるぞ…」

「まさかそういう趣味か…?」

「まじか…俺ファンだったのに…」

「おいお前ら!違うからな!」

こうなつたらありつたけの風評被害をばらまいてやる、こいつ真性のシヨタコンですよ!親御さんは自分の息子さんを家に保護してあげてください!俺が犠牲になつてい

るうちに！

まるで何かの小説の名脇役のようなセリフを心中で叫びながら引きずられていく。全然かつこつかないな、ダサすぎだろこれ。

引きずられ連れてこられたのは少し大きめの建物の前だった、ここが拷問部屋か。あ、今までありがとう姉様達、メイド長、八雲家の皆：半ば諦めつつ手を引かれる。

俺は功労、体は能動、心は焦燥、イエア！やけくそになり心でライムを刻み出す。俺、幻想郷でラッパーになって食っていくわ（錯乱）

「とりあえず慧音に判断してもらおうから」

「け、慧音……？」

「中入ればわかる」

そう言つてドンツと背中を押された、すると中には気の強そうな目をした青みがかつた髪の毛がこちらを見据えていた。

余りに強い視線なので自然に目を逸らしてしまう、ああいう目力強い人苦手なんだよな。全部見通したみたいだな目だ、怖い。

「慧音、こいつ妖怪だ。どうする？」

「妹紅、あまり虐めてやるな、怖がつてる」

「そんなつもりは無いつて、皆勘違いしてる」

妹紅と呼ばれた少女は頬を膨らましそっぽを向く、いやめちやくちや睨んでましたよね俺のこと。目だけで殺すという意思を感じそうな程に情熱的な視線を向けてきた人がする表情じゃないよそれ。ヤのつく人がいちごパフェ食ってるみたいなものだよ。

「それで、お前はなんて名前なんだ」
「アルクです…」

「そうか、私はこの寺子屋で教師をしている上白沢慧音だ」
「教師を、ですか」

「ああ、それでお前に聞きたいんだが」
「な、なんですか？」

「お前はこの人里に危害を加える気はあるか？」
「ないです！ないです！ないっいたらないです！」

首が取れるほどにブンブン回す、ここで疑わしきは罰するとか言われたら俺と人里が終わる。槍と破壊の力が躊躇うことなく奮われるだろう。慧音さんは俺を探るような視線を向けた後、妹紅にも視線を向け首を振った。

なんだこのジエスチャー、どういう意味だ。めちやくちや不安になりながら神に祈る、悪魔である吸血鬼が神に祈るとはおかしいとは思いますが今は祈ることしかできない。ああ、どんな神でもいいので俺を助けてください…

「おい」

「ひえっ」

「そんな怖がらなくていい、お前は害がないと判断された。すまなかつたな」

えっ、マジで！やったあ！いやそりやそうだよ、俺みたいなくそ雑魚妖怪が人里に危害を加えるわけないじゃんか、手間を取らせやがって。妹紅さんが出ると言ったので言われるがままに寺子屋から出る。でも何故俺が害が無い妖怪だと判断されたのだろうか。まあいいか、結果良ければ全て良しだ。

とりあえず背後から恨みがまじく妹紅さんを見ながら人里に出る、この人が居なければもっと早く帰れたのに、余計なことしやがって。

そうするといきなりこっちに振り返ってきた。ヒッ、ごめんなさい。

ビクビクしつつ妹紅さんの反応を待つ。

「悪かつたな、最近妖怪の被害が多くてピリピリしてた。今日も知り合いの鍛冶師がやられてな」

「い、いえ…大丈夫です」

それ俺です。

「また人里に来たら昼飯でも奢ってやるよ」

「あ、ありがとうございます」

「まあ……気をつけて帰れよ」

「はい……」

なんかいきなり優しくなったな。捨て猫を拾うヤンキーに対する感情を妹紅さんに抱きつつ人里を出る。まあ別に暴行を加えられた訳でもないし暴言を吐かれた訳でもないから許してやろう。俺は優しいからな。

そうして俺の人里デビューは終わった、帰ったら藍さんが人里にお前のことを紹介するの忘れていたと言ってきてちよつとイラッとしたが、藍さんは相変わらず美人だったのですぐ許した。

そして、次は絶対に妹紅さんに昼飯を奢ってもらうことを決心しながら今日も寝床についた。

「私見たんだよ！雄叫びを上げながら私に弾幕を撃ってきた悪魔を！私はちよつと怖がらせようとしただけなのに……うう……ひどい」

「妹紅、どう思う」

「まあ何にせよ巡回は厳しくすることは決まりだな、あとは何かあれば守衛にすぐに報

告させる。これでひとまはらずは安心だろ？」

何故かアルクは人里で顔も名前も知らない悪魔として指名手配される、しかしまさか穏やかなアルクがその本人だとは人里の人間も思わず永久に捕まえることは無かつたという。

11話

どうも、古明地さとりです。今日はめんどくさいことに鬼達と宴をすることになりました。これも地霊殿の主としての仕事に含まれているらしいので行かなくてはいけません。正直行きたくなかったですし向こうにしても来て欲しくなかったでしょう。

まず会場に着いた時に酒の臭いで吐き気を催しました、それを堪えつつ自分の席に座ります。そこで苦しみながらも鬼達が何か変なことをしないか監視しておく事が私の仕事です。辛すぎて泣きそうになります、表情は全く変わりませんけど。

そうしていると勇儀さんが近づいて来ましたが、来なくていいと毎回言っているのに構ってくる私にとってめちやくちや苦手な人です。何故こんなに私に近づいてくるのでしょうか、吐き気を堪えながら勇儀さんを恨みがましく見ます。

「そんな睨むなよ」と笑いながら言ってきます、いや睨んでいる訳では無いですが、吐き気を堪えているんです。そう言いたいのが口を開くとリパースしそうなので耐えに耐えまです。ここで吐いたら旧地獄で笑いものにされるでしょう。

そうなればもう私は生きていけません。後のことはお隣に任し、私は灼熱地獄に飛び込んで死にます。ついでに勇儀さんを道連れにします。いややつぱり嫌です、一人で死

にます。

「そういえばさとり、こんな話知ってるか？」

「…なんですか？」

多少は吐き気が楽になってきたので一応返事はする、しなきや殴られそうだし。だから鬼は嫌いなんだ。野蠻なところとか酒臭いところとかなんか臭いところとか。数えだしたらキリがないが、とにかく旧地獄の仕事を増やす鬼が私は嫌いだ。

ところで話とはなんだろうか、この人が持つてきた話だからろくなことじゃない気がする、伊達に付き合いが長い訳じゃないから直感でわかる。やっぱりこの宴参加しない方が良かったですかね。

「あの八雲紫にまた新たな式が出来たって話だよ」

「式…ですか？ 藍さん以外に？」

「おう、あの九尾の従者以外に作るには驚きだろうか？」

確かに意外だった、変な話かと思えばたまには興味をそそる話もするじゃないか。そう思い少しだけ見直したが0が1になったところで印象は変わらないので意味はなかった。

だが新たな式とはどんな人物だろうか、優しくて私よりも少しだけ劣っているような人なら今すぐ友達になりたい。え？ 最低だつて？

いやよく考えてくださいよ、自分よりも優れた人間を友達にした時の苦痛を。なんでも比べられて不和の元になるだけです。それならば少しだけ劣っている人とお友達になる方がトラブルは少ないんですよ。

「いやどんな奴かは全然は知らないんだけどよ、気にならないかい？強いやつなら大歓迎だね」

「勇儀さんはその戦闘狂を少し直してみては？」

「無理だね！あつはつはつは!!」

何笑ってんですか、こつちは全然面白くないぞこの野郎。まあ強いといつても勇儀さんのような強さならまだ許容範囲です、勝てますし。力が強いだけでは私には勝てません。逆に紫さんのような能力の人だったら絶対に嫌ですけどね。相性悪すぎて速攻で殺されます、私より強い人は友達になれませんからそれだけはやめて頂きたい。

「さとりが私と戦ってくれたらこの気持ちを発散できるかもですけどねえ」

「嫌です」

「相変わらずケチだね」

当たり前だ、何故やりたくもない戦いを自らしなければいけないんだ。やれば十中八九私がつがこの人勝つまでやろうとするからもう戦わないと決めたんだ。しかも戦いの中で学んで修正していくからたまにヒヤツとする、心臓が悪い。

まあそんなこんなで私は絶対に戦わないという意思を視線に込めながら置いてあつたスルメをガジガジ噛む。可も不可も無くな味、これならばまだ一人で宅飲みしてる方が何百倍もマシだ。お燐が作ってくれるよく分からない名前のツمامミを食べながらビールを飲む。あまりの寂しさに目からビールが出てきます、永久機関の完成ですね。「あら、楽しそうなことしてるわね」

胃がはじけ飛びました。まさか、噂をすればをリアルで体験するとは。紫のドレスに身を包み扇子で口元を隠したその姿は胡散臭いの言葉しか出てきません。しかも能力も厄介なので本気を出せばここに居る全員を血祭りに上げれるでしょう、まあ無抵抗でやられるつもりはありませんが。

勇儀さんはガハハと笑って紫さんに近づいていつてますが、ホントこの人脳味噌まで酒に侵されてるんですかね。このタイムミングでここに来た目的も分からないのにそんなことしたら相手の思うつぼでしょうに。いやでも本当に何しに来たんですかこの人、お呼びじゃないですよ。

「地霊殿の主さん、そんな睨まないで。勇儀に呼ばれたから来ただけよ」

「おう！よく来たな！」

は？聞いてないんですけど。そう思いながら勇儀さんを見る。すると少しバツが悪そうな顔をしてこう言った。

「今言おうとしてたんだ、すまないね」

深くため息を吐いたあとにチラツと紫さんの方を見るともう酒をついで飲んでいた。まあ何も言わなければ実害無さそうだしいいか…

私は諦めたように座り、またスルメをガジガジ噛んだ。

「そういえば紫はなんでまた参加しようと思ったんだ？いつも断るのに」

「いやちよつと自慢話をしようかなって」

「自慢話い？」

「新たな式になる予定の子のことよ！」

私はガバツといつもの気だるさを感じさせない程のスピードで紫さんの肩を掴んだ。

「紫さん、詳しく」

「え、ええ。貴方そんな人だっけ？」

「いいから」

「じゃ、じゃあ説明するわね」

そこから始まったのは怒涛の親バカトークだった。やれ可愛いだ、やれ優しい子だとか話が止まらない。でも聞く限りではそこまで特別な何かを持っているように感じない、八雲という幻想郷を司る妖怪の系譜を末端とはいえ受け取るのだから何かあるのかとは思っていたが。

だがこれは好都合だ、容姿は可愛いらしいし性格も優しいとのこと、さらに八雲との繋がりを持てる。一石二鳥とはこのことだな、これはぜひともお友達にならなければ。そうと決まれば即行動だ。

「あの…紫さん」

「どうしたの？もつとアルクのこと聞く？」

「いえ、そのアルクさんの事なんですけど」

「ん？」

「私に紹介してもらえないかなあ…とか」

「え」

「え」

なんで勇儀さんまで驚いているんですか、私そんなにおかしいこと言いましたか？ただ単に知り合いの子を紹介して欲しいって言っただけでこの反応とは今まで私のこととどんな奴だと思つて接してたんですか。

私は心の中で憤慨しながら紫さんの反応を待つ。ここでNOと言われても諦めず、これからも言つてみよう。私のポツチライフ卒業の為に。

「さとりが…男を紹介して欲しいって言うなんて…」

ん？勇儀さん、何か誤解を

「認めない…」

いや紫さんまで

「オラア！お前ら酒もってこい！さとりに春が来たぞ！」

「そんなこと認めないからー!!あの子はずっと私の家に居るんですー!!」

紫さんは能力で空間を裂き、帰っていった。やばいことになってしまった気がする。しかも意図しないバクトルに話が行ってしまっている。考えても打開策は浮かばなかった。失意のままフラフラと家に帰るのであった。後ろで騒ぐ鬼の声がいつも以上に鬱陶しく感じた。

「ハクシュツ」

「アルク、大丈夫？風邪引いた？」

「大丈夫だよ、フラン姉様」

「ならいいけど…」

今日は久しぶりに紅魔館の方に来ている、どうやらだいたいぶ狂気もマシになったらしく俺に会いたいと言ってきたのだ。俺としてはあの時意識が無かったので何が何やらと

いった感じだが、無視をする訳にもいかないのでこうして嫌々来ている。

そして、今はフラン姉様が友達を紹介したいと言ってきたので部屋に向かっている途中だ。この人の友達と言うからにはかなりやばい人であることは言うまでもないだろう。殺されないことを祈るばかりである。

「じゃあご対面だね！こいし！」

「はいはい」

女の子の声がある、聞いた限りでは全然害のなさそうな感じだが姉様達という実例もあるので油断は出来ない。とりあえず自己防衛はしっかりしておかないと。

そして扉を開けたそこにいたのは、可憐な少女だった。中々派手な色のドレスを着て、何か瞼を閉じた馬鹿でかい眼のようなアクセサリーをつけている。あれはなんだ？流行りのファッションかなんかかな？

「君がフランの弟のアルク君だね！よろしく！」

「よ、よろしく願います…」

「私のことはこいしでいいよ！私はアルク君って呼ぶね！」

「は、はこ」

距離感の詰め方雑う！いきなりフレンドリー過ぎないかこの子！コミュ障の俺にとってはこの子のようなタイプは最も危険だ。どこでボロが出るか分からない。正直

逃げたい帰りたい。

「可愛い顔してるねー」

「ありがたい、ごさいます。姉様達の方が綺麗な顔ですけど…」

無難な答えに無難な態度、こうしておけばすぐに興味を無くす。良くも悪くも楽しさを重視しているのだ。こういう子は。俺の前世での体験談だから間違いない、別に泣いてない。

「お姉ちゃんが喜びそうな子だなあ…」

「お姉さん…ですか？」

「うん、あの人ややこしい人だけど多分アルク君のこと気に入ると思うよ。今度会う？」

「え、ええと…」

ほんとグイグイくるなこの子、いきなり自分のお姉さんに友達弟を会わせようとするという暴挙を平気な顔で行うこの子を驚愕の目で見ながらどうしようかと考える。断ったら角が立ちそうだしなあ。

「お姉さんって大丈夫な人？」

「人見知りだけど寂しがり屋っていうめんどくさい人だけど優しいよ」

「うーん…もし行くなら私もついて行くね」

「あ、あのその」

「じゃあもう今から行く？」

「私はそれでいいけど、アルクは？嫌だったら断つても大丈夫だよ」

「い、いえ嫌という訳では…」

「なら行こう！イエーイ！」

「イエーイ！」

「い、いえい…」

ふざけんな！俺は行かないからな！そう言いたかったが時すでに遅し。俺は全然面識も無い姉の友達姉に会わされることになった。何故こうなったんだ…俺は自分のイエスマンな部分を呪いながら姉に手を引かれるのだった。

1 2 話

とりあえず藍さんに連絡用の御札で帰りが遅れることを伝え姉と姉の友人について行く、どうやら幻想郷の下にある旧地獄に行くようだ。存在自体は本で見えて知っていたのでそこまで驚きは無い。旧地獄は幻想郷に適応出来なかった荒くれ者達の住む俺が苦手なタイプの場所だ。

特に鬼という種族は絶対に会いたくない。戦闘狂にアル中に傍若無人な態度、会ったら確実に絡まれる。絡まれたら俺は指先ひとつでダウンだろう、いや頭が吹き飛ぶな。もし吹き飛んだら新しい頭を橙あたりに持ってきてもらおうか、そうやって現実逃避しながら旧地獄に向かう。美味しい飯屋があればもっとテンションが上がっていたんだけどな、多分飲み屋しか無いだろう。

飲み屋といえば今日は紫様が宴に行っているらしい、何処に行くとか何も聞いてないけど楽しんでいるだろうか、あの胡散臭さを世間に見せつけていると考えるとなんだか心配になってくる。

「もうそろそろ旧地獄への入口につくよー」

もう着くのか近いな、お手軽に行ける地獄とはこれ如何に。まあ旧と名前についてい

るのだから本当の地獄では無いのだろう。俺はそんなどうでもいいことを考えながら入口の前に立った。大きな穴のようなそこは底が全く見えぬ絶望の感情を掻き立ててくる、本当にここ降りるの？

俺は内心ガクブルだった、いや内心だけでは無く表情にまでバリバリ出てた。演技とかもう関係なく怖い、俺高所恐怖症だったんだな。今思ったが高いところが怖い人は落ちた時のことをめちやくちや脳内で反芻してしまうのが怖い原因だと思う。現状俺がそうだもん。

「ひえー高いねー」

「フランは空飛べるでしょ？」

「うんでも、アルク飛べないから」

「じゃあフランが運ばばいいんじゃないかな？」

「いや、あのちよつと諸事情で我慢出来なくなりそうっていうか……」

おい！マシになったんじゃないのか狂気！そんな怒りを覚えながら目の前の姉の目が泳いでるのを見て確信した。こいつちよつと見栄はりやがったな、と。これはちよつと世間は許してくれませんかよ。

俺は憤慨しつつちよつとフラン姉様を責めるような視線を向けた。すると涙目になつてきた、泣くぐらいなら初めから嘘をつくな。

「うーん、じゃあ私が運ぶよ。アルク君もそれでいい？」

「はい、そうして頂けると助かります」

「あ、アルクごめん…」

「ふう…会いたい気持ちはわかるけど、嘘は駄目だよ」

「うん…ごめん」

「別にいいよ、僕も今日は姉様に会えて嬉しいから」

「うん！えへへ…」

「もう行くよー？」

「あつごめんねこいし！」

「いいよいいよ、でもまあ時間も無いしすぐに行こう！」

そう言うときいしさんは俺をお姫様抱っこした。もう一度言う、お姫様抱っこした。いやおかしいだろこれ、もつと持ち方考えてよ。姉の友人の男前な部分をまざまざと見せられて俺の心の乙女な部分が刺激されるという誰得なことが起こりつつ、地底への穴を降りていく。

そういえば前から気になってたんだけどなんで幻想郷の女の子って空飛んだり落ちたりしてもなんでスカートめくり上がらないんだろう。別に見たいというわけでも無いがいざ意識して見るとそういうところが気になってしまう。パンツ丸見えになっても

おかしくないと思うんだけどな。

「アルク君、スカート気になるの？」

「い、いえ別に……」

「ふうん？」

ニヤニヤとするこいしさん、ほんとやめて欲しい。俺が思春期男子真っ盛りみたいな空気出すのやめて。ほら横のフラン姉様が凄い目で俺のこと見てるから。フラン姉様も、俺何もしてないですからそんな目で見ないで。

一応表面上は照れているていをとりながら内心では呪詛を吐く姉に怯える。忙しいなまったく、やれやれ。

やれやれ系主人公のような余裕な発言をしているがガクブルである。話し方や態度を真似たところで所詮俺は俺だということが改めて理解出来た。悲しい。

「アルク」

「ひゃいっ」

「ほら、パンツならこつちを見なよ」

「ええっ!？」

飛びながらスカートをダイナミックに捲り上げる姉様。なんでだろう、まったく色気を感じない。ドロワーズだということもあるだろうが男らしすぎるパンツの見せ方に

少し笑ってしまいそうになる。演技しなくていいのなら爆笑していたところだ。こいしはプルプル震えて笑いを堪えている。この人も大概だな。

「あつ！こいしなんで笑ってるの!？」

「バツサア……って、ブツフォオ！ちよつ、アツハツハ！反則だつて……」

「もうー！」

顔を赤くしてプリプリ怒る姉様、納得がいけないという顔だが俺も仕方ないことだと思ふ。でも姉様のこんな姿は新鮮だと感じた、いい感じに友情してるじゃないか。良かった良かった、このまま俺に執着する癖を無くしていつてくれ。俺はそんなふうに祈りながらこいしさんに運ばれていた、そろそろ遠くの方に地面が見えてきたのでそろそろだと思ふ。

「そろそろ着くよー」

「はい、ありがとうございます」

「いいよー、連れてきたの私だしねー」

こいしさんが中々いい人だということにも気づけたし良かっただろう、俺の周りにはクセの強い人が多いからこういう人は新鮮だ。特に紫様はクセが強すぎるのでついていけない時がある、藍さんは良い人だけだな。

橙？いや……あいつは俺のこと弟扱いしてくるからなんか調子が狂う。お姉ちゃんに

なつたことが嬉しいんだろうな。

そういえば今日美鈴さんという門番が紅魔館に居たことに気がついた。俺は今まで中にしか居なかつたから気が付かなかつた、めちやくちや美人だったが白目剥いて犬のように門の前で寝ていたから幻滅だった。残念な美人とはああいうことを言うんだな。などと考えてる間に地面に着いた。

「よっ……と」

「こ、こいしさん。ありがとうございました」

「大丈夫だよ」

ニコニコしながら俺をまるで姫のように降ろすこいしさん、なんだこの人イケメンかよ。ギリギリ歯を鳴らしながら後ろに佇んでいるフラン姉様は優雅の欠片も無いけどな。

俺の乙女心を刺激してくる当の本人は余裕の表情をしながら俺達についてくるように促してくる。こういうところも女の子というよりイケメンな感じだな、理想の彼氏という感じだ。

「この先に水橋。パルスイっていう妖怪が居るんだけど、変なことしなければ何も言われないから普通にしておね」

変なことしなければということとは、変なことしたらヤバいのではないだろうか。即殺

されたりするのならば俺は今すぐ帰りたい。そして藍さんの尻尾をひとしきりモフモフした後寝る。

「パルパルパルパル…男女カップルとは妬ましい…」

「あれ本当に大丈夫なの？」

「大丈夫大丈夫」

そう言つてこいしさんは橋を何事もないかのように渡つていく、フラン姉様もスタスタ歩いていくので俺も慌ててついて行く。めちやくちやじつと見てくるんですけど、血眼なんですけど、怖いんですけど。

嫉妬というのはここまで強烈な感情なんだなあ、と一人で納得しつつ渡り切る。本当に何も無くて良かった。

「私のこと見えてないみたいだったから二人だけに見えたみたいだね」

「アルク、男女カップルだって」

「そ、そうですか…」

いや別に何も感じねえよ、実の姉とカップルに間違われたぐらいで俺が照れるとでも思ったか。ていうかめちやくちや笑顔じゃないか、そんな笑顔今まで見たことないぞ。レミリア姉様に見せたら喜びそうだな。そういえばこいしさんの今の発言で少し気になったことがある。

「こいしさん、見えてないって…」

「ああ、そういう能力なんだ私。『無意識を操る程度の能力』っていうんだけどこれが中々ピーキーなんだよねえ」

「へえ…凄いですね、俺には能力が無いので羨ましいです」

パルスイさんではないが、本当に妬ましい。俺も破壊の能力とか運命操る能力とか欲しかったなあ…能力さえあれば俺もクソゾゴナメクジから卒業出来るかもしれない、そんな淡い希望を抱き続けて何百年。いつこうに能力が現れる兆しが見えない。クソが。

だがその後のこいしさんの発言で俺も驚愕に目を見開いた。

「…え？じゃあなんで私のこと見えてるの？」

「あ、ほんとだ。なんでアルクはこいしのこと見えてるんだろ」

言われてみればそうだ。能力も無い俺がこいしさんの能力を打ち破ってこいしさんを見えるようにするにはこいしさんと同格の妖怪になるか能力で見えるようにするしかない。この人見た限りではフラン姉様と同じぐらい強い、俺なんかでは指ひとつ触れることは叶わないだろう。そんな俺が何故こいしさんを視認できてるんだ？

「私の無意識が狂ったのかな…」

「まあアルクについてはまだ私達も知らないことが多いしねー。これから沢山知っていくつもりだけど…」

フラン姉様は後半小声でボソツと言うのやめてもらっていいですかね、バツチリ聞こえてるからめちやくちや怖いんですけど。

まあ考えてても仕方ないことだろう、俺自体もアルクの記憶は持っていてもアルクのことについてはそこまで知らない。結局俺はアルクの認識でしかアルクを語れないのだ。

「考えてたらもうすぐ旧都だね、ここを抜けたら私の家だよ」

「へえーここが旧都かー」

うわつ、酒臭つ！色々な妖怪が至る所で酒を飲んでるせい酒の臭いが酷い。強い妖怪では無い俺は酒にもそんな強くないんだ、勘弁してくれ。ていうか鬼らしき奴らの数がすごいな、目を合わせないようにしないと。

「ここはうるさいからねー、さっさと行こうか」

「私は嫌いじゃないけどね、誰か適当にぶっ飛ばしても問題にならなさそうだし」

スイスイと人混みをかき分け進んでいく、フラン姉様が手を引いているので迷うことは無いが何だか子供のようで恥ずかしいな。吸血鬼的にいえば俺もまだ子供なんだろうが前世では成人していたので姉に手を引かれるのは少し照れが入る。

手を引かれるといえば妹紅さんに前に昼飯を奢ってもらったんだ。うまい飯屋というから何処なのかと思ったが自分で営んでいる焼き鳥屋に連れていかれたのは

びつくりしたな。しかも性格とは反対に丁寧な仕事をしていたので少し見直した。まあ相変わらず顔は怖いけど。

「旧都抜けたね、もう着くよ!」

「なんかめっちゃ燃えてるけどどこ行くの?」

「この上にあるから仕方ないねー」

そこは例えるなら火山の火口のようなところだった。その中心に館のような建物があり、そこがこいしさんの家だと容易に想像出来た。俺は飛べないので、すかさずこいしさんがお姫様抱っこをして飛んでくれたが俺は恐怖でそれどころではなかった。熱気だけで死んでしまいそうだ。

「あつついね」

「私はもう慣れっただけど、初めての子は熱いと思うよー」

そう言っているうちに上まで登りきった、そしてこいしさんが館の扉を開ける、中は紅魔館よりも暗めな感じの玄関ホールがあった。

するとどこからともなく尻尾が二又の黒猫が現れ瞬く間に赤髪の美人に変わる。この間わずか十数秒である、目まぐるしく変化が起きすぎて何がなんやらと言った感じだ。

「おかえりなさいませー!こいし様!」

「お燐、ただいま。友達来てるからお姉ちゃんにもそう伝えといて」

「はっ！噂はかねがね聞いておりました！あたいはここ地霊殿でペットをしているお燐です！長い名前は嫌いなのでお燐とお呼びください！」

「お燐さんかー、よろしくー」

「よろしくお願ひします」

結構ビジュアルはタイプかもしれない。しかし姉の友人のペットに劣情を抱く自分が嫌になつたのでやめる。俺はそこまで落ちちやいない、流石にペットにはダメだ。

自分を諫めながらこいしさんに屋敷内を案内される、どうやらここにはお燐さんともう一人、人型のペットが居るらしい。ほかは全部動物などの普通のペットなのに何故この二人だけ人型なんだろうか。この地霊殿の主であるこいしさんの姉の業の深さに戦慄しつつこいしさんの部屋に向かう。

「私の部屋なんにも無いからお姉ちゃんも呼んでくるね！ボードゲームとかいっぱい持ってた筈だから！部屋で待ってて！」

そう言うときいしさんは走ってどこかに行ってしまった。図らずにフラン姉様と二人になってしまふことに少しの恐怖を感じながらフラン姉様を見るとめっちゃこつちをガン見してた。怖い。

「二人つきり、だね」

いやここあんたの友達の家でしょうが、何無理やりムード良くしようとしてるんだよ。狂気が無くなつていつてるときに正気も無くしたか？

「そういえばアルク、こいしのスカートガン見してたよね。私ときは全然見てなかったのに」

「い、いやそんなことは…」

「興奮した？」

「え」

「こいしみたいなのが良いのかな？」

「いやほんと何言ってるの？」

思わず若干素が出る程度には困惑していた。酒でも飲んでんのかこの人。

「こいしは良い子だからアルクを任せ…任せ…ああ！やつぱりダメ！無意識に破壊の道を選んでしまう！まさかこれもこいしの能力…!？」

ただあんたがアホなだけだよ、座つてろ。

「来たよー！お姉ちゃんも一緒にー!」

「こいし…やつぱり私は駄目です…迷惑になります…」

「そんなこと無いって!」

こいしさんに引きづられてきたのは紫の髪をした少女だった。この人がこいしさん

の姉か、物静かな雰囲気の人だな。やっぱりこういう人が好きかな俺は。藍さんにしろメイド長にしろ淑女な人がやっぱり俺のタイプだ。

だがこの人が俺にとってかなり厄介な存在になっていくとは微塵もこの時は思いもしなかった。

13話

どうもつ古明地さとり14歳ですっ☆

嘘です、多分500歳は超えてると思います。そこから数えるのやめたので今何歳かは不明です。今日は失意のまま家に帰ったのでさっさと寝てしまおうと思っていたのですが、どうやら今日こいしの友達がうちに来てるようですね。羨ましいです。

心の中でも律儀にですと言いながら布団に潜っていたんですが、いきなりこいしが部屋に突撃してきました。羨ましいという私の思いが届いたのでしょうか、まあこいしは心の中を読むことは出来ないものでそれはありえませんが。

突然ですが世界一硬い食べ物ってなにか知ってますか？かつお節なんですよ。今貴方「へーそうなんだ」ぐらいしか心が動かなかったでしょう、心を読まなくてもわかりますよ。こいしの友達からしたらそんなどうでもいい豆知識ぐらいにどうでもいい存在なんですよ私は。

だというのにこいしは何故か私を友達に会わせようとしてきます。

これは由々しき事態ですね、友達の姉というんだか気まずい存在が遊ぶ場に居たら絶対空気が悪くなります、こいしにとっても私にとってもそれはダメなことだと思いま

す。こいしにそう言いめちやくちや拒否つたのですが全然聞いてもらえずボードゲームも奪われこいしの部屋まで連行されました。あ、それ友達ができたとき用に買った人生ゲーム…

「こいし…ほんと迷惑になるから…」

「大丈夫大丈夫！二人共いい子だから！」

相変わらず声がかくて可愛げもあつて私と正反対の子ですね。いやまあ、それに嫉妬することはあつても嫌いになることは無いんですけど。ここまで対人スペックが違うと、ある種諦めがつきますし。

それでもやっぱり私もこんなふうになれたらなあと思わないでもないです。

憧れ、焦がれ、喉から手が出るほどに欲しいコミュニケーション能力を手放したのは自分だというのに、勝手なことを内心で嘯きながら妹に手を引かれる姿に地霊殿の主としての威厳はゼロですね。

「お姉ちゃんは自然体でいいよー！」

自然体も何も話すという行為が私にとって自然な行為では無いんですけど。

「…もう何も言いません…」

妹の押ししの強さに戦慄しつつ部屋の扉から中に入ります。相変わらず何も無い部屋ですね、まあ無意識が発動していると家に居ないので仕方ないことでしょうけど。しか

し最近はコントロールも次第に出来てきているので近い未来、普通の人間にも見えるようになるだろうと思います。

「その人がこいしのお姉さん？」

「うん！お姉ちゃん自己紹介してくれる？」

自己紹介とか何十年ぶりでしょうか、とりあえず息を整えましょう。ひっひっふー、ひっひっふー。

「ふう…：私の名前は古明地さとりと言います…：妹がいつもお世話になっております」

「あつ、ご丁寧にどうも。私はフランドール・スカーレットです！こいしには私の方こそお世話になって…：」

いかにもコミュ力高そうな金髪美少女ですね、個人的には私よりスペック高そうなのでお友達にはなれませぬ。怖いです。

とりあえず無難な友達の姉という感じでいこうと思います、距離感大事です。

あともう一人の子は…

「ぼ、僕の名前はアルク・スカーレットです！今日はよろしくお願いします！」

アルク？どこかで聞いた気がしますね…：どこでしたっけ？確か…

目を瞑り思い出そうと考えを巡らせませす。

あ、紫さんの新しい式の人がそんな名前だった気がします。まあこんな自信なさげな

美少年が紫さんの式な筈がないので同姓同名の別人ですね。可愛いとか言ってた気もしますが、まあ気の所為でしょう。

というかこの子はかなりいい感じですが、オロオロした雰囲気は新鮮です。地底にこんな子は居ないですからね。

「アルクさんですか…よろしくお願ひします。いきなりですがご趣味は？」

「しゅ、趣味ですか？読書ですっ」

読書、いいご趣味をしてますね。かく言う私も読書は好きです、一人でも時間を潰せますから。

「私も読書好きですよ、特にミステリーが好きです」

「僕もミステリー好きです！」

ミステリーが好きなら地霊殿に来るといいですよ、お空やお隣による完璧な殺人事件が毎日起きてますから。

「でしたらこの後書庫に案内しましょうか？気に入る本があれば貸してあげます」

「それは流石に悪いですよ…」

首を横にブンブン振って断るアルクさん、しかしここで逃したらもう後が無さそうなので攻めていきます。

「いえ、読書仲間が増えるのは私としても嬉しいので問題ないです」

「そ、そうですか？」

平気な顔で話をしているが心臓バクバクです。鼓動の音が聞こえてないかビクビクしながら果敢にも距離感を詰める。

しかし私はそこで致命的なミスをしてしまった。

私は普段サードアイを閉じることが出来ているんですよ、心を読むことが嫌いなので努力しました。しかし、それによつてオンオフ切り替え可能になったのはいいのですが、ど気を抜いたときにふと、サードアイがオンになつてしまうのです。それが今起きてしまいました、ヤバいです。ですが

「あれ、この子の心読めませんね」

この子が私と同格だとは考えにくいので誰かに守られているのだろうと予想をつける。ならば誰が？私のサードアイを通さないぐらいにガチガチに結界を張れる者という結構限られてくると思うんですがね。

「あ、あの…なにか？」

「あ、すいません。顔が良かったのでつい」

誤魔化す為の一言の筈が空気が凍った、主に後ろのフランさんからの殺意のせい。肩を凄い力で掴まれる、めっちゃくちゃ痛い。あ、そうかフランさんが結界張ってるんですねこれ、納得。

「アルクに親しい人が増えるのは嬉しい事だけど…ちよつと距離感近づきすぎじゃないかなあ?」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

痛い痛い痛い、本気じゃないですかこの子。いかに私が大妖怪クラスでもこれは流石に…し、死ぬ…!?

「ちよつ、姉様離してあげて!」

アルクさんの一言で事なきを得ました。肩が可動域の逆を向いている気がしますが気の所為でしょう、うん。とりあえずこいしに肩をはめてもらい元の体勢に戻りました。全く、ひどい目に会いました。

「ふう…アルク、ちよつとこいしと外に出といて貰えるかな?」

「えっ」

あつ、これヤバイかもしれないです。タコ殴りで済めばいいですが…最悪の場合…:
「あー、とりあえずアルク君。行こっか」

こいし、お姉ちゃんを早々に見捨てる気ですね、くそう。

「あつ、は、はい」

「本いっぱいある部屋あるからそこで待つとこ」

そう言つてこいしはパタンと扉を閉めて行つてしまいました。この部屋にはフラン

さんと私の二人きり、めっちゃくちや気まずい雰囲気、冷や汗がドバドバ出てきます。

「さとり…さんでいいのかな」

「呼び捨てでもいいですよ」

何故こんなときでも私の表情筋は全くと言っていいほどに動かないんですかね。自分で自分のことが嫌になってきます。

「ならさとり。さとりはアルクとどんな関係になりたいの？」

「友人になればそれが一番だと考えています」

今まで会った妖怪から人間まで全ての中で一番良識ありそうな人でしたからね、逃がしてたまるかって話ですよ。そう思いながらフランさんの方をジッと見つめる。するとフランさんは肩を竦めて首を横に振る。

「さとりとアルクが友達になることは反対しないんだけどさ、こっちはこっちでいろいろ敏感にならなきゃいけない部分があるんだよ」

「それは…どうしてですか？」

そこからフランさんに説明された内容は想像を絶するものだった。親からの虐待、何百年にも及ぶ監禁、私の妖怪としての人生も中々のものだったが私には一応家族と言えるこいしやお燐やお空などが居た。そう考えると孤独に蝕まれながら何百年も一人で生きるなど正気の沙汰では無い。

「…一っただけ気になるところがあるのですけど」

「どうしたの？」

私はさつき自分のサードアイでアルクさんの心の中を見てしまったことを話した。フランさんは少し眉をひそめていたが、すぐに目を閉じて考え始めた。

「おかしいね」

読めなかったことか？それとも他の要因だろうか？

「私は結界なんてもの張れないし、紅魔館のメンバーでも張ろうとするならまず私とお姉様に相談する。だから私達が張ったものじゃない。ならアイツかもしれないけど…それも無いだろうね、張るなら絶対前もって私達に言うだろうし」

アイツというのが気になったがどうやらアレは結界によるものではなかったようだ。ならば何故？そんな疑問が頭に湧いてくる。しかし私はいくつかの仮説を既に立てていた。

「考えたくありませんが…アルクさんはこいしと同じような症状かもしれません」

「はい、そうですか？」

一応こいしのことについても話す、こいしの友人というのなら話しておいた方が良さそうだと感じたからだ。フランさんはその話に憤慨していたが姉として妹の為に怒ってくれているその姿は好意的に写った。

「けどそれならアルクは今も心を閉ざしているってこと?」

「ええまあ、それも仮説のひとつというだけです。ですがこれを立証するには少し不自然なところもあります。その大きな要因としてはアルクさんはどもりながらもきちんとか話出来ているということですかね」

一番酷い時のこいしは会話すらできていなかった、だがアルクさんはきちんと思慮通ができています。類まれなる精神力の賜物だろうと思うがそんなアルクさんが完全に心を閉ざしていると言えるだろうか。ならばもう一つの仮説だ。

「もう一つはアルクさんが無意識のうちに能力を発現している可能性です」

「アルクに能力は無いはずだけど…」

「ええ、ですから無意識による発現です」

無意識に発現する能力というものは前例がある、その最たるものがこいしだ。あの子は言葉通りの能力、『無意識を操る程度の能力』を持っている。それと同じようにアルクもまたなにか能力を持っていたのなら? 本人は自覚していなくても発動していたのならば?

「今のところこれが私の思う最有力な説ですね」

「うーん…」

「どうしましたか?」

フランさんはなんだか納得いかないような顔をしているので疑問に思った。家族にしかわからないこともあるのでフランさんの判断が一番正確だろうと思うのでなにかあつたらすぐに言つて欲しい。

「いや、なんか違和感があるつていうか。見落としてる感じがして…」

「見落としてる…ですか」

「まああんまり深く考えるタイプじゃないし別に良いんだけどねー、結構私の勘つてアテにならないし」

まあいいやーと言つて苦笑するフランさん、まあ何も無い時でも不安になることがあるのはわかりますよ。私いつもそうですし。

「まあ、こんだけアルクのこと考えてくれる人なら友達になつても大丈夫かな」

「本当ですか」

「友達になるかどうか決めるのはアルクだけだね」

なりますよ、なつてみせますよ。あと今回のことでフランさんも中々良い人だとわかつたので姉弟共々仲良くして貰えると嬉しいですね。あの威圧感は少々怖いですが。

「とりあえずアルク呼びに行つて一緒に遊ぼつか」

「はい、そうしましょう」

近年稀に見る程にテンションが高くなつていることを自覚しつつ私は本のいっぱい

ある部屋こと書庫に向かいます。恐らくそこに二人が居るでしょうから。そんなアタリをつけながら歩いているとふと疑問が浮かび上がりました。

——何故アルクさんは何百年も監禁される必要があつたんでしょうか。

あんな人畜無害な少年ならば外に追放してしまえば良かったというのに。当たり前疑問だった、今まで誰も突っ込まなかっただけで。

しかし、その事がわかるのはアルクさんの両親だけです。ね、と思考を放棄する。これから楽しいボードゲーム大会が始まるのに余計な思考は挟まないでおこうと私は思った。

14話

今俺は凄まじい修羅場が目の前で繰り広げられているのを目の当たりにしている。まるで金縛りに会ったように身体が動かない。蛇に睨まれた蛙とも言えるだろう。

え、誰と誰の修羅場だつて？まあ、それは見ればわかる。

居間にある机に座るのは紫のドレスに身を包んだ我が主、そして対面に座るのは紫色の髪をした知り合い。

「それでは地霊殿の主である古明地さとりさん、面接を開始します」

「はい」

いやなにやつてんだあんたら。

「アルクの友達になるからには貴方にはそれ相応の何かが求められます」

別に求めてねえよ。というか紫様の方こそいい加減失くしてしまった何かを自分に求めろ、威厳とか。

「何か資格とか持つてる？」

そもそもこの幻想郷にも資格の概念であるのか？流石のさとりさんでもこれは顔色が変わるだろ。

「調理師免許と栄養士免許と乙種第4類危険物取扱者の資格を持っています」

いやなんで普通に持つてんだよ。ていうかなんで乙種第4類危険物取扱者の試験受けたんだよこの人は。謎だらけだよこっちは。

「ほう……やるわね」

なんだよその胡散臭い笑み。というかまだちゃんと言格持つてるさとりに比べてあんたはなんか持つてんのか。

「私は看護士と保育士とアロマセラピーを持つているわ」

いやあんたもなんでそんなもん持つてんだよ。ていうか俺の枕から凄くいい匂いするのあんたのおかげだったんかい！ありがとな！

「資格面では問題無いならあとは人間関係ね」

あんたは娘の恋人に対して警戒する父親か。友達の間関係とかどうでもいいだろ普通。

「貴方の友達はどうな人？一人か二人でいいから言ってみて」

まあ……これぐらいなら地霊殿の主であるさとりさんならスラスラ言えるだろう、つて

……

「……………」

めつっちゃ動揺してるー!!冷や汗ダラダラじゃねーか!おい、こいつ友達居ねーぞ!

「あら、どうかしたのかしら?」

煽っていくー!紫様煽っていくー!いやマジで最低だなこの人。

「……ません」

「ん?」

その瞬間さとりさんが椅子を引き倒し立ち上がり紫様に掴みかかった。

「いないって言ってるでしょうが!ああ!」

「え」

ちよつこれはまずいですよ!?

鬼の形相で紫様に詰め寄るさとりさん。どうやら地雷を踏んでしまったらしい。

「どいつもこいつも友達が居たら正義みたいなツラして!私はそんな安い関係じゃないんですよ!」

「ひええ……」

紫様、なんて声出してやがる……完全にさとりさんに圧倒されてるじゃないか。

「友達っていうのは……もつとこう……あれなんですよ!」

ダメだ、友達が居ないからさとりさんの友達に対するイメージが枯渇してる。

「とりあえず私は私の方でアルクさんに会って友達になりますから!」

「はい……」

紫様負けてんじゃねえか、いつもの胡散臭い笑みはどうした。
「ふう…もう帰りますかね…」

そう言つて歩き始めるさとりさん。そして顔を上げた瞬間

——目が合った

どちらも石の彫像のように固まる。俺も不用意に動けず買物袋を持ったまま佇んでいたので仕方ないだろう。

「あ、アルク帰つてたの。おかえりなさい」

さつきまでの半泣き顔が一転して満面の笑みに変わる紫様。逆に泣きそうな顔になるさとりさん。

「あ、あのアルクさん…」

「は…」

意を決したのかおずおずとこちらに話しかけてくるさとりさん。涙目で少し可愛い。

「どこから聞いてましたか…?」

「あの、紫様が面接を始めると言つたときから」

「初めからじゃないですか!」

そう言つて自分の足元にあつた座布団に頭から突つ込んで顔を隠すさとりさん。おいおいこつちに尻を向けるな、揉むぞ。

「これは夢だ、これは夢だ、これは夢だ」

残念、夢じゃありません！これが現実です！と言いたいところだが…

「さ、さとりさん」

「これは夢だ…」

まだ言ってるよこの人。

「さとりさん！」

「ひゃいつ」

やつとこつちに目を合わせてくれた。うわ、鼻水出てる、汚ねえ。

「あの、俺と友達になりましたかったんですか？」

「ぐ、まあ、そうですね…けど今回のことで失望したでしょう？私はこういうややこしい奴なんですよ」

確かにややこしいしめんどくさい、けどそれでも地霊殿の主だ。この人と何かしらの関係を持つておけば損はしないだろう。

「そんなことないですよ」

「え…？」

トウungk…という音でも聞こえてきそうだな。我ながら相当クサイ行為をしている気がする。

「むしろ俺はさとりさんのそういう面を見て良かったと思います」

「ひええ…」

顔を覆うさとりさんだったが耳が赤いのがバレバレだ。

「ですから俺は余計にさとりさんと友達になりたいと思いました。あの、ですから」

「ちよつと待つてくださいい！」

「え」

どうした、なんかやばかったか!?

「あの…そこから先は私が言いまひゆ」

あ、囁んだ。余計に真つ赤になっていくさとりさんだったが覚悟を決めたような顔でこちらに向き直る。そして

「あの、その、私と…友達になってくれませんか？」

「もちろん！」

えんだああああああ!!いやああああああ!!

「私の愛しい式が天然タラシだった…」

うるさいよ。俺だつて好きでこんなことやつてるわけじゃない。だが紫様は納得がいかないようでゴロゴロと居間を転がり続ける。普通に邪魔だ。

「ずるいずるいずるい!さとりだけずるい!!私もアルクにそんなこと言われたい」

!!

「この人が妖怪の賢者ですか、幻想郷も終わりですね」

ようやく調子を取り戻してきたさとりさんが紫を見て嘲笑する。あ、なんでこの人に友達が居なかったのかわかった気がする。

「なんですって!!? あんたこそその性根叩き直してやるわ、そこに直りなさい!」

「アルクさん助けてください、紫さんが私をいじめます」

「ちよつ、それはずるいわよ!」

どつちもどつちだな。後ろに隠れてほくそ笑んでいるさとりさんを見ると本当にこれで良かったのかと思う。

「お二人共何をやってるんですか?」

あつ、藍さん丁度いい所に。

「藍さん」

「ああ、アルクは何も言わなくていい。大体わかった」

そう言ってフワフワの尻尾でこちらの頭を撫でてから手をコキコキ鳴らす藍さん。その時既に俺の後ろに居たさとりさんは意識を刈り取られてまっすぐになつて寝ていた。全く見えなかった…何したんだあの入。

「紫様」

「ら、藍。いやこれは違うの」

「問答無用」

そう言つて泣き叫ぶ紫様を引きずつて何処かに消えていく。いやーやつぱり藍さんは頼りになるな。そう思い俺は少し寝転がり休むことにする。

「藍様ー？どこですかー？」

前言撤回、逃げるとしよう。

「あ、アルク！藍様見なかった？」

まわりこまれてしまった！

「いや、さつき紫様と何処かに行つてしまったから知らないよ」

「そっかあ…じゃあアルク遊ぼう！」

脈絡の無い会話だな、会話のドツジボールでもする気か？

「じゃあおままごとしよ！私はお母さんで…アルクはペットね！」

どんな複雑な家庭環境だよ、未亡人か？その年で未亡人演じるとか業が深すぎるだろ。

「あの人死んで今日で3年が経つたわね…そろそろあの人の死を乗り越えないと…」

やつぱ未亡人だったわ。

「ほら、アルク。アルクは犬だよ」

この光景を姉様達に見せたら橙消し炭にされそうだな。

「わ、ワンワン」

「……………」

な、なんだよ。めつちや視線切らずにこっち見てるんだけどこの子。なんか恥ずかしいやめて欲しい。

「ど、どうしたの橙」

「いや、今アルクの四つん這いになって犬の真似してる姿見たら私の身体がゾクゾクつてしたからなんでだろうって思ってる」

ちよつと頬を上気させて橙はこちらを見てくるが俺は恐怖しかない、まさか橙こいつ

…

「そ、そっか…じゃあ今日はもうこれで終わりにしよ。風邪引いてるかもしれないし」

「うん、そうだね…」

それから少し橙と距離をとろうと決めた俺であった。

15話

相変わらず何も無くても何かに怯えてるアルクだ。休みを貰ったので今日は久しぶりに人里に遊びに行こうと思う。紫様も一緒に遊びたいと言ってきたが藍さんに引きずられていったので一人で来ている。あの人仕事たんまり残ってるのについてくる気だったのか、笑えるな。

全く表情を変えずにそんなことを考えながらいつもの森を歩く、この森はどうやら普通の人間には有害な瘴気がめっちゃ充満してるらしい。主にそこら辺に生えているキノコのせいで。まあ妖怪である俺にとっては全くもって問題では無いのでテクテクと歩く。アルクが歩く…やめておこう、これ以上言ったら誰かに「は？」とか言われそう

「は？」

「いめんやい」

俺は反射的に頭を下げて謝った。するとそこには俺の方を見て目を見開いている魔法使い風の帽子を被った金髪の子供と白髪の子が居た。

「お前は…誰だ？」

まずい、不審者だと思われる気がする。誤解を解かなければ人里の守衛に突き出される可能性がある。それだけは回避したい、ダサいし。

「あの、怪しいものじゃないですよ？」

「いや見るからに怪しいだろ、いきなり謝ってくるとか」

無慈悲、バツサリと切り捨てられた。さらに銀髪眼鏡も。

「そうだね、魔理沙と同じ意見なのはちよつと嫌だけど同感だ」

「それどういう意味だ香霖」

どうやらこの二人は魔理沙と香霖というらしい。何やら二人の間は険悪のようだが二人とも本気では嫌っていないという雰囲気を感じる。幼馴染か何かか？

そんなことを考察しているが一向に事態は収束しない。俺は相変わらず疑いの目を向けられている。俺は悪くねえ！

「あの、ひとまずこの先の人里に来て頂ければ…疑いが晴れるので」

「やだよ」

「え、ええ…」

なんだ、家出中か何かなのか？普通人間は人里で暮らすもんじゃないの？

「そうだ魔理沙、ちゃんと親父さんと仲直りしなよ。今なら間に合うから」

「ちつ、話題そらせたと思ったのに…」

物凄い眉間に皺を寄せながら悪態をつく魔理沙。こんな顔の幼女見たことない。あ、姉様達が居るか。

「とりあえず君」

「え、あ、はい」

香霖さんに声をかけられた。なんだ、怖いんですけど。

「君が怪しい子だということは変わらないけど、君を相手してる余裕は無いんだ。また会ったら話を聞くことにするよ」

「そ、そうですか……」

なんか地味にシヨックだわ、俺そんな怪しいオーラ出た？

「まあ最近妖怪による被害が増えるから、君には悪いけど仕方ないと思ってくれ。僕も一応守らなければならぬものがあるからね」

「わかりました……」

そう言つて金髪の女の子と一緒に森の中に消えていく香霖さん。少し目の奥に申し訳ないという感情が見え隠れしていたのでそこまで不快とは感じなかった。きつと人柄がいいのだろうな、羨ましい。

俺はそんな場違いな妬みを香霖さんに向けながら人里に向かった。何故だろうか、あの二人組にはまた会うような気がする。

目の前で串に刺さった鶏肉が炭火によつてジュウジュウと焼けていく様子が見える。丹念に焼かれ皮の間から流れ出る脂は極上の蜜。香ばしいタレの焼ける匂いがそこら中に充満して俺にとっては天国だった。

「もものタレ出来たぞ」

「ありがとうございます！」

そう、ここは妹紅さんの焼き鳥屋だ。

「しかしお前も災難だったなく、香霖さんに見つかるとは」

「あの人有名人なんですか？」

イケメンでどこか包容力のある男性という感じだったからさぞかしモテるんだろうな。お、俺も顔は良いから…

「いや、あの人のめっちゃ長いことこの人里で古道具屋してるんだよ。その影響で結構慕われててね、下手すりやお前人里出禁だったかもな」

「長いこと、ということはある人は…」

「ああ、半人半妖さ」

コップに入れた芋焼酎を煽りながらそう言う妹紅さん、まるでオヤジだな。ぷはあ、と一息ついてニヤニヤしながらこつちを見るその様には色気の欠けらも無い。

「実はめっちゃくちや強いみたいだし退治されてた可能性もある」

「え」

「あと本名は霧之助さんな」

ええ…あの人そんな風には見えなかったけどなあ。顔は良いが雰囲気は普通の人って感じだったし。

「いいかアルク、本当に危ない奴ってのは周りや果ては自分を騙してまで実力を隠そうとする奴。そういう奴はただ強い奴よりよっぽど厄介で危険なんだ」

「そ、そういうもんなんですか」

「ああ、肝に銘じておくといいよ」

ふにやふにやと赤い顔で焼き鳥を焼いていく妹紅さん。酔っ払っていても手つきだけは一流なようだ。この店が隠れた名店として有名になるのも頷ける。

「あと危険なのは…無駄に綺麗な黒い髪をして家でゴロゴロしてるニートの女とかも危険だから気をつけろ」

「は、はあ…」

ニートが危険とはこれ如何に。

「そうこうしてる間にほれ、皮の塩だ」

「うわあ…美味しそうですね」

皮はやつぱり塩に限る、タレももちろん美味いけどな。外側がパリパリとしながらも内側の脂の多い部分はモチモチとしておりいくらでも食べれそうだ。

「お前美味そうに食うよなー、こつちとしては嬉しいよほんと」

「こちらこそこんな美味しい焼き鳥をいつもありがとうございますー」

「ふふ、食わせがいがあるよまったく」

うま、うま。俺は無我夢中になって次から次に渡される焼き鳥に食らいついていた。「そういえばお前酒は飲めないのか？」

手元の焼酎と氷の入ったコップをカラカラさせながら妹紅さんは聞いてきた。まあ飲めないことは無い、と思う。思うというのも俺はこの世界に来てから一度も酒を飲んだことないのだ。姉様達には止められていたし。

「なら一緒に飲もう、もう店は閉めてるからお前以外の客は来ないしな。あ、安心しろよ

？私が勝手に連れてきたわけだからお代はタダだ」

「え、いいんですか？」

「良いんだよ遠慮すんな。いつも人里の奴らの手伝いしてくれてるし」

そう言つて店の奥に消えていく妹紅さん。どうやら酒を補充しに行つてゐるらしい。今日はえらく機嫌がいいな、何か良いことでもあつたのだろうか。

「ほれ、コップ」

「あ、ありがとうございます」

「ビールか日本酒かハイボールどれがいい？」

「お、おまかせで」

あまり酒にはこだわりは無い、前世でも酔えたらそれで良いといういい加減な尺度だった。酔つたら全て忘れられると信じていたから。

「うーん：ならこの日本酒はどうだ？」

「じゃあそれを…」

「ん」

ついでもらう。まあ酒と言つても飲み物には違い無いし、とりあえず喉を潤す為に飲むか。そう思いぐいっと飲む。

「っ！」

「どうだ？」

結論だけ言うとこれめっちゃ美味しい。俺の飲んできた今までの日本酒が全てエタノールか何かだったのかと思うレベルにその日本酒は澄み切っていた。しかし、澄み切っているというのに味と香りは濃厚で、お米のフルーティーさが鼻に抜けるのがたまらない。

ダメだ、俺の下手な食レポではこの酒の良さを伝えることは不可能に近い。とりあえずめっちゃくちゃ美味しい日本酒を想像してみてください。これはその10倍美味い。

「美味しい…」

「だろ？多分これ一番良い奴だからな」

「え」

いや、でも納得だ。ここまでのレベルのお酒はもうお酒の範疇で収まらないと思う。何か特別な液体だ。身体にも良さそうだし。

「そんな貴重なものの良かったんですか？」

「まあずつとここに置いとくわけにもいかないし。私もこれを飲む為の口実作りとでも思ってくれ」

「あ、ありがとうございます」

クルクルと焼き鳥を回しながら妹紅さんも飲む。喜色満面という言葉がピッタリな

表情をしながら飲むその姿はいつもの姿とのギャップで少しドキドキさせられる。いい女ってこういう人のことを言うんだらうなあ。

「これうつまー！」

「そうですねめっちゃ美味しいです」

「はは、焼き鳥もジャンジャン焼くから待ってるよ」

ジュージューと焼ける焼き鳥の音をBGMにおだやかに時は流れていった。願わくば、こんな平和な日常がずっと続けば良いな。そう願うばかりである。

そこからの記憶が無い。

そのせいで俺は朝起きた時にいつもと違う景色に吃驚した。まさか自分は誘拐されたのではないかと。ビクビクと怯えながら部屋を見回す、しかしよくよく見たら見覚えのある壁や床に首を捻る。ちゃんとベッドにも入っているということは誰かに運ばれたか自分で入ったのだと推理する。

しかし自分には全くその記憶は脳内に存在しないのでとりあえず最後の自分の見た

景色を思い出す。お酒を飲んで焼き鳥を食べて…ダメだ、思い出せない。

そういえば妹紅さんは何処に居るのだろうか。あの人も一緒にいた筈なのでどこかに居ると思うんだけど。そう思ったその時、俺はベットの横のスペースが一人分膨らんでいることに気づく。

まさか

いや、それはないだろ。ないない、だっておかしいもん。俺と妹紅さんはそんな爛れた関係じゃ無かった筈だ。それにあの男前だからそんなふしだらなことするわけ

「う…うん…ふわあ…」

あ、これアウトだわ。18禁だわ。

「お、おう。アルク顔上げろよ」

ジャパニーズ土下座。これが俺ができる最上級の謝罪。クズ男に相応しい最期だ。

あの後結局妹紅さんは起きてしまい俺は慌てて謝った。そして今に至る。

「あのな？私達何も無かったぞ？」

「え、本当ですか…？」

「お、おう」

マジでか。良かったのか悪かったのか微妙な感情だがどうやら本当にそういうことは何も無かったようだ。しかし何処か妹紅さんの表情は晴れない、他のことで何かあったんだろうか。もしかして俺の寝相が悪かったとか？

「いや何も無いんだけどな、まあちよつと胸糞悪いというか。あ、お前のせいじゃないから安心しろよ？」

「は、はい」

え、なんか気になるから言つて欲しいんですけど。そう思つて俺は怪訝な顔をしておく。

「お前の帰りを待つてる奴らが居るだろうしもう帰つた方がいいぞ」

「あ」

そういえば藍さんに連絡入れるの忘れてた。ヤバい。

「あ、あのもう帰ります！焼き鳥とお酒ありがとうございしました！またお礼しに来ます！」

「おう、また来いよ」

俺は慌てて家に帰つた。しかし案の定八雲家は阿鼻叫喚の騒ぎになっており紫さんは号泣していた。まさか日に二度も土下座をすることになるとは思わなかつた。

「ふう…帰ったか…」

妹紅は少し憂鬱そうな顔をしながらため息を吐いた。理由は先程慌てて帰っていった吸血鬼の子供だ。そして、自分の袖をじつと見つめて苦笑する。

「ベッドに寝かせてから離れようとした私の袖掴んで泣きながら『お母さん…』なんて、冗談きついよまったく。私がそんな年に見えるか？」

不老不死でありながらも少女の容姿であることに少し自虐を混じえながら独りごちる。そして妹紅はもう一度大きなため息をつく。何かを思い出すような、そんな表情をしながら。

「親か…」

その時妹紅は何を思ったのか、それは本人にしかわからない。しかし、これから妹紅がアルクのことをさらに目にかけるようになることは言うまでもないだろう。

16話

前のことがあってから紫様の過保護具合がますます加速していつてる気がする。というのも家にいるときは横にピッタリくっついてきて終いにはトイレまで入ってくる始末だ。その時は流石に藍さんに助けて貰ったが、次にあんなことがあれば俺の尊厳が確実に破壊されてしまうだろう。きゅっとしてドカーンだ。

「アルクアルク！久しぶりにまたおままごとしよ！」

「えっ」

そしてまた俺の尊厳を破壊しに来ようとするものが一人、その名前は橙。普通の人間にとつては満面の笑みで俺に向かって歩いてきてるその姿はさぞかし可愛く映るのだろう。

しかし俺にはまるで悪魔のように感じる。悪魔である吸血鬼自身が何かを悪魔のようだと比喩するのは違和感を感じるが、そうとしか感じないのだからしょうがない。

「次のアルクの役はねえ……」

「いやちよつと待って」

「なんで？」

ハイライトの無い目でそう言うてくる橙に恐怖しか抱かないが、ここを乗り越えなければ俺は一生こいつに尻に敷かれ続ける気がする。他人に姉ヅラされてそいつの言うことを聞き続ける人生など俺は絶対に嫌だ。

「あ、ペットが嫌なの？じゃあお父さん役ね！私お母さん役するから！」
「そういう訳じゃ…」

こいつと夫婦とかおままごとでも嫌だ。しかし拒否したらどうなるか分からない。二律背反、葛藤が俺を苦しめる。だがそうしてる間にも一人演技を始める橙、哀愁漂う顔で俯く。また未亡人か…？いや今回は夫生きてるし…。

「ごめんなさい…もうこの家にお金は無いの…」

「ちよつと待って」

ほんと待て、今度はどういう設定だ。俺のことをどうしたいんだお前は。え、俺ってそんな奴だと思われてたの？家の金使い込んで破綻させるようなクズ男に？

「ん？」

「いや、おかしいよ。俺の配役おかしい」

「絶対こつちの方が楽しいと思って」

そういう快樂主義なところもいい加減にしようか橙。

「とりあえずちよつと変えてよ」

「わかった!」

本当にわかったのかこいつ。返事だけは大きい姉貴分に戦々恐々としつつじつと待つ。

「貴方、もう限界なの私…今すぐ別れて欲しいの…」

「場面を変えろって言ったわけじゃないよ、根本的にいろいろ変えて?」

「えー?」

えー?じゃないよ全く。あとニヤニヤと俺の反応を見て楽しんでるのバレバレだからな。この歳で人格破綻者である橙に恐怖しながらとりあえずこいつのサディズム精神をどうにかする為に何か出来ないか考える。

「そんなにお父さん役が嫌ならやつぱりペットしか無いね。あ、今回は本格的な感じにする為に実はあるものを持ってきたんだ」

そう言ってきたからチラチラ見えていた麻袋をガサゴソと探る橙。嫌な予感しかない。

「ほら!首輪!リードもあるよ!」

おい嘘だろ。お前普通に超えちゃダメなライン超えてきたな。俺は戦慄しながらもその首輪を見る。こんなゴツイ首輪何処から持ってきたんだよ…。怖えよ…。

「いや流石にそれは…」

「えー？でもリアリティって大事だし…」

おままごとくにリアリティを求めるなよ…おままごとにぐらい理想を見させろよ…。

「とりあえず着けてよ」

「藍さんに言うよ」

そう言うのと怯んだような表情を見せる橙、これは効くようだな。まあ俺も藍さんには叱られたくないしな。橙も藍さんの怖さはわかっているんでこれは効果的だ。

「だってえ…着けたら絶対似合うもん…」

そう言つてぶーたれる橙、頬を膨らませて年相応の顔を見せるがやっている事はただの行き過ぎたサディストだ。この歳で流石に業が深過ぎる。

「そんなオシヤレみたいに言われても…」

「オシヤレだよ、これは凄くオシヤレ」

すかさず洗脳しようとするな、俺はそんなことには絶対屈しないからな。

「じゃあアルクはどこまでだったら妥協してくれるの？」

「どこまでも無理だよ」

「いやー！そんなのいやー！」

ジタバタとゴネ始める橙、それを冷たく見ながらどうするか考える。このままだと隙を見せたら絶対に首輪をはめられる。寝てる時とかヤバそう。ほんとどうすんだこれ。

俺は悩みに悩む、何か二人にとって妥協できる終着点は無いかと。

しかし、しばらくして橙がゴネるのをやめてムクリと起き上がる。

「仕方ない、か…」

お、諦めてくれたか。

「まあ首輪は流石に目立つしねー、私も藍様に怒られたくないし」

そう言つて肩をすくめる橙、いやにあつけないな。俺は少し不安に思いながらも諦めてくれたことに嬉しさを抱いていた。しかし

「だ・か・ら♡首輪が無理ならアルクにはこれをつけて欲しいって思つて」

麻袋からまたゴソゴソと何かを取り出した橙、よく見ると何やら中央にハートの装飾のされた紐のようなものだ。なんだこれ。

「チョーカーだよ、ただの首飾り。そういえばこの八雲家で歓迎パーティーを開いたけど私個人からは何も無かったからそれあげる！」

ええ、これ渡す為にさつきまで茶番をしたのか？なんかめんどくさい奴だな。まあ貰えるものは貰おう、首輪じゃなけりやもう何でもいいや。

「あ、ありがとう」

「うん。あ、つけてあげるね、貸してみて」

そう言つて背後に回り手を回される。あれ、こいつに背後取られるのってこんな怖

かったんだ、知らなかった。また新たな情報を手に入れながら、されるがままにする俺。

「コレ見た時ピーンと来てさあ、絶対アルクに似合うと思って」

「へ、へえー」

なんか声がねつとりしてるう！怖いよお！

「ずうーつと着けた時のアルクを想像してゾクゾクしてたんだあ…」

「な、なんか情熱的だね…」

もうそれしか言えなかった。真に怖いのは生きているものだとはまさにこの事。俺は橙のことが怖くて仕方なかった。

「はい、つけ終わったよ」

「うん、ありがとう」

まあお礼ぐらいは言おう、一応貰ったもんは貰ったし。俺は自らにつけられたチョーカーを少し手で弄る。お、このチョーカー結構良いやつじゃないか？布地で凄い肌触りが良いしお洒落だし。橙に貰ったものだということを除けばいい貰い物だと思う。

「高かったんじゃないのこれ？」

「私はアルクのお姉ちゃんみたいなもんだからね！そんなことアルクは気にしなくて良いの！」

いや弟分に首輪着けようとしてましたよね君。殴りたくなる笑顔を振り撒きながら

コロコロと態度を変える目の前のサディストにため息を吐きたくなる。

「アルク似合ってるよ、ほんとにね…」

うつとりとした表情で俺のチョーカーを見るその姿にはまるで娼婦のような色気を孕んでいた。いやこいつ何歳だよ。

「またお返しするね」

「あ、じゃあ今度は首輪を…」

「それはダメ」

いや諦めて無かったんかい！じゃああれは茶番じゃなくてマジだったのか。こいつマジで俺に首輪着けようとしてたのか。

「ぶー…。…ま、いいか、そのうち自分から着けてくださいって言うようになるから…」
なんか不穏な囁きをキャッチしたぞ今。

「と、とりあえず紫様達に見せてくるね」

「うん！」

笑顔で手を振ってくる橙、しかし何処か嘘っぽい。やっぱりこいつは信用ならないと再認識したのであった。

「いやーん！めちやくちや似合ってるわよー！ハートが可愛いわ！」

「橙も中々お洒落な贈り物をしたのだな」

絶賛の嵐だった。特に紫様からの感想は恐怖を感じる程の熱量を持っていた。あとカメラ連写し過ぎだろ、カシヤカシヤうるせえ。

「しかもこれ人里で人気のやつよ、売り出されたらすぐに完売するし。凄く運が良かったのねー」

へえ、そんなに良いやつだったのか。俺は中々にそのチョーカーを気に入りながら真ん中のハートの装飾を指で弾く。

「しかし橙の言う通りだな」

「そうね」

ん？どゆこと？

俺は話についていけずに頭の上にクエスチョンマークを浮かばせる。

「たしかに八雲家で歓迎会を開いたが個人では祝いの品をあげていなかった」

「ええ、私としたことが…」

いやそんな無理しなくても、俺ただの居候だから。そうは思いつつも紫様達は何を送ろうか思案している様子なので声もかけられない。

そうやってまごついていると紫様がいきなり顔を上げて喜色に満ちた顔で声を上げる。

「そうよー！」

「どうしましたか？」

ほんとうでしたんだ、とうとうボケたか。

「旅行に行きましょう！温泉とか！」

りよ：…こう？旅行って旅のことか？おお、やったね。俺結構旅行好きなんだよ、落ちて休めるし。

しかし、そんな温泉旅行が波乱の幕開けになるとはこの時は思いもしなかった。この時止めていれば、無理にでも断っていればあんな修羅場には会わなかったのに。俺は無事なまま休日を過ごせたのに。

そんな温泉旅行が今、始まる。

17話

「晴れたわねー！」

「そうですね、今日はちようど梅雨明けのようですから」

「私はアルクが居ればいつでも心は晴れ模様だけどね」

「フラン、ややこしくなるから黙ってて」

ちよつと待て

「私もアルクさんが居るからかサードアイの調子が良いです」

「ちよつとお姉ちゃんも黙ってよう？」

ちよつと待て

今日は待ちに待った温泉旅行の日。幻想郷の天気は晴れ晴れとし、絶好の旅行日和というところだろう。着替えや遊ぶための道具と期待を背中に背負い、さあ行こうと踏み出したところで俺はここに居ないはずの人達が居ることに今更になって気づく。

「いやあの」

「どうしたアルク？トイレか？」

いやそうじゃなくてですね妹紅さん。まあ、貴方は良いんですよ俺が呼んだし、この

前のお返しのために。

「そうじゃなくて、なんで姉様達とさとりさん達がここに？」

「ああー…私が呼んだのよ。呼ばなかったら後でややこしくなりそうだから仕方なく」

ええ…なんか嫌な予感しかしないから凄く嫌なんですけど。正直に言うとうと帰って欲しい。絶対姉様達は旅行中も俺に頭おかしいくらい過保護に接してくるし。この際直接言うか？

「アルク、私達居ない方が良かったかな？かな？」

フラン姉様、その顔で俺に近づいてくるな。目にハイライトをダウンロードしてアツプデートしてから来ようか。話はそれからだ。

「…私はアルクさんの友達ですから普通誘われる筈では？それとも友達と思っていたのは私だけだったんですか？ですか？」

さとりさんはブツブツ一人で呟くのやめて、妹さんがめっちゃ冷たい目で見てるよ。こんなことになるならこいしさんだけで良かったよ。こいしさんはわりと常識人だしな。

「別に嫌な訳じゃないよ？ただ、理由というかなんでだろうって思ったから」

そう言ったら二人が元気良く手を挙げる。さながらそれはクラスの優等生。おー元気だね、そのまま寺子屋でも行ったらどうだい？と言いたくなるがぐつと堪えて言い分

を聞く。

「はい！アルクが絶対その行き遅れクソBBAと発情キツネ&発情黒猫にマワされると思ってたからです！」

「はい！私はアルクさんの友達だからです！友達は特別なんです！友達は絶対なんです！友達は不滅なんです！」

どっちもやべえ。

そんなこんなで目的の温泉宿までの山道を登って行く一行。

え？スキマで一気に行かないのかって？

いや、それしたら旅行じゃないだろ。旅行というのは山あり谷ありで不確定な要素があればあるほどに楽しいんだよ。宿は汚くていい、景色は汚くていい、ただし飯と風呂だけは最高のものを。それが俺の旅行哲学。そう、だからトラブルさえも笑っていけるような…

「ねえアルク、八雲の奴らにいじめられてない？」

フラン姉様は最初から最大レベルのトラブル発生させすぎじゃない？そのせいでまるで永久凍土のように八雲の皆さん達の周りの空気が凍り付いたよ。やったね。

「ブランドール、それはどういう意味だ？」

「いやー何か貴方みたいな性格キツソーだし胸もキツソーな人に任せて大丈夫だったかなーって」

藍さんのこめかみに青筋がぴきりと一瞬浮かび上がった。俺じゃなきや見逃しちゃうね。しかしその後、口を釣り上げふふん、と笑う藍さん。その姿に怪訝な顔をする姉様。

何か高度な情報戦をしている気がする。俺からしたらクソ程どうでもいいけど。

「アルクは私の尻尾でなければ寝られない程に私の尻尾に溺れているんだ。だからお前が心配することは無い。アルクはもう私無しでは生きられない身体になってしまったからな！」

「な、なん…だと…」

愕然とした表情で崩れ落ちるフラン姉様。できればそのまま自分の家に帰って。あとなんで藍さんも躍起になってるんですか。まあそう言うのもわからないでもないけど。尻尾でミノムシのように寝るのが好きなのは確かなことだし。いい匂いするしフ

ワフワワだから。

「ぐううあ!! 私に、私にも尻尾があれば!」

「ふっ、勝ったな…」

勝ちを確信したのかフラン姉様をほっぽって歩き始める藍さん。しかしまだフラン姉様の目に闘志は残っていた。いや諦めろよ。

「こうなったら温泉宿の卓球で決着をつける! どんな汚い手を使ってでも勝ってやるから!!」

「いいだろう」

良くねーよ、やめろ。

「ところで温泉宿って何処なんだ?」

「もうすぐよ。…ところで貴方は結局アルクとどんな関係なのかしら」

おい、妹紅さんにまで絡むなモンスターペアレント。お前は藍さんにどれだけ心労をかけたら気が済むんだ。

「一緒に寝た」

「あ?」

妹紅さん、言い方ア!!

それを聞いたレミリア姉様が妹紅さんの胸倉を掴む。おい!やべーぞ!誰か止めろ!俺は無理!

小物臭を内心で撒き散らしながら誰かが妹紅さんを助けてくれるのを待つ。しかし誰も止めるものは居ない、それどころかもつとやれと言ってるようにも感じる。ちくしょう!まともなのは俺だけか!

そう思い止めに行こうとするが妹紅さんが気だるげな表情でレミリア姉様を見て一言。

「部屋を出ようとしたらアルクが引き止めてきたんだよ、私からは何もやってない」

「え?」

だから言い方ア!

俺は酔っていたので記憶に無いが何やら俺が妹紅さんを引き止めてベッドに引きずりこんだらしい。おい!何やってんだよ俺!

「あ、アルク。嘘、よね?うだつて、そんな筈。ハジメテはお姉ちゃんにつて:」

いくらなんでもその理屈はおかしい。童貞を姉に捧げる義務があるとか俺の人生

ハード過ぎんだろ。まあまだ童貞だけどね。

「レミリア姉様、よく聞いてね」

「嫌あああ!!!可愛い可愛い弟の他人とのハジメテの情事の様子を聞くぐらいなら鼓膜破いて心臓貫いて死ぬ!!」

「今までありがとう、さようなら。こいし、介錯は頼んだよ」

「うん、任せて」

おい！後ろで死のうとしてる奴いるぞ！誰か止めろ!!

「アルク、旅行中にこいつらに何かされたら私に言えよ?」

妹紅さん、凄くありがたいんですけどこの事態引き起こしたの貴方ですからね?

そろそろ着く頃かなと期待をしつつ山を登っていく。少々疲れてきたがこの後に入る温泉というのも格別なものだろうと思う。しかもその後にご飯を食べたら…想像するだけで有頂天になる。しかしそんな俺の平穩を邪魔してくる奴が一人。

「…ねえ♡アルク」

「な、なに? 橙」

いきなり耳元で囁くのやめろよう!ゾクゾクするだろうがよう!

「温泉宿、貸し切りらしいよ？」

「そ、そうなんだ。良かったね」

貸し切りとはまた太っ腹だなあ…まあ、こんなメンバーと一緒にの宿で泊まる一般の方とか気の毒過ぎるのでそれは良かっただろう。絶対なんか起こるしな。そんなことを考えてたら橙がグイツと俺の耳に顔を近づけて

「深夜に二人で温泉入ろっか♡」

「え」

待て、それはいろいろとヤバいわ。あいにくロリには興味は…まあ無い。無いいたら無い。精神的にはとうに成人してるんだぞ俺は。中身がおっさんだとバレたら犯罪になっちゃう。

「だ、ダメだよ」

「なんで？子供が二人で温泉に入るのってそんなおかしなことなの？」

ニヤニヤといつもの顔でこちらを見る橙。思わず「こ、このガキ！舐めやがって…」と言つてしまいそうになるほどのこちらを舐め切った顔だ。

そんな顔を見て、俺は反撃をしたくなつてしまった。らしくなかつたと思う。けどそれぐらいイラツとする顔だったのだ。しゃーない。

俺はすかさずその体勢のまま身体を横に向けて、橙の耳に口がつくのではないかとお

もうぐらいに近づきこう呟いた。

「…ダメ、だよ?」

吐きそう、俺がこれをやっているという事実拒否反応を起こしながら橙の反応を待つ。何やら俯いているようだ、やったか!?

「…ふうー…ふうー…」

あれ…?なんか鼻息荒いような気がする。犬歯むき出しだしめっちゃ怖い。

「お、あれじゃないか?」

妹紅さんが言う。たしかにめちやくちや広い旅館が少し先に見える。森の静謐な雰囲気に包まれて何か神聖なものを感じる場所だ。

ぶつちやくめちやくちや好きな旅館だな。前世でこんなところがあれば通いつめていただろう。

「そうね、あそこよ。私も初めて来るところだからどんな感じか全然わからないけどね」
へえー、紫様がわからないなんて珍しいな。いつもは鬱陶しいまでに自分の知識をひけらかしてくるのに。

「あ、もう着いたわね」

近くで見れば見るほどかなりの大きさの屋敷のようだ。枯山水の庭園でしんと鎮まったような雰囲気がますますこの旅館の外界との乖離を教えてくれる。まるで幻想郷から切り離されたようなところだ。

「はえー、凄いなー」

「こいし、あんまりキョロキョロしては駄目よ」

こいしさん、大いに気持ち分かるぞ。これには俺も驚いている。そんなふうには呆気に取られていると開いていた玄関の奥から女将と思われる人が出てきた。

「ようこそおいでくださいました、この度はこの宿を選んでいただきありがとうございます」

そう言つて優雅に頭を下げる女将さん。これはプロだな。

「ええ、今日はお願いな」

「はい、ではお荷物はこちらの方に」

そう言つと男の人が何人か出てくる。どうやら部屋まで荷物を運んでくれるようだ。ちよつと重かつたから助かる。

「ありがとうね」

「いえいえ、昼食はまだですよね？ どう致しましょうか？ お部屋でお休みになれますか？」

「皆はどうするの?」

紫様が皆に聞くが、まだお昼というには少し早いので部屋で休むことになった。そして女将さんに案内されテクテクと歩くがふと気がついた。

俺どこの部屋だ。

「なあ」

「ん? どうしたのかしら」

「アルクはどここの部屋なんだ?」

妹紅さん、よくぞ聞いてくれた。俺からはなんか聞きづらいし。

「もちろん」

「「私達の部屋(です)よ」」

三人の声が被さった。一人は紫様、一人はレミリア姉様、一人はさとりさん。

「ん?」

「お?」

「は?」

お互いを威嚇し合う、これは何処の部屋にも入りたくないな。どうしようか。

「俺は一人部屋で」

「ダメだよ」

フラン姉様がすかさず拒否してくる。まだ頭の中が狂気に支配されているようだ。可哀想に。

「妹紅さんは一人部屋だし俺も一人部屋でも…」

「ダメですよ」

次はさとりさんが拒否してくる。この人は元々狂ってるみたいだ。可哀想に。

「なら、アルクは私のとこに来るか？」

「あ、じゃあそうします」

即決だった。周りがギャーギャーうるさかったが全て無視し俺は妹紅さんの部屋で休むことになった。

18話

「ツーパーアです」

「私はワンペアだ、お前の勝ちだな」

妹紅さんの部屋に入ってから今までの喧騒が嘘だったかのように静かな時間を過ごすことが出来ている。ひとえにこれは妹紅さんのまともさの表れによる平穏だろう。そんな当たり前の平穏を甘受しつつポーカーに勤しむ。妹紅さんも薄く微笑んでいるのでつまらないわけではないみたいだ。良かった良かった。

「いや、まだまだよ。私のバトルフェイズはまだ終了していない」

「ロイヤルストレートフラッシュ！私の勝ちです！残念無念再来年！」
ただし今すぐお前ら二人は自分の部屋に帰れ。ぶっ飛ばすぞ。

「二人は何しに来たの」

「い、いや私達もアルクと遊びたくて」

「友達ですから……」

正座して口笛を吹きながら誤魔化しているがそんなことをしても俺が益々イラつく

ただだ。なんださとリコラお前その顔、馬鹿にしてんのか。

「何ですかその顔」

「これは反省してる顔です、けして『アルクさんとポーカーするなんて羨ましい。そうだ、このもんペ女を後で温泉に沈めてやろう』なんて考えてません」

語るに落ちたなこの野郎、常識人枠である妹紅さんに被害がかかるなら俺も手段は選ばんぞ。

「そんなことしたらこいしさんに言いつけますよ」

「べ、別に怖くないですよそんなの、そもそも妹が姉に勝てるわけ」

「そうだねえ、お姉ちゃん。ちよつとこつち来ようか」

目を泳がせながらなにか喋るさとりさんの隣にヌルツと影から這いずるかの如く現れるこいしさん。言いつけるまでもなくこちらに既に来ていたようだ。

あ、さとりさんが白目剥いてガクガク震えだした。こいしさんが怒ったらどんだけ怖いんだよ。そしてそんなこいしさんはフラン姉様の方にも振り返って少し咎めるような顔をする。

「あとフランも帰るよ。アルク君に嫌われたくないでしょ?」

「ぐつ、ううう…」

凄い不満そうだが友達の珍しく怒ってる姿に恐怖している。そんな二律背反な気持ち顔から見て取れるが最終的には渋々連れて行かれた。これからあの二人がなにかしたらこいしさんを呼ぼう。

「あの、ありがとうございます。こいしさん」

「まあ、あの二人が居たらゆっくり休めなさそうだしね。アルク君はこのメンバーの中で一番身体が弱いだろうし」

「本当にありがとうございます…」

俺は確かにクソ雑魚体力なので正直結構疲れてる。それをきちんと見てくれていたのだろう。イケメンだな、惚れる。

そんなふうには俺の中の乙女心を気持ち悪い感じにキュンキュンとさせながら二人を引きづっていくこいしさんを見送った。

「あつという間だったな…」

「です…」

その後は至って平和に二人でババ抜きや七並べなどをして遊んでいた。あと妹紅さんが能力を使って火で作った鳥やら兎やらを見せてくれた。前から思ってたけどほんとこの人多芸だな。

「ううう、私も一緒にアルクと遊びたかったよおー！」

「いや流石に疲れてるだろうしダメだよ」

こいしに引きずられ部屋に連れ戻された私はゴロゴロと畳の上を転がり続けていた。確かに私がアルクを疲れさせているのはわかるが我慢出来ないのだから仕方ない。アルクは麻薬と同じなのだ、禁断症状が出ると自分でも制御出来なくなる。

叶うならばアルクのようなじをベロンベロンになるまで舐めたい。いろんな意味でベロンベロンになるまで。そんなことを宿の天井を死んだ魚の目で見ながら思う。

「サードアイが使えなくてもフランの考えることが何となくわかるよ」

「凄いな、私達通じ合ってる。流石親友だね」

「フラン、だからやめておけって言ったのに」

「お姉様も、行こっかな…って言ってたじゃん！その言い方は立派な裏切りだよ！」

ビシッと指をお姉様に向けながら糾弾するように言うとき少しバツの悪くなったような顔で口笛を吹き出した。昔から自分の分が悪くなるとすぐこれだよ。

「私はちゃんとゲームに参加して盛り上げようとしてましたよ」

「あれでなんで盛り上げられてたとか自信満々に言えるかはわかんないけど、なんでお姉ちゃんに友達が居ないかはわかったよ」

おお、こいし辛辣う！私は普通の人には言い難いことをズバツと言えるこいしのこと

が好きだよ。ただし私にその矛先が向いてない時以外の場合だけだね。あつ、さとりが真つ白に燃え尽きた。流石に同情するね。

「まあまあ、いいじゃないの。あの妹紅とか言うもんぺ女はアルクに特別な想いを抱いてる訳でも無さそうだし」

「どつちかと言うと従姉妹みたいな距離感だったね」

こいしが冷静に分析するが、私はそんなことを気にすることもなく呑気なお姉様を軽くビンタした。凄い驚いたような顔で頬を押さえてこつちを見てくるお姉様。しかしこれだけは言っておかないといけない。

「甘いよお姉様!」

「ちよつ、何がよ!地味に痛いし!」

「あの女はアルクと一緒にのベッドで寝たんだよ!?!それはもう実質○○じゃん!ギルティだよ!」

「何言ってるのアンタ!?!」

これは由々しき事態なのだ、あんな可愛くて可愛いアルクと一緒に寝てどうにかならないはずない。私ならば0.1秒の隙があれば襲ってる。アルクのリボルケインとドックインだ。我ながら最低だと思う。

「あのもんぺ女、次会ったらゆるぎさんつつつつ!」

「あーあ、フランに変なスイッチ入っちゃった」

「こいし、フランの友達なんだからなんとかして…」

「レミリアの方こそお姉ちゃんですよ」

どちらも触らぬ神に祟りなしといった様子で他人任せにしようとするのであった。

そんなレミリア達が居る部屋の隣で八雲家がお茶を飲みながらゆつたりと休みを満喫していた。

「なんか隣の部屋が騒がしいわねー」

「注意してまいりましょうか？」

パリパリと煎餅を食べながら紫はうーん、と悩む素振りを見せる。しかしすぐに首を横に振り別に良いわ、と藍に言った。

「藍様！アルクのところに行つてきても良いでしょうか！」

「うーん、やめておいた方が良くと思うぞ。疲れていたようだしな」

そう言われるとしゅん、と落ち込む橙。八雲の式の式といつてもまだまだ子供。寂しいのだらうなと藍は微笑ましくなる。

実際のところはいろいろ橙がアルクに仕込もうと計画立てていただけなのだが、知らぬが仏だらう。

「じゃあ紫様、藍様！UNOしましょ！」

「良いわよ！私めちやくちや強いんだから！」

紫が幼い子供のように食いつく姿を見て苦笑を浮かべる藍。この主はどこまでが本気なのだろうかとたまに疑問に思ったりもする。

その後紫は他二人にズタボロに負けて半泣きになるのは言うまでもないことだろう。

各自が自室で各々時間を過ごしそろそろお昼ご飯の時間になろうかという時。半泣きでUNOをしていた紫が、全員を食事をする為の広間と呼ぶ。

アルクのパンツの色について語っていたフランも、真つ白に燃え尽きていたさとりも、トランプをしていた妹紅とアルクも、それを聞き意気揚々と広間に向かった。

「お昼ご飯食べたら遊技場があるみたいだから行ってみようか」

「はい！妹紅さん！」

しかし、すっかり妹紅を信頼した様子でいるそんなアルクを行きがけに後ろから見つらんは嫉妬の炎を燃やしていた。

必ずこの邪智暴虐の妹紅を倒さねばならないと。そして、そう思った時にはフランは行動していた、すかさず後ろからアルクに近づいていき妹紅に見せつけるように抱きついた。

「私もそれに誘って欲しいなあ」

「ふ、フラン姉様!？」

「どうだ羨ましいだろう。そう思い妹紅の方を見る。しかし

「相変わらず姉弟で仲が良いんだな」

「嫉妬すらない…だと…」

フランはそんな妹紅の態度に恋愛強者の余裕を見た。アルクが絡むとただのバカなフランだった。そんなフランの様子を見て寂しいから抱きついてきたのかと勘違いするアルク。

「ざつきはごめんね姉様、俺疲れてたから」

「あつ、うん。良いんだよ、私も無理やり部屋に入っちゃったし」

弟を謝らせることは本意ではないので快く許す。そして抱きついた姿勢のまま広間に向かう。もう突っ込む気も起きないのかレミアアは真顔でそれを見たあとにスタスタと歩いていった。凄く羨ましいな、と思いつながら。

そして、広間に全員が集まりお昼の用意もされている。それを確認した紫は全員に聞こえるように音頭をとった。

「いやー、ここまでお疲れ様!今日は好きなかだけ飲んで食べて満喫してね!」

紫がそう言うのとみんながみんな目の前のご馳走を取っていく。大きなテーブルに凄

まじい数の料理が鎮座しているので、それを各自で取るバイキング形式だ。

「お肉、お肉、お肉」

「あつ、お姉ちゃん。お肉ばかりじゃダメだよ?」

うわ言のようにお肉、と呟きながら肉料理を自分の皿に入れていくさとり。その皿に野菜を横から入れるこいし。これではどちらが姉かわからない。

「高貴な私達にはこの雰囲気は少し違和感があるわねえ:ね? フラン?」

「はぐつ、ふぐつ、むぐつ、おいしつ、ん?なんか言つた?お姉様」

「:でできれば落ち着いて食べなさい」

「わかつた!」

ハムスターのように両頬が膨れ上がった妹を見て少しは家柄を気にして欲しいとも思つたが幸せそうなので何も言えなかつた。

そんな妹の影響かレミリアもまた料理を頬張るのであつた。

「みんな美味しそうに食べるわね。藍、どれが美味しかった?」

「私はこの手羽元の煮付けかと」

「じゃあそれ食べよつと」

子供のような笑顔を見せながら料理を取る紫、普段あんなに子供っぽいのに料理の取り方や所作などは大人っぽい。そんなチグハグなところが紫様らしいな、と藍は微笑

み、主の代わりに他の料理を取り分けるのであった。

「この湯豆腐美味いぞ、アルク」

「あ、ありがとうございます」

わりと食の趣味がおっさんっぽいよな、と妹紅に対して思うアルク。しかしこのおせっかいな感じはおかんって感じがする。もしくは孫に料理をすすめるおばあちゃんだな、と失礼なことを同時に考えながら差し出された湯豆腐を食べる。

「あつ、美味しい」

「だろ？」

シンプルだが豆腐に雑味が無く口当たりもいい。恐らく自家製の豆腐だ。このポン酢との相性とも抜群だった。

「しかしアルクは相変わらず美味そうに食うよな」

「そ、そうですかね」

「ああ、食った瞬間に後ろに花が咲いたかと勘違いする程の笑顔を浮かべるからこつちもどんどん食わせたくなる」

なんか恥ずかしいなとアルクは思う。他にも男として恥ずかしいことをしている筈なのに変な奴である。

「…もし私が普通に結婚して、普通に息子が居たならこんな感じなのかねえ」

「え？」

「なんも無いよ」

あまりに小さな声の為、アルクはおろかこの会場に居る耳の良い藍や橙でさえもその声を聞き取れなかった。

「こつちの唐揚げも美味いから食えよ。ほつといたらあのさとり妖怪が全部食つちまいそうだ」

「あつ、はい！貰います」

妹紅はそんな少し食いしん坊で優しさを持った吸血鬼の可愛い友人を愛おしく思うようになっていたのだった。

「お料理いかがでしたでしょうか？」

「美味しかったわよー、お腹も夜までもちそうね」

「それはこちらも嬉しい限りでございます。あ、あと、お手数ですがお客様にお聞きしたいことがございまして…」

「ん？どうしたの？」

そして。少し一息おいてから女将は話を切り出す。

「温泉を混浴、それとも男女別。どちらにいたしましょうか？」

「もちろん混浴よ」

「男女別にしないと藍さんにお仕置きしてもらいますよ」

紫は視線を鋭くさせ答えたが、アルクが絶対零度の視線を紫に向けて却下したため泣きながら男女別にした。その様はまるでおもちゃを取り上げられた子供のようだったという。

19 話

温泉、このワードを思い浮かべた時、あなたは、どんな情景を思い出すだろうか。家族と、友人と、恋人と。様々な繋がりを、より強固なものにする、一種のコミュニケーションの場のようなものではないかと俺は思う。

日常と乖離した場、いつもとは違う会話。聞けないことや、言えなかったことを、この場でさらけ出す。心も体も裸にすることこそ、温泉の目的。

「まあ、男女別だけどね」

いろいろつらつらと言っていたが、俺は男一人で入る。脱衣所で服を脱ぎ、腰にタオルを巻く。必要な物を桶に入れ、スタスタと洗い場に向かう。まずは、体を洗わなければならぬ。

「シャワー……幻想郷にもちゃんとおるんだよな……」

チグハグな生活文化だが、まあ幻想郷だし、そんなこともあるか。

「よっ……と」

やはり風呂は良いな、そういえば風呂の起源はメソポタミアらしいけど本当だろうか？

なんかその後に、キリスト教の男女で裸を見せ合うという文化が忌避されて一旦廃れたらしいけど。

「何はともあれ、メソポタミアに感謝…」

心の中で拝みつつシャワーを浴びる。あと、ようやく椅子が暖かくなったので、お尻を椅子に置く。

目の前の鏡で自分の顔を確認するのも忘れない。うん、目の下のクマが凄いな。目を離すと消えてしまうような雰囲気の時ヨタだ。

「結構明るい顔は出来るんだけど、この目の仕様だけは直らないなあ」

元々のアルクとの差別化を図っている、と考えれば一応納得はいくかな。

「相変わらずくびれが凄い、お尻もキュツとなってる。本当に男の子か迷走するな」

最近、変な色気がムンムン出てる気がする。吸血鬼といっても一応体の成長はあるので、たまにびつくりする。

「てへっ♡……ヴォエっ!!」

鏡の前でぶりっ子を決め込んでみたが、気持ち悪すぎて吐きそうになった。やつぱり、これは慣れないな。

いやでも、ぶりっ子してた方が受け良さそうだから、こういうのも大事になってくるかもしれないし。

「…やめようやめよう、これは俺には向いてない」

結局いつも通りにすることにする。そろそろ体が洗えたので風呂に浸かる。露天風呂…こつち行くか…。ガラガラ、と露天風呂に続く扉を開けた。

「ふう…」

「ブクブクブク」

「ゴボゴボゴボ」

「俺、覗きとかする人大嫌いなんだよね」

何かが水しぶきをあげて、男湯の露天風呂から女湯に飛んでいった。どんだけ俺の裸見たかったんだよ。見覚えのある金髪と紫髪の残光を、少し呆れた目で見ながら、俺は少しお湯の減った露天風呂に浸かるのだった。

「あひゆう…気持ちいい…」

「エツツツツツツ」

「いやらしい声ですね、けしからんですよこれは」

「お姉ちゃん達？覗きに聞き耳、もう見逃せないよ」

「アツツツツシヌ」

「死にましたね、死にましたよこれは」

ドスツ、ドスツ、という重い音が二回立て続けに鳴ったかと思ったらズルズルと引き

ずられる音もその後続いた。そこで、俺は思考を放棄する。

「アルク君、その、ちよつとそういう声はお姉ちゃん達に刺激が強いから…私もドキツとしたし…」

「あつ、すいません。気をつけます…」

「全然責めてるわけじゃないよ、全面的にお姉ちゃん達が悪いしね。けど、私はアルク君がこの二人に襲われないか心配で仕方なくて」

「ほんと気をつけます…」

竹の柵の先から声を上げてくるこいしさん。おっさんの時だったらおっさん臭いな、の一言で終わってたというのに、えらい変わりようである。

「チョロそう、を具現化したような存在だしね…」

「え?」

「なんにもないよ。私達は上がるけど、ごゆっくりね」

まあ、聞き取れなかったしいいか。それよりも今は温泉を楽しもう。

しかし、いくら幻想郷が男性少数だからといって、流石にこれは耐性無さすぎだな。

「初めてエロ本見た時の中学生みたいな反応するもんな…」

獲物を狩る虎のような目をしながらも、本気で襲いかかつては来ない辺りその例えが一番最適だろう。

「しかし、温泉で月が見えてるのはなんか良いな」

今日はたまたま満月のようで、妖怪として、中々力が湧いてくる期間でもある。まあ、俺が強くなったところであって感じだけど。

「魔法、創造、『鳥』」

魔法で編んだ糸で鳥を形作る。それを露天風呂に浮かべ、アヒルちゃんの代わりにぶかぶかさせておく。やつぱり、風呂といえればアヒルちゃんだよな。俺は満足げに、アヒルちゃんに魔力を使い、ホバー移動させる。ぶーん。

うん、なんかテンション上がってきたから、他にも作るか。何にしよう、猿とか温泉っぽいかな。そう思い、小猿の形に魔力を変化させる。

「これが、戦闘でも使えたらな。言うことないのに」

ただの魔力系なので攻撃を受けたら直ぐに解ける、それに俺が動かさないとただの人形だ。

…そう思ったらなんか虚しくなってきた。

いい年こいて人形遊びとか、恥ずかしくないんですかねえ…。そんな自問自答をする。いやでも、テンション上がってたから、仕方ない仕方ない。

「そろそろ上がるか…」

俺は岩の上に置いてたタオルを腰に巻き直し、脱衣場に戻った。

「アルク、温泉はどうだった？」

「気持ち良かったですよ。なんか、変な二人組居ましたけど」

和服に着替え、さっぱりとした皆が温泉の前で待機している。どうやら俺が最後だったみたいだな。あ、フラン姉様がなんか飲んでる。いいな、俺も欲しい。

「アルク、欲しいの？」

「うん、そういうの何処にあったの？」

「…私の飲みかけでいいなら、これ飲みなよ。間接キスだよ、ホラホラ」

「フラン姉様、酔ってる？」

明らかに顔が赤い。こいつ、アルコール摂取したのか。タダでさえ素面でも厄介なのに、酔っ払ったら手に負えない。

「あ、口移しとか、する？」

「しません」

なんで俺が口移ししたそうに見えた、みたいな言い方してんだこいつ。りんごのように顔が赤くなってるフラン姉様を見て、これ以上は近づかないように心掛ける。

「えー、しようよ」

「やだよ」

「ダメか…」

「いける可能性があった、みたいな感じ出すのやめて」

顔が良くて、幼女な上に姉という二重の意味でダメな人だから。そこをちゃんと自覚して欲しい。

「フラン、これから晩御飯なんだから飲み過ぎはダメよ」

「馬に念仏つてやつだよ、お姉様」

「それは馬が言う言葉では無いわよ」

そっかー、とフラン姉様が残念そうに言う。本当に分かっているのか？

「そもそもお酒というのは、ゆったりと飲むものなの。どこの酒豪よ貴方」

「アルクの裸見れなかったし、飲まずにはいられないってやつだよ」

お前は吸血鬼の王か何かか？そうなると、早めに波紋を流して無力化させた方が、俺の危険が無くなるのではないかと思わずにはいられない。

「またそうやってアルクを困らせてたのか」

「乳でかキツキツ狐さんは少し黙っててね、お酒が不味くなっちゃう」

青筋がびきりと額に浮かぶ藍さん、煽り耐性が意外に無いなと思う。まあ、フラン姉様が余計なこと言わなきゃ、こんなことになってないんだけどね。

「ないよりマシだ、この無乳が」

「…いま、なんつった？マジで殺すぞ」

あつ、藍さんがフラン姉様のデリケートな部分を踏み抜いた。

「絶壁、まな板、痛々しい、三拍子揃ったお前では、アルクの姉を名乗れないということだ」

「上等だよ、お前の生皮剥いでコート作って捨ててやるから」

フラン姉様、酒癖悪う！口調が180度変わってるし、目つきも悪い。酒はその人の本性を暴くとは、まさにこの事だな。

「いい加減にしなさい、フラン」

「だってこいつが…」

「今のはお前が悪い、今すぐ謝りなさい」

「う、うぐう…」

カリスマを全開にしたレミリア姉様に逆らえるものは、八雲家ぐらいだ。フラン姉様でさえ、冷や汗を垂らして青ざめている。

「しゃーっす…」

「フラン、ふざけてるの？」

「…ごめんなさい」

「ま、まあ私もムキになってしまったし」

藍さんにそう言われるとムスツとした顔でどこかに行つてしまふフラン姉様。ん、なんかいつもと違うな、強者特有の余裕というものが無い？ 感じた。それを見たレミリア姉様も、ついついため息をつく。

「なんか、最近焦つてるのよね…あの子。ごめんさい、うちの妹が」

「さつきも言ったが、気にしてない」

レミリア姉様が藍さんに謝る。その姿は紅魔館の主では無く、一人の姉のように思えた。

「あの子も馬鹿じゃないし、晩御飯には戻ってくるでしょう。行きましよう？」

「ま、そうだね。今はほっといた方がいいかも。少なくともこいし達に出来ることはないね」

「ですね」

「…本当にそうなのか、な」

『今がダメでも、次は必ず幸せになつてる。私が約束するから、それまで待つてて』

フラン姉様は昔、そんなことを言つてた。俺が親から虐待を受けていたときに。毎日毎日摩耗する精神の中、繰り返し言われた言葉だ。アルクは確かにその言葉に救われていた、と思う。

俺自身は、今のことはどうでもいい、という思いしかない。しかし、俺は例え自分に向けられていた言葉でも無くとも、救われた貸しをそのままにしておけるほど豪胆な奴でもない。

ならばやることはひとつ、フラン姉様のお悩み相談だ。

「俺、フラン姉様のとこ行ってくるから、先行ってて」

「アルク!?!」

たとえ偽物でも、偽善者と呼ばれようとも、やらない善よりやる偽善。結局、実行に移した方が後悔しないことが多いのだ。だから、俺は迷わずフラン姉様を追い掛けた。

20話

「お姉様怒ってたなあ…」

ため息と共にボヤク、酒も入り少し調子に乗り過ぎた。スカーレット家の一員として少し品が欠けていたと反省する。

最近、アルクは自立出来るほどに回復した。しかし、それと同時に私がアルクを支える機会はどうと減っていく。率直に言うところ焦っているのだ。

「もう少ししたら、私の存在意義が無くなるのかな」

嬉しくも寂しい、二つの相反する感情が私の胸を締め付けた。姉としての威厳などはどうの昔に投げ捨て、アルクにとって接しやすい姉である事に全力だった。

「私は破壊しか出来ない…しかもお姉様ほど頭も良くない」

ならばこれ以上私に出来ることはあるのだろうか？

ある種の諦めのような、そんな思いが重く胸にのしかかった。

「きゅっとしてドカーン…」

全てを破壊する能力、攻撃における汎用性はかなり高い。しかしこの能力でアルクの心を癒すことは出来ず、むしろ恐怖の対象にすらなり得た。

「ふう……」

こんな事を考え、柄にもなく落ち込んでしまったせいでせつかくの温泉旅行が台無しだ。とりあえずみんなの所に戻ってヘラヘラしておこう、そうしたらまた元通りだ。大丈夫。

「フラン姉様、こんなところで何してるの」

そう思い、戻ろうと振り向いた所に、一番大好きで一番会いたくない人物が居た。

|||||

「フラン姉様、こんなところで何してるの」

追いかけて来たのはいいが、何を話したらいいかわからん。

いや、俺もなんでフラン姉様がこんな旅館の庭の隅の方で三角座りになりながら黄昏てるのか知りたいし、そのわけを聞きに来ただけだね。

でも、辛気臭いオーラをめちやくちや滲み出しているフラン姉様にヘラヘラしながら

「どしたん？ww」とか聞いたらマジで殺されそうだし。どうすつかなあ〜。
「アルクこそ、なんでここに来たの？」

言い方にちよつと棘がある気がする、俺だってなんでここに来たか知りたいわ。

「フラン姉様が、心配だったから」

くらえ！ちよつと怯えた感じの雰囲気！俺に対してそんな棘のある言い方した事を後悔しやがれ!!

「っ！私は…私はっ!!」

ひえっ…いきなり叫ぶな！（即落ちニコマ）

いや怖い怖い、敵意こそ無いものの凄い圧迫感。貴方、自分のフィジカルの強さ自覚してる？

「フラン姉様…何があつたの…？」

「…アルク、私はちちゃんとお姉ちゃんとしての仕事が出来てるかな」

ん？…そんなの

「そんなの、出来てないに決まってるじゃん」

「えっ」

よ？」

「だって、アルクは弟だから…私が姉として守ってあげないと…」

「自惚れるな」

「っ!!!」

「俺は確かに貴方にとっては弱くて、惨めで、可哀な存在に見えるかもしれない。けど、それでも俺だってスカーレット家の一員だ。ずっと守ってもらっただけの存在になるつもりは無い」

「……」

「だから…その、ええと…俺はフラン姉様も守りたい、守れるようになりたい、貴方の後ろじゃなくて、横に立っていたい。だって、世界で一番大切な二人のうちの一人だから」

「……………」

これでどうだ…？俯いて何も喋らないしここからだと言えねえ!!

えっ、失敗した？BAD COMMUNICATION? (ネイティブ)

「ひっぐ、うっ、ぐすっ、あ」

泣いてるー！！！！

ごめんで、ちよつと強く言い過ぎたって、飴ちゃんあげるから許して…

「ふ、フラン姉様、泣かないで…強く言い過ぎた…？」

「ちがうの、嬉しくて、胸が痛いのに」

ええ…嬉しくて胸が痛いってどういう感情？

「ううう、うえ、あ、ひつぐ、あ」

マジ泣きですよん、ワイには手に負えまへんわ。

「あつ、フラン。こんなところに…ってこれどういう状況？」

レミリア姉様降臨、これで勝つる！！

目をぱちくりさせて驚いていたレミリア姉様だったが少し思案顔になった後、納得したように顔を上げた。

「んー、あー、だいたい分かったわ。アルク、本当に申し訳ないんだけど先に戻っててくれる？」

「あつ、うん。ごめんね」

「アルクは謝らなくていいのよ。皆あつちで待つてるから、行ってらっしゃい」

今日は大人なレミリア姉様が良く見られる日だな。そう思いながら、お言葉に甘え俺はそそくさと旅館の中に戻った。

|||||

「ふう…フラン、大丈夫？」

「大丈夫…ごめんお姉様」

我が妹ながら酷い顔だ、鼻水と涙でグシヤグシヤになってる。

物体創造でハンカチを作り出し、ゴシゴシと腫れない程度に目と鼻を拭く。

「ありがとう…」

「いいのよ、別に」

何をアルクと話したのだろうか、そうフランに問う前にぼつりぼつりとフランは話し始めた。

姉弟には仕事という概念は存在しないこと、アルクが強くなるうとしていること。そして、アルクが世界で一番私達を大切に言ってくれたこと。

「そうか…」

「私、嬉しくて、ちよつと寂しくて泣いちゃった」

「後でアルクとまたお話しなさい、まだまだ私達も知らない一面を見せてくれる筈よ」

「うん……」

私も不覚にも泣きそうだわ、あんなに怯えてたアルクが立派に成長していつてるといふことだもの。

認めたくはないけど、それに八雲家も影響しているのだろう、認めたくはないが。

「あ、あとお姉様」

「ん?どうしたの」

「私も、お姉様のこと世界で一番大切だと思ってるから……アルクと同じように……」

「!!……ふふ、私もよ」

「うん!それだけ!!ありがと、お姉様!!」

そう言いながらフランは旅館に走って入っていく。

世界で一番可愛くて、大切に、守りたい弟と妹が居て私は幸せだ。改めてそう思えたこの温泉旅行も悪くなかった。

そんなことを考えながら、私は一番の笑顔で先に行った弟と妹の後をゆつくりとついて行く。

「ふふっ」

心地よい風と木々の揺らめきが私達を優しく見守っているようだった。

人斬り編

21話

夜になり漆黒に包まれた幻想郷、月明かりだけが道を照らしていた。そんななか一人の青年が酒に酔い、千鳥足で歩いている。もちろんと言うべきか、ここは妖怪から何から何までの怪異が跋扈する土地だ、余りにも無防備すぎた。

案の定、その青年は石につまずき転んでしまう。持つていた土産の寿司を地面に撒き散らしながら。もしアルクがその場を見ていたら「寿司を粗末にするな!!」と心中で罵倒し続けただろう。人の心配もせずに罵倒するとはなんとも性根が腐り切っている。

「あゝ？んだよ、クソツタレ…」

悪態をつきながらも必死に立ち上がろうとする青年、しかし中々上手くない。そんな時、草履が目の端に少しチラつくことに気づいた。そして、目の前に人がいることも同時に気づく。

「そこに居るんだつたらよく、ちよつと助けてくれねえか？」

そう言いつつ、パツと上を見上げる。その瞬間、その青年から声にならない悲鳴が

出た。

そこには、顔全体を包帯でグルグル巻きにして、ボロボロの着物を着ており、その包帯の隙間から赤い目を覗かせて、その目と同じように、赤く赤く染まった刀を片手に携えた人間がいたからだ。

それを見た瞬間、青年は酔いが一気に醒め、そこから全速力で逃げた。

そして、転びながらも走って、走って、やっと少し向こうに人里があるのが見えた。しかし、その青年は新たな絶望を味わうことになる。

何故なら、青年を赤く赤く染まった刀が貫いていたからだだった。

「な……んで……だよ……」

「私の剣術に距離など関係ない……逃げるならばその先に行くだけの事……」

「お前は殺さないで置いてやる……この恐怖を、絶望を、この幻想郷に広めるがいい……」

そう言い、男は青年の肩を刺していた刀を引き抜いた。

「ここで私はさらに強くなる……覚悟しろ……幻想郷の強者達よ……」

「いやー、楽しかったですねえ。温泉旅行」

幻想郷、八雲家の客間に当然のように古明地さとりの姿があった。何故ここに来ている

るか。何故お茶を飲み、茶菓子を喰らい、好き勝手しているのか。アルクはそんな思いに支配され「早く帰ってくれないかな…」と考えていた。

「何故お前がここに居る、帰れ」

「いや、開幕早々酷くないですか？私一応アルクさんの友達ですよ？」

「普通は友人の風呂を覗こうとしたりはしない、ましてや我が八雲家の大事な長男の裸を見ようとしたお前に慈悲はない。正直に言うのと死んで欲しいと思ってる」

さとりさん、残念ながら当たり前だ、死んでください。あと藍さん…俺を守ってくれてるのは嬉しいけど、俺ただの居候だよ？何勝手に家族の一員にプラスしてんの？

「あ、アルクさんはそんなこと思ってないですよね…？」

「は、ハハ…」

「なんですかその乾いた笑いはア!!」

「ヒイツ」

目をガン開きにしてこつちをめつちや見てくるさとりさんに思わず素の怯えが出てしまった俺。いやさすがに怖いだろうこれ。誰か助けてくれ。

「おい、アルクを怯えさせているのはこの目と口か？」

「あつ、すいませんすいません。謝りますからその指と溢れ出る妖力しまってください。死んでしまいます」

目で追えないレベルのスピードで藍さんの指が目の下に突き刺さり、悶絶するさとりさん。なんでだろう、全くもって気の毒だと思わないのは。

「私の扱い酷くないですか？これでも私、地底の主ですよ？」

なろう主人公のような発言をしながらも、ヨロヨロと立ち上がるさとりさん。藍さんの攻撃を受けてまだ立ち上がれる辺り、この人も化け物だなど思った。俺の周り魔境過ぎないか？全員流星街出身とかだったりする？

「つて、こんなことを話に来た訳じゃ無いんですよ」

「ならさっさと用件を済ませて帰れ」

「くつ、何回も邪険にされて平気なほど、メンタル強固じゃないんですよ私は！」

閑話休題

気を取り直し、さとりさんはコホン、と咳をつき話を始めた。そんな前置きはいいから早く話せやと思わないでもなかったが、特に顔に出すこともしない。

「最近人里で噂の人斬りについてご存知ですか？」

人斬り、それは字面から見てもあまりいい気はしない。自らの快樂の為に人を斬り、時に殺める。まさに頭のおかしい人でなしの人殺しだ。

そんな物騒な単語が飛び出し俺は全身が縮こまり真っ青になる、ほんとに勘弁してくれ。

「知っている」

「流石藍さんですね」

藍さん知ってたんかい、俺に言つてよ。俺が買い物に行く時にそいつに会つたらどうすんのさ。

「アルクにはしばらく家のことをしてもらつてもりだ、その方が安心して過ごせるしな。居候という形を取つてはいるが、アルクはまだ心の傷の治療中なんだ、そんなやつに万が一会つてしまったら一大事だ」

まあ、心もそうなんだけど俺そいつに会つたら殺される気しかないんですけど。藍さん、まさか俺が人間よりは強いとでも勘違いしてる？

俺は一応色んな格闘技やら魔法やらを修めてはいるけど、人を傷つけることが出来な
いんだよ？

これは別に俺が優しいとかそういう事ではなく、単純に怖いのだ。

攻撃した人間が逆上して襲い掛かってきたりでもしたら、俺は漏らす自信がある。
傘のおぼけ？知らん、あいつは咄嗟の条件反射だ。

「それはそれは、安心しました」

「お前はこの話だけをしにきたのか？」

「いえ、まあ、もしアルクさんに対して何か人斬りに対しての対策をしていなかった場合

…

さとりさんはにっこりと目は笑わせずに藍さんを指さして言った。

「貴方のことを半殺しにしてでも地底に連れて行こうかと思っていました」

怖い怖い怖い、え？何この人こういう人だっけ？もつとなんかこう、コミュ障でクズで変態なバカじゃなかった？

「余計なお世話だ、帰れ」

「辛辣ウ!!…でもあの人斬りは厄介みたいですよ、だからわざわざ忠告しに来ました。地底の鬼も何人かやられているようで、こちらも後処理で大変なのですよ」

鬼がやられるとかそれヤバいじゃん、俺勝てるわけないじゃん、5秒でやられる自信しかないじゃん。

「あ、でも不可解なことに一人も死んでないそうですよ。…つてこれも藍さんなら知っていましたか」

最後にさとりさんはそう言い残し八雲家を去っていった。

「彼奴、お茶だけ飲んで帰って行ったな…許せん…」

藍さんはそう言いながら、恨みがましい目でさとりさんが去っていった方を睨みつけ

るのだった。

閑話休題

「妹紅、何か分かったか？」

「いや、あの男が何者かに斬られたこと以外全く痕跡がない。異常な程にな」

「少しも証拠を残していないところを見ると、人型の妖怪の仕業か？」

「それにしても妖力が感じられない。人間ではあると思う、人間離れしてはいるが」

妹紅と慧音は思案していた。警備は万全に行つてはいるが、いつ何時突破されるか分からない。人里の人間達も多くの不安と恐怖を抱えていた。

「寺子屋の子供達も、今の状況では気軽に遊ぶこともままならないからな、早く何とかしなければ……」

「そもそも目的はなんだ？ 実力の誇示か？ それともただの快樂目的か？」

「わからん、だが私は宣戦布告と見てる」

「宣戦布告？」

慧音はああ、と頷き酷く渋い顔をしながらも説明をしようとする。認めたくはない、しかし何となく犯人の動機がわかるとでも言いたげな表情で。

「この幻想郷もパワーバランスがようやく安定し、強いものが定まりつつある」

「八雲紫、風見幽香、古明地さとり、レミリア・スカーレット…」

「だが、そのバランスを崩しその上に立とうとする者が虎視眈々と狙いを定めているんだ」

「その結果が今回の事件だと？」

予想に過ぎないがな、と慧音は話を締める。妹紅はその姿を見て、何故か一抹の不安を感じていた。

「なんか私不安だから、森の方見回り行ってくるわ」

「ああ、いつもありがとう助かるよ」

「いいよ別に、また酒奢ってくれれば」

「ちゃっかりしてるな…」

慧音は嘆息し苦笑いを浮かべるが、けして不快な感情は感じられず、そこには確かな信頼と親愛の情があった。

22話

「ふわあ〜…」

「なんだアルク、眠いのか？」

人斬りの話を聞いてからというものの、外には全くと言っていいほど出ていない、というか出してくれないと言った方が正確かもしれない。

まあ、藍さんは相変わらず尻尾で俺の事を包み込んでくれるし、元々インドアな分外出する必要も無いから特に困ってもないけど。

俺が尻尾に埋もれてスピスピ寝てる間にも藍さんは紫様関係の書類を片付けていく、正直俺がここに居ても何の役にも立たないし大人しくしとくのが吉だろう。

「ふふっ…可愛い寝顔だな…食べてしまいたいぐらいだ」

「ビエツ」

食べないでください（マジ顔）

「あら、アルクがまた藍の尻尾に埋もれてる」

「ええ、どうやら気に入られたようで頻繁に布団にされています」

「羨ましいわね…」

頬をプクツと膨らませ、分かりやすく嫉妬する紫様。

おい、あんた何歳だよ。その行動が許されるのは十代までだからな、わかってんのか。俺は失礼なことを考えながら狸寝入りを決め込む。起きてもいい事ないしな。

「藍、人斬りの事だけど」

「何か分かったのですか？」

「いいえ、なにも」

え？この人腐つても妖怪の賢者だぞ？その人に情報を掴ませないとかどんな化け物だ？

「なんとというか…霧がかかったみたいにわからないのよ」

「それは…」

「ええ、そういう能力でしょうね」

はえ、すつごい。俺もそんな能力欲しいなあ…、全力で陰湿なこととしてもバレない程度の能力とかかな？

「けど多分だけど…この能力は、何かしらの制限があるはず。でないと私に効いてるのはおかしい」

「でしようね、紫様に能力で対抗出来るほどの実力者ならもつと大規模な被害が出てるでしょう」

一定の基準があるってことか？ならななおさら警戒すべきだろうな、マジでこの幻想郷をひっくり返そうとしてる奴なら、まずはその基準で最も有利を取れる相手を再起不能にしに行くはずだ。

「何はともあれ、アルクはこの家から絶対に出さないこと。いいわね」

「はい、承知しています」

閑話休題

妹紅は、あまり恐怖心を感じることは少ない。不死身の肉体、自分の能力の高さなどを見積もってみても、負けることはあっても死ぬことはないからだ。

そのためあまりにも不用心である、その油断は、慢心は、弱者にとっては大きな隙となる。

「とか、考えてたんだらうなあお前も」

「バケモノめ…」

噂の人斬りは、妹紅に投げ倒され足蹴にされ地面に這いつくばっていた。

「首を切り落としたのに…!!」

妹紅は覚えの悪い子供に言い聞かせるように、人斬りの周りをゆったりと歩きながら

自らを語っていく。

「私はな、不死身の人間が首を落とされることの怖さを理解しているんだよ。いきなり意識が無くなるのは死ぬほど怖い」

「なら、何故あのとき…」

「動いてお前を投げ飛ばせたかった?」

「!!」

簡単な話だ、と妹紅は少しニヤつきながら人斬りと目線を合わせる。

「首を切り落とされても、強く身体に命令を残しておけば身体は応えてくれる。私は時間だけはあつたからな、そのための訓練も欠かさなかった」

「貴様ほどの上位者が訓練だと…!?!」

まあ、これはあのニート蓬萊女に対抗する為に身につけたんだがな、と心中で少しイラつく妹紅。

「弱者には持ち得ない能力を持ち、我が物顔でこの幻想郷を歩く貴様のような人間が訓練をするなど…馬鹿げている…!!」

「別に、私が何しようが勝手だろ」

「黙れ…! 所詮貴様らには弱き物の気持ちなど分かるまい…!!」

「支離滅裂だな、それに…」

弱者を斬るお前が弱者を語るな、と思う妹紅。まあ何を言っても変わらないのだろうと結論付けた妹紅は捕縛を優先しようとする人斬りに近づくと、

「覚えていろ…俺はさらに強くなり戻ってくる…！そして、この幻想郷の強者を殺し、幻想郷を必ず…」

「はいはい、あとは人里で聞く…っ?!?!」

妹紅は驚き、焦った。何故ならばその人斬りが、煙に姿を変え、どんどんと存在そのものが希薄になっていくのを感じたからだ。

「油断したな!!その慢心こそが貴様ら強者の弱さよ!!」

「チツ!!待て!!」

妹紅は全力で走った。しかし、駆け出した時には人斬りは姿を煙に変え、完全に逃亡に成功したようだった。

「くっそ!逃げられたか…」

「とりあえず慧音にこのことを伝えて、人里で注意喚起しないと…」

妹紅は「何故この時こいつを殺しておかなかったのだろうか」と後々になって激しく

後悔することになるとはこの時、露ほども思わなかった。

閑話休題

平日の昼間からゴロゴロゴロゴロ。あーあ、藍さんの尻尾を揉むだけで時給が発生しねえかな。

「あつ、こらつそんなに揉むな。そこはわりと敏感なんだ」

「すいません…」

チエツ、つと心の中で悪態をつきつつ特にやることも無いのでゴロゴロしてる俺。

「アルク、そういうえば庭の掃除がまだなんだ。まだ寝ててもいいが良ければ頼めるか？」

「あつ、はい全然大丈夫です…」

藍さんの尻尾は名残惜しいが、ここでごね回したら今まで築き上げてきた俺のキャラが完全に破壊されてしまう。ここは普通に素直に掃除しに行こう。

「ありがとう、本当にお前には助けられてる」

「いえ、居候の身なので当然です！」

「いやいや、お前はもう居候なんかでは無いよ」

「え」

え？俺居候じゃなかったの？じゃあなんですか？ニートですか？俺、藍さんに真つ向から「早く働け、ニート」とか言われたら泣いちゃうよ？

「お前はもうこの家の家族だ、八雲家長男と言ってもいいな」

あゝ、ゝ家族になるんじやゝゝ、ゝ

藍さんの母性溢れる笑顔と共にそんなこと言われてしまったら、筋肉超人であるこの俺も家族にならざるを得ない（？）

「あつ、ありがとうございます…光栄です」

「ふふつ、照れているのか？可愛いな…」

藍さんと妹紅さんだけは俺にとつてのオアシスなんだ、この二人だけは絶対に俺の為にも、ボロを出さずに接していこうと思う。

閑話休題

とりあえず掃除だ、庭にまばらに散らばっている葉っぱや木の枝などを竹箒で回収して、雑草を抜き、ついでに花に水をやるだけの簡単なお仕事だ。

「ふんふんふん〜♪」

今日は一日藍さんの尻尾にまわりつけたし、結構良い日だった気がする。鼻歌がでてしまうのも致し方ない。

ズリ…ズリ…ズリ…

「ふんふんふん♪」

あ、今日の晩御飯なんだろう。昨日、猪を人里でお裾分けされたから、牡丹鍋かなあ。楽しみだ。

ズリ…ズリ…ズリ…

ん？なんだろうこの何かを引きずるような音は？

「ぐつ、あのバケモノめ…次こそは必ず…」

…あー、俺は何も見えてない。庭になんか包帯ぐるぐる巻きの腰に刀さした不審者がいるとかそんな幻見えてない。

「おい…そこのお前…」

「牡丹鍋楽しみだなあ（震え声）」

「見て見ぬふりをするな」

「ヒエツ…」

なんか話しかけられてるううう!!こわひいいいい!!

「お前、ここに住人か」

「はい…居候ですけど…」

「そうか…いきなりで悪い、対価は後払いになるが俺をここで休ませてくれないか？」
「え」

ちよつと待てや、不法侵入&銃刀法違反の犯罪者やぞ？ 助けるわけないやんけ!! クソが!!

「対価は…：そうだな…：強者に怯えることがない世界とかどうだ？」

「僕の部屋、狭いですがどうぞお入りください」

そこるところもうちよつと詳しく教えてください。

23話

「これ、暖かいお茶です。あと、治療は自分ですと仰つたのでここに救急箱置いときますね」

「ああ、感謝する」

なんか流れて人斬りを部屋に匿ってしまった件について

いやほんと俺何してんだろ、犬や猫感覚で人斬り拾つてくるとかこんな藍さんとかにバレたら絶対怒られる…怒られないにしても、過保護具合が加速したら、おいそれと外出も出来ない可能性がある。

「それにしても…狭いと言っていたがなかなか良い部屋だな」

「御屋敷自体が広いので、規模的にはかなり狭い方の部屋ですよ」

紫様はもつと立派な部屋を俺に使って欲しかったみたいだが、庶民的な感覚しか持っていない俺にとっては狭い部屋の方が管理しやすいし落ち着く。

「それはそうと…先程仰つていたお話ですが…」

「ああ、あれか」

人斬りはそういうと自分が人斬りであること、そしてこの幻想郷の強者達を倒し、弱者の過ごしやす世界に変えるということを説明しだした。

「お前も今の幻想郷が歪なパワーバランスのもと形成されていること、そして強い者がデカい顔をしすぎていることを理解しているんだらう？」

まあ、確かに、今の幻想郷は完全な弱肉強食という程ではないが、人里の外に出ればかなりの無法地帯感があり、人間は過ごしにくいといえそうなのだろう。

「それは確かに理解しています。でも、僕は力が無いですからね…」
「だからこそだ」

包帯から少し覗く赤い目をこちらに合わせる。あつ、よく見ると二重で睫毛長いなこの人…

「俺に協力して欲しい」

いやでもさあ…確かに最初はこの人の言う「強者に怯えないで暮らせる世界」

に惹かれたけど、よくよく考えると俺が協力することでこの人にどんなメリットがあるんだ？

俺がこの人の立場ならば、こんな弱小吸血鬼とか仲間にしても逆に足でまといになりそうだし絶対勧誘しないだろう。

「僕に出来ることがあると思いません…」

「大丈夫だ…お前は戦わなくていい。その代わりに、この部屋を俺の拠点にさせて欲しいんだ」

「拠点に？」

「ああ」

ああ、そうか。この人見るからに住所不定の社会不適合者っぽいもんな…なんか気弱そうでチョロクそうなの吸血鬼、それも結構いい部屋に住んでるとなると利用したくもなるか…

「全て成功した暁には、お前にもちゃんと恩を返すつもりだ。どうだろうか？」

「そう、ですな…」

なんというか、哀れだなあ。確かにこの人には幻想郷の強者達を倒す為の方法があつて、それを成功させる自信もあるのだろう。

だけど、それだけではダメだ。倒した後どうするか、自身が幻想郷を管理するのか、強者が居なくなった幻想郷で何を成したいのか。なにもイメージ出来ていない。

ストレートな言い方をすると、この人はガキなんだ。

王を殺しに行ったメロス然り、権力や強さを持つ人間の表面しか見れず、その裏の苦悩や責任を理解しようとしていない。

まあでも、良いだろう。俺は俺でこの人の行く末を少し見たくなった。

「分かりました、協力します。いつでもこの部屋を使つていいですよ」

「お、おお！そうか！私の能力でこの部屋に来られるように設定しといたから、使わせてもらうぞー！」

能力、か…この人も自身のことを「弱者」と呼びつつ、才能がある人間なんだな。

クソが、死ねや才能マンがあ…嫉妬で狂つちまいそうだあ…

「ん？何か言つたか？」

「いえ、それよりも貴方の名前を覚えてくれませんか？」

「あ、言つていなかったか。俺の名前は夜刀へやとう」と言う。夜に刀で夜刀だ」

「格好良いお名前ですね、僕はアルクと申します」

スカーレット、とは名乗らなかつた。こいつが強者を狙い、人斬りをし続けているのならば、姉様達を狙っている可能性が高い。「スカーレット姉妹の弟だど!!人質にさせてもらう!!」とか言われたら終わりだ。

「そうか、アルク…いい名だ」

「ありがとうございます」

とりあえずはこの人をお風呂に入れたい、めつちや野生動物みたいな匂いするし。

|||||

私は、昔普通の家庭の普通の人間だった。毎朝家族と一緒にご飯を食べ、畑を耕して、人里で売るといごく普通のただの人間。

しかし、ある日その普通は簡単に壊された。

「夜刀…！あんたは…逃げなさい!!」

「嫌だ!!私も戦う!その為に剣術習ったんだから!!」

「泣かせるねえ…でも、残念。二人とも逃がさないよオ!!」

筋繊維が気持ち悪い程に露出し、鋭い爪と牙を持つ妖怪が私の家を襲ったからだ。父親はもう既に首を斬り飛ばされ、弟や妹は既に胃袋の中。

母親は腹を爪で貫かれながらも、私を必死で逃がそうとしていた。

「最後のお願いよ…早く、逃げて…」

「嫌だあ!!」

「早く!!行って!!!」

「っ、助け、助けを呼んでくるから!!絶対!!」

走る、走る、走る。後ろを振り向かず、誰か助けて、お願いだから。私のお母さんを、助けて。

必死で走っていると、前方に傘を持った緑色の髪をした女の子が歩いているのが見えた。私は迷わずその人に助けを求めた。

「あのっ!!お願いします! 助けてください!! 家に、妖怪が来て、家族が食べられて…」
その人は、花のような笑顔をこちらに向けて、こう言った。

「あら、気の毒ね。でも、しょうがないわ。だって」

「貴方の家族が弱いから、食べられたんでしょう?」

「強い者が弱い者から搾取するなんて当たり前前的事よ?」

「弱者に、死に方を選ぶ権利は無いのよ」

「分かったら、運良く生き延びたことに感謝して逃げ続けなさい?」

何を言っているのか、目の前に居るこの生物は、なんなのか。理解できないことが起こりすぎて私はもう限界だった。

「ふざけるな…ふざけるなあ!!」

「あら、私に向かってくるの? なら、容赦はしないわよ」

私は拳を握り、その女に殴りかかった。理不尽な言葉を浴びせられ、嘲笑われて、我慢出来るはずがなかった。

「遅い攻撃…だから家族が食べられちゃうのよ」

「があ?」

攻撃が見えなかった、視界が回ったと思ったら頬にとつもない痛みが走り、意識が遠のいていくのがわかる。

「初回サービスで今回は見逃してあげる、でも次もし逆恨みでもして歯向かってくるのなら……」

その女は、最初から何一つ変わらない笑顔のまま、言い放つ。

「肉片が残らないくらいまでグチャグチャにするわよ」

その日から、私は復讐すると決めたのだ、弱者を搾取する全ての強者達に。

|||||

とりあえず、あの人斬りさんをお風呂に入れた。藍さんは仕事に集中してるし、気づかれないだろう。バレそうになっても「お風呂掃除しときました!」とか言えればいいっしょ。

「あと、とりあえず藍さんへの軽食ついでにご飯作つてあげますか……」

お腹すいてそうな感じだったし、結構量もあった方が良さだろう。藍さんには鮭と梅干しのおにぎりを作つた。

人斬りさんには……そうだな、豚汁とか作るか。生姜入れて、いい感じに根菜余つてるのもぶち込もう、余り物処理の時間だ。

「藍さん、軽食お持ちしました」

「おお、アルクありがとう」

藍さんにも豚汁を用意し、食べてもらう。味に問題無いか確認してもらわないといけないからな。

「美味しい…暖まるな」

「ありがとうございます」

「腕を上げたな、さすがだ。…ところでアルク」

「はい」

「お前、部屋に誰を上げてるんだ？」

「」

バレてたあー!!!しっかりバレてたあー!!!やべえあー!!

「私は一応お前の保護者のようなものだと思っている、そんな私に何も言わずに何処の馬の骨とも知らん女を部屋に上げるなど…」

「え？」

女？何を言ってるんだこの人、仕事し過ぎておかしくなっちゃったか？どう見てもあの人斬り、男だろ。

「え？では無い、今回のことは本気で怒っているぞ。お前は騙されやすいし、力も弱い、押し倒されでもしたらどうするんだ全く…」

「は、はあ…。しかし、庭で行き倒れそうになっていたので、放っておけず…」

「…どんな事情があらうととりあえず、すぐにでもここから出ていってもらう。お前が言えないなら私がガツンと言ってやる。全く…紫様ならばもつと拗れていたぞ…」

「い、いえ！僕が言ってますので！」

とりあえずさつき作った豚汁を、魔法で作った保温性の入れ物に入れ、おにぎりを竹の皮で包み、自分の部屋に急いだ。

「あ、あの夜刀さん！」

扉を開けて俺は驚愕した、少し濡れた黒髪をタオルで拭き、赤い目でこちらを見る刀を差した美少女がそこに居たからである。

24話

「や、夜刀さん…ですか？」

俺は呆然と、目の前の黒髪美少女を前にしてそう問掛ける以外の行動を取れなかった。いや、普通にオツサンと思つてた。声めちやくちや渋かつたし。

「ん？…ああ、この姿だと分からないか…」

「お、お声も全然違うんですね…」

鈴の鳴るような声で返答が返ってきた。マジでこいつ全然さつきと違うやんけ！

「身元がわからないように普段は能力で変化させているからな、これが本来の俺だ」

「そ、そうですか…」

「ところでアルク、何か急ぎの用事があつたみたいだがどうかしたのか？」

「あつ、そうでした！」

俺は同居人に速攻でバレたこと、ここを拠点にするのは難しいことを伝えた。今思うと幻想郷最強格である藍さんに侵入者の存在が分からない訳が無いしな。これはある意味しょうがないことだ。

「そうか…まさか気づかれていたとはな」

そう言うのと少し考えるそぶりを見せる夜刀さん。なんか、なまじ顔が良いからさまになるな、腹立つ。

「あつ、それとこれ軽いものですが食事です。持ち運べるようにもしたので良ければどうぞ」

「む、お前は男子なのに家事が出来るのか」

夜刀さんは少し意外そうな顔をする。まあ、一応時代的には結構男尊女卑とまではいえないけど、わりと亭主関白な思想が多いのが現状だしこの言葉も当然だろう。

「ええ、居候の身なのでこれぐらいは出来ない…」

「…そうか、ならば余計に都合が良い」

いきなりすくつと立ち上がる夜刀さん。すると俺の両肩を掴み顔をグイッと近づけてきた。

「お前を攫うぞ、アルク」

「へっ？」

その言葉を最後に、俺の意識は完全に途切れた。

|||||

目が覚める、何してたっけ…？夜刀さんに住まわせるのは無理だって言っ…ご飯だ

け渡して…家事が出来ることを伝えてから…そこからだ、そこから全然記憶が無い。

「おい、起きたか。少し当身を強くしすぎたみたいでな、何か身体の不調は無いか？」

「夜刀さん…ここ、どこですか？」

「ここか？ここは一応妖怪の山の洞穴だな、急作りにはなるがここに拠点を作ろうと思う。心配するな、生活に必要なものは今から出す」

そう言うと夜刀さんは身体全体から煙を出し、洞穴の中に充満させた。そして、煙が晴れてくると。そこには簡素だが寢床と台所があった。

「俺の能力は、『煙を操る能力』だと私自身解釈してる。まあ、この煙に付随している力を考えると、少し違うような気がしなくてもないが」

少し得意気に夜刀さんは語る。明らかにそれ、そんな範囲で収まる能力じゃないでしょ。煙に物体を収納できる能力とか聞いたことないし！

「俺は幻想郷を支配するつもりだ、だからそのときお前の望むものを全て与えてやろう。だから、そのときまで俺をここで支えてくれ」

「いや、夜刀さんその前に言いたいことが…」

「なんだ？金でも女でも酒でも、言えば持つてきてやろう。強者から奪ったものに限るがな」

いや、さすがに八雲の家を出るのは困る、何が困るって確実に夜刀さんがポコポコの

フルボッコだドン！ってされる。良くて半殺し、悪くて全殺しにされる。マジでこの人子供すぎるだろ…勘弁してくれ…。

「いえ、流石に僕あの家を出るのはダメで…」

「よし、そうと決まれば俺は今から外に少し出る。留守番は頼んだぞ」
「え」

話聞かなすぎだろ!?!待て待て待て待て!!

「ちよっ!」

「晩飯時には一度戻る。それまで待て」

「待て」はこつちのセリフだコルルア!!だが、俺の言葉は夜刀さんには届かず、そのまま行ってしまった。

「いや、流石にまずいだろこれは…」

俺は途方に暮れた顔で洞穴の入口を見るしか無かった。

25話

「はあ…」

この洞穴に来て、早くも一週間が経った。やる事といったら掃除、洗濯、料理というまあ言ってしまうえば家政婦のような事だ。洞穴と洞穴近くの水場は夜刀さんの能力で覆っているらしく、外からは認識出来ないらしい。

「帰りたいけど、なんか煙のせいで帰れないんだよな…」

この煙、認識障害が内側からもかかっているらしく、夜刀さんしか正しい出口がわからないようになってきているらしい。とんだチート能力だ。これやっぱ『煙を操る程度の能力』じゃねえだろ！

「まあ食材だとか、生活に必要なものはわりと確保してくれるし、別に悪い生活じゃないんだけどさ」

夜刀さんが美味しい美味しいと俺の料理を食い食ってる姿を見るのも悪くないけど、このままでは保護者達に怒られるし、心配されて更に過保護になったら面倒だ。これ以上束縛されてたまるかっての。

そろそろ本気でここから脱出する手立てを考えるか…。周りを警戒しつつ音を消し

歩く。

「そもそも起きたら洞穴だったから、出口とかわかんねえよ……」

そう嘯きながらスタスタと洞穴の前の森を歩く、一定距離を歩くと煙が濃くなっておりが完全に見えなくなるといふ寸法だ。このせいで未だに帰られない。

「能力で隠してるなら何故紫様やレミリアお姉様が来てないんだ？あの二人なら能力的に見つけられんだろ、俺の事」

「これがずっと不思議だった。何故だ？存在としての格という意味であればあの二人は何千倍も夜刀さんより上だ。」

「何らかの制限……もしくは限定的な対象がある……？」

能力はその使用者の解釈によって如何様にでもその力を変えるという、ならば夜刀さんにとつてもつとも効果を発動したい相手、それを考えると……

「強者になればなるほど効くのでは？」

いや、なら俺に効いてるのもおかしい。その辺の弱小妖怪なら倒せるが流石に俺を強者と数えるには矮小すぎる。

「いや、違うな……俺個人というより、俺の家系……スカレット家は別だ……あの家は、確実に存在の格が上だ。俺に流れているスカレットの血に反応しているのか……？」

曲がりなりにレミリアお姉様とフランお姉様を輩出した家系だ。その家に属する

俺も存在としての格は上から数えた方が早い、実力はゴミだが。

「わからないけど、ここから出るには俺が夜刀さんをぶつ飛ばすか、向こうで夜刀さんがぶつ飛ばされるかしかなさそうだな…」

「何を、しているんだ？」

バツツ！つと反射的に顔を声のした方に向ける。

そこにはいつものように身体に傷をつけつつも綺麗な黒髪を引っさげて、こちらに赤い眼を向ける夜刀さんが居た。

|||||

気まぐれのようなものだった、そいつはオドオドとしていて顔は綺麗過ぎるぐらい綺麗だが、何処か幸薄そうで何か過去に悲劇があったような、そんな雰囲気を漂わせていた。

あの、不死身クソ女に負けてフラフラとさまよった俺を見つけても、家の者に言い付けるでも無く、ただ俺の理想を聞いてくれた。

「初めてだったんだ、肯定された気がしたのは」

そこからは半ば強引に攫った、欲しくなった。あいつの飯は美味かった、あいつの洗った服は臭くなかった、あいつが居ると安心した。

久しぶりに感じた人の暖かさに俺は絆されてしまったんだ。あいつの為ならばこの腐った世の中を、歪んだ力関係をぶっ壊してやる。一層そう思うようになった。

「お前にも大切な人が居る、お前にも家族が居る。そんなこと知ってたんだよ私は」

「夜刀、さん…」

氣づいたらあいつの足の健を斬っていた、逃げようとしたところが見えてしまったから。だが、あいつは悲鳴一つあげなかつた、やはり痛み慣れているようだった。

「どれだけ恨んでもいい、どれだけ罵つたつてその権利がお前にはある。」

「ぐっ…あつ…」

腕の健も斬り、いよいよ身体を完全に奪う。これで逃げられない。これで、私のモノだ。

「やっぱり、子供だよてめえは、このクソガキがあ…」

「なんだつて?」

小さい声でアルクは何かを呟いた。そして、手も足も動かないはずなのに、無理矢理立とうとしている。

「アルク、やめろ。お前が妖なのは知っているが、再生してもまた斬るだけだ、何もそこには生まれない」

「変に大人ぶつて、諦めたふりをして…悟つたようなポーズ取つてんじやねえぞ、数十年

そこらしか生きてないお前程度の奴があ…」
「何を…っ!?!」

夜刀は誤解していた。いや、夜刀に限らず八雲家も、スカーレット家もさとりもこいしも、何一つとしてアルク・スカーレットという男の本質を理解していない。この男も、消滅したハズの昔のアルクの魂も、叫んでいた、吠えていた！

目の前のコイツが、反吐が出るほど嫌いだと!!!

「こちとら何百年も監禁されても平穩に生きるという夢を諦めなかつたんだ!!何度罵られようと、何度殴られようと、絶対にだ!!そんな程度のこととて悩んで、諦観してるお前に!俺達の邪魔をさせてたまるかあ!!」

「立った、だと…」

再生はほとんどしていない。しかし、気力と根性でアルクは確かにその二本足で立っていた。そして無理矢理動かした手で構えをとる。

「俺達は、俺達のためにお前をぶっ飛ばす!!かかつてきやがれ!!」

「意外だ、見落としていた、お前はそんな奴だったんだな」

二人は交差し、互いに譲れないもののために戦い始める。

|||||

「アルク…アルク…どこに居るの…」

八雲紫は憔悴しきっていた、この一週間飲まず食わずのまま、アルクの捜索にあたりつていた。何も見つからない、この家から忽然と姿を消したアルク。

藍は自死する勢いだった、自らが居たにも関わらず下手人を見逃しアルクを攫われてしまった。

私は藍に「自死するならアルクを見つけてからにしなさい」と言い、八雲家のコネも全て使い、アルクを捜させている。

「オイ、八雲紫、貴様がついていながらこの体たらくはなんだ!!」

「お姉様、こいつやっぱ殺そうよ」

スカーレット家の姉妹には完全に信用を失われ、彼女らは独自で動いてるようだ。そして、地底の主は

「アルクさんはこちらでも探してみます。そして見つかり次第、貴方達を半殺しにしますから」

という言葉をいただいている。何もかもが上手くいっていない。だが私達がどうなるかと別に良い。アルクさえ無事ならば。だから、お願いだから早く帰ってきて欲しい。

「紫様…今日もダメでした…」

何百年という監禁の間、アルクは本に書いてあることで自分が出来そうなことは次々と実践していた。そこには剣術、拳術、武術、柔術、魔法、魔術、様々なものがあつた。そして、アルクはその全てにおいて才能は無い。

それは、普通の人間からしてみてもお粗末でしかないものだった。最初は。

だが、どれだけ才能の無い者であっても、何十年、何百年という反復を繰り返し、少しずつ身につけることは出来る。

アルクは、人間というスケールで見ると、途方も無い程の達人の領域に達しているのだ。

「俺は…スピア・ザ・グングニルとか、ザ・ワールドとか、フォーオブアカインドとか使えないし、あんなの使われたら瞬殺だけど…」

「何を…」

「人間という規格で収まる程度のお前なら、容易くぶん殴れる」

そう言つてスタスタと夜刀に近づくとアルク。この短時間で、ある程度回復したのか、再び斬り掛かる夜刀。

「見え見えだよ」

「ガッ…!!」

それを避け、後ろに周り、ゼロ距離からの『寸勁』。体格も力も無いアルクが使える切

り札の一つである。何故か図書室にあった功夫の書物を見て覚えた。

「そろそろ、降参してください…これ以上は…」

「なん、だと…」

ある程度落ち着いたのか、アルクは理性的に夜刀に問いかけた。しかし、夜刀は止まらない、止まらない。落とし所がわからないのだ、他人を愛した結果拒絶されてしまったという事実しか、今の夜刀の頭には無かった。

「こんなところで、諦められるかああ!!!」

「っ!!?」

叫び出した夜刀の赤い眼が、さらに妖しい光を出し始めた。それに付随するかのよう
に身体全体から煙が排出される。どう足掻いても相手に何かしらの異常が起きている
のは明らかだ。

「逃がさない…絶対逃がさないからなアア!!」

「マジかよ…」

第2ラウンド、絶望の始まりである。

|||||

「慧音が言ってたんだ、今日寺子屋の子供と森の散策をしていたときに

『あの洞穴みたいなどころに行ってみたい！肝試し！』

って寺子屋の子供が言ってたって、でも慧音からはそんなところ何処にも見当たらないかった」

おかしいと思わないか？と妹紅は言う、それを聞いて紫は妹紅の胸ぐらを掴みかからんとする勢いで詰め寄った。

「早くその場所を教えなさい、今すぐ!!」

「そう急くなよ、今日私もそこに行ってみたんだ。でもありやダメだな。完全に一定以上の力量を持つものを遮断してる、能力による干渉も無理だ。もう既にスカーレット家にも伝えてるが、フランでも破壊できなかつた」

あの吸血鬼の妹の能力は反則級だ、全てのものを概念も含め尽く破壊する。それに例外などほとんどないはず…。相手は何者なんだ。

「なん、ですって…」

「ただ、その子供がずっと言ってるんだ『青と金の髪をした男の子がたたかっている』ってな」

アルクだ、間違いない。あの子は攫われたというのに、誰の助けも来ないのに、一人で戦っているというの？そもそもあの子の戦闘能力は、妖怪基準でいうとお世辞にも強いとは言えない。私達の能力の干渉を許さない程の相手になど、勝てるわけが無い。そ

んなアルクが戦つてるといふ事實に、私は打ちのめされるしか無かつた。

「とりあえず……その場所に連れて行つてちようだい……」

「わかつた、ついてこい」

そうぶつきらぼうに答えると二人は目的地に向かうのだった。

しかし、二人はその後ありえないものを目の当たりにする、それは良くも悪くも今までの環境がガラッと変わる、そんなものであつた。

26話

「グッ……クツソ……カハッ……」

せり上がってきた血をピチャピチャと吐きつつアルクは悪態をついた。目の前に居る敵を睨みつけつつ、現状を把握する為に頭を冷やす。

「……」

「言葉すら無くしたか？ふざけんなよてめえ……」

明らかに動きが違う、夜刀は先程までは人間の範疇の動きでアルクと戦っていた。しかし、まるで今は野生動物のような……いや、もつと言ってしまうとその戦い方は妖怪だった。

夜刀の剣術に更に中級妖怪並のパワーが乗っている、その事実にはアルクは顔を顰めるしか無かった。どう足掻いてもこのままでは殺されてしまう。

「いきなり叫んでパワーアップってか？創作物の中だけにしとけ、そんなもん」

「（せめて武器があれば……だが、こんな森にそんなご都合主義なもん無いわな……）」

刀とは言わない、せめてナイフ一本でもあればこの状況を打破してみせるのに、とい

うアルクの独り言は突進するように凄まじいスピードで前身してきた夜刀の斬撃に阻まれる。

「とうとう人であることも手放しやがったか！お前の自尊心はどこに行った！人間であるという誇りまで捨てて、お前は何がしたいんだ!!」

「五月蠅い…五月蠅い…五月蠅い!!!」

「うおっ!!」

袈裟斬りを間一髪、皮一枚で躲しつつ返すように下段蹴りを放つ。しかし、まるで鋼鉄でも蹴っているような感触にアルクは違和感を感じた。

「お前まさか…煙を纏ってるのか?」

全身から煙を出したかと思ったら、こいつ鎧みたいに使いやがった!と、こんなことまで出来る夜刀の能力の応用の幅に嫉妬心が湧くアルク。

「そんな恵まれた能力も持って、恵まれた剣術の才も持ち合わせ、それでもそんなしよーもないことしか出来ないお前のおつむの悪さには脱帽だぜ!」

「そもそも、お前は見下してるんだよ。俺も、俺を含めた弱者と呼ばれる者をな!」

「何がこの幻想郷を変えるだあ!?!まず変わらなきやいけねえのは!」

「てめえだろ!!!」

勝てない、そんなことはアルク自身も理解していた。だがあえて攻める、避けきれな

い攻撃は致命傷を避け、カウンターを入れる。実践経験は皆無だが、脳内でシユミレートする時間はアルクにはたっぷりあった。先を見据え、ここで出来るだけ時間を稼ぐ、外に居るバケモノ達に望みを託すために。

「俺だつて怖えよ！あんな破壊の能力とか、吐きそうな程濃い妖力とか！いつ手違いで死ぬかもわかんねえ！毎日毎日胃痛との戦いだよこちとら!!」

殴る、どこを殴つても硬い、殴つた自分の拳がダメージを受ける

「でも、俺はお前とは違う」

蹴る、蹴つたはずの脚が折れた、骨が見えてしまった。

「どれだけ怖くても、どれだけ辛くても、どれだけ奪われても」

頭突きをかます、額から血が吹き出し、目の前がチカチカした。

「誇りだけは捨てない」

投げる、むしろ投げ返され、吹き飛ばされてしまった。

「てめえのその、腐つた魂に焼き付けやがれ」

アルクはそれでも、自らの足で立っていた。目は死なず、相手をしっかりと見ていた。「俺の名はアルク・スカーレット、誇り高きスカーレット家の血統に名を連ねる者。そして、お前を倒す者だ」

そうだろ、アルク？と、自分に問いかける。返事は期待しない、ただの呪いのような

ものだ。中途半端に他人の魂に入り込んだ自分の願掛け。

ただ、少しだけ足が軽くなった気がした。

|||||

「くっ…壊れない！なんで？」

「フラン、無駄よ。そもそもこれは私達の能力を完全に遮断してる」

「やってみなきゃわかんないじゃない！っていうか、なんでお姉様はそんなに冷静でいられるの!? アルクがどんな目にあってるかわかんないんだよ!? なのに…」

フランは、二の句を繋げなかった。あまりにも自身の姉が辛そうで、悔しそうで、怒りに打ち震えていたからだ。

「フラン、もう、それ以上は言わないで…」

「お姉様…」

「守るって約束したのに、なんで私はこんなにも無力なのよ…何がスカーレット家当主だ…何が最愛の弟よ…何も出来てないじゃない…」

レミリアの眼から一筋の涙が溢れた、血が出る程に自分の拳を握りしめ、レミリアは泣いていた。

「とりあえず、この煙はどうにも出来ないみたいですね。こいし、無意識でここに入ると

かは出来そうですか？」

「いや、無理そうだねこれは。そもそも無意識にも反応しないレベルにここは小さすぎる。象が針の穴を通ろうとしてるもんだよ、これ」

「やはりですか……ここは待つしかないですね」

さとりは冷静に分析しつつ、こいしもどうにか打開案を模索していた。

「誰かが人間の女兒レベルまで力場を落とせたら入れそうですが……まあまずそんな細かい調整出来ないですし、そんなことしたら私達の存在が消えますね」

「おい、八雲紫連れて来たぞ。あと、慧音と第一発見者の寺子屋の子供も」

藤原妹紅が後ろからここに集まった者に声をかける。バツと振り返り、皆が皆八雲紫に殺気を叩きつけた。

「今更何をしに来たんですか、殺されたいのですか？」

真つ先にさとりが口を開いた。おちやらけ、適当な雰囲気はそこには無く、ただただ大妖怪としての恐怖と絶望がそこにはあった。

「何を言っても言い訳にしかならないけど、ここを打破するための作戦があるわ。少し協力してちょうだい」

「嫌です、信用が無い。私達で勝手に考えるので貴女はとつと帰るか自刃するか選んでください」

「お願い、協力して」

「だから、嫌だと言ってるだろ…」

さとりが振り返ると、そこには八雲紫が頭を下げ、涙を流していた。いつも胡散臭くプライドが高い八雲紫が、深深と頭を垂れていたのだ。その姿に、さとりは母を感じた。「あー、もう、わかりましたよ!!今は貴女の行動に免じて不問とします!でも、しっかりと解決したあとには責任はとってもらいますからね!!」

「ありがとう、さとり」

「で?その作戦とはなんですか?あと、その二人はどうします?」

そう言うと、さとりはレミリアとフランを一瞥した。レミリアは少し迷ったような顔をしたが、溜息を少し着いた後に軽く頷いた。

「あの二人も大丈夫だそうですね、はやく作戦を言ってください」

「ええ、あの煙は一定以上の存在の格があると認識が出来ないわ」

「それは承知しています」

「だから、今からこの寺子屋の子と私達の感覚の境界を操って、状況の視認と把握が出来るようにする」

「そんなことが可能なのですか?」

理論上はね、と少しだけ自信なさげに話す紫。それに対して慧音が少し苦言を呈し

た。

「改めて聞くがこの子の安全は保証されてるんだろうな、少しでも危険だと判断したらこの子連れて逃げるぞ」

「ええ、そうしてちょうだい」

「それでその後はどうするんです？まさかそれだけですか？」

「いえ、認識さえ出来たらそこに干渉することも可能だと思うから、通常より時間は大幅にかかるけど、この能力の効果を『破壊』してもらおう」

「私の出番だね」

ええ、と肯定する紫。フランは作戦は自分にかかっていると考え、一層張り切った様子だ。

「私達は特にすることは無いの？」

「いえ、フランが破壊するのが主だけど、貴女達にもあの煙に向けて魔術や能力で攻撃してもらおう。少しでも抵抗を削ぐためにね」

レミリアはそれを聞くと顔を歪ませ嗤う。自らの弟を脅かす存在をこの世から抹消できるという喜びだった。

「とりあえずすぐにやるわよ、準備して」

幻想郷において最強の存在達が今、一人の吸血鬼のために力を合わせた。

27話

アルクは何百年という監禁生活の中で、ひたすらに自分が出来ることを考えていた。それは暇潰しの意味合いもあったのだろう、なにかしてないと狂ってしまう。だからひたすらに熱中出来るものを探したのだ。

そのなかでもアルクは『魔法』『魔術』といわれるものに興味を示した。今までの自分の価値観を一新する革命的な力の奔流。しかし、アルクには外側に魔力を放出する才能が著しく欠けていた。いや、才能云々では無い。放出する機能そのものがイカれているという表現が正しかった。

指先から魔力を飛ばすのが精一杯、それ以上となると身体に負荷がかかってしまう。アルクは悩んだ、せつかく魔法などの自分の理の外の力を使えるというのにここまで素質がないとは。

だが、アルクは諦めなかった。外に放出するのがダメならば、内側で循環させ、自らの身体能力と頑丈さを上げるまで。いちおう、前述の通り外に対する素質は無いが、内の魔力の素質は並程度にはあった。

そこからは毎日毎日、体内に魔力を巡らせ続けた。身体各部位に集中させてみた

り、硬くなる性質を持たせ基礎戦闘能力を向上させることに成功した。

しかし、アルクはそれでも限界を知ってしまった。これ以上は無駄な努力だと感じた瞬間があった。普通の鍛錬、普通の魔法の使用では自分はこれ以上強くはなれないと確信した。

だから、アルクは考えた。そこで閃いたのだ。それはアルクにしか考えつかない事だった、弱いからこそその戦法。

「実は俺は日頃から体内に魔力を貯めている。そのせいで最低限の魔法しか使えない」

まあ、魔力があつても最低限の魔法しか使えないけど、とアルクは独白するように語った。ようやく準備が整ったと言わんばかりの顔で。

「ならその魔力で何をするとと思う？まあ、まともに魔法を使えない俺が魔力を貯めたところであつて感じだよな」

「だが、何十年、何百年と貯め続けた魔力を身体強化のみに使ったら、果たしてどうなるかな？」

アルクの周囲を何かかが解放されたかのように、蒼と金の奔流が走り始める。

夜刀はそこで初めて焦燥感を滲ませた顔でアルクに突貫した。あれは止めなければならぬ。あれは、大妖怪にも届きうる。

「遅せえよ」

「っ?!?」

夜刀は、認識すら出来ずに吹き飛ばされた。何も分からない、何処から何の攻撃が来たのか。夜刀は完全に認識外からの攻撃を喰らったのだ。

「やべえええ！初めて使ったけど、くっそ身体痛い！そりやそうだよな！この魔法完成してない！てか、俺の身体が耐えられんわこれ！」

使った本人であるアルクは普通に後悔していた。内心半泣きのまま攻撃を仕掛ける。

「(制限時間は三分つてとこか!?無理して死ぬ間際まで使つて五分程度！それまでに確実にこいつを戦闘不能にする!!)」

猛攻を仕掛けるが、煙の鎧のせいで決定打にならない。硬すぎるのだ、どれだけ殴つても中に衝撃が伝わらない。

「なら…」

「なにッ…がはっ!!!」

掌底を夜刀の腹に当て、思い切り踏み込み、衝撃を中に浸透させた。

『『鎧通し』つてところかな…これならダメージ入んだろ』

「かハッ…ウオエッ…」

夜刀は、吐瀉物を撒き散らしながらもんどり打って苦しむ。

「この技、一気に踏み込むから衝撃が凄いな。一步間違えたら俺の腕がおシャカになっ

てた」

ビリビリと震える自分の手を見ながらアルクは言った。打てるとしたらもう一度、アルクは構え、そのチャンスを伺った。

「フーツ！フーツ！まだだ！まだ…終わってない！」

ヨロヨロ…つと起き上がる夜刀。その顔は目が血走り、凶悪な顔つきになっていた。なまじ顔が整っているため、凄まじい威圧感を放つその姿にアルクは気圧された。

「なんだこれ…!!」

「ここで…ここでやめたら、何も意味が無い。私のやってきたことに、何の価値もなくなってしまう！それだけは、耐えられないんだ!!」

そう言うのと、何処に力を残していたのか、先程よりも速い一太刀を放つ夜刀。避けるが、全身が悲鳴を上げるアルク。痛みに顔を歪ませ、もう身体強化の制限時間も過ぎようとしていた。

「お前さえ居たら私は、お前さえ手に入ったらもつと強くなれるんだ私は！あの日私を守ってくれたお母さんみたいに！」

「くっそ…マジで、もうダメだろこれ…」

目がかすみ、もう限界だと諦めの表情を浮かべるアルク。

だが、煙が晴れるのが横目に見える。やっと、やっとあのバケモン達が何とかしてく

れたのかと安堵の気持ちが湧いてくると同時に、

アルクの心臓に夜刀の凶刃が、突き刺さった。

|||||

「フラン！もつと力込めなさい！アルクが戦ってるの見えないの!!」

「わかっているってのおお!!ふんぎぎぎ!!オラア!!」

煙の外では、阿鼻叫喚の騒ぎだった。レミリアがフランに発破をかけて、皆が皆煙に向かつて自分の最高火力の技を繰り出していった。

「アルクさん……!もう少しです、もう少しですから……」

さとりも涙を浮かべながら、初めて出来た自分の友人を応援していた。斬られ、殴られ、吹き飛ばされても、果敢に攻めることを辞めない。そんな友人の初めて見る姿にさとりはもう限界だった。

「お姉ちゃん……」

こいしもそんな姉の姿を見て、アルクと会わせただけの間違いでは無かったと確信した。今までは、何に対しても卑屈でネガティブな姉は、友人が出来たことよって確実

に良い方向に向かっていると、そう思ったのだった。

「アルク……！頑張って……！」

紫は、自分の息子にも等しい吸血鬼の奮闘する姿に目を逸らしたくなる。しかし、それはしてはいけない、だから、涙を溢れさせながらも紫は目を逸らさなかった。

全員が全員、アルクを救うために自分が出れることを、最善を尽くした。

「「「アルク!!」」」

煙による帳は、ピシピシという音を響かせ始めた。

「もうすぐだ！フラン！やれえ!!」

「ギユツとして……ドカーン!!!」

パリン、という音がその場に響く。煙が晴れ始め、境界による共有をしなくても目の前の状況がハッキリとわかるまでに鮮明に鳴る視界。

煙が晴れ、その視界が初めて捉えたものは、

「あつ」

愛すべき人の胸が、凶刃によって貫かれている姿だった。

運命というのはときに残酷で、決まりきった未来を変えることなど許してはくれない。か

28話

「ガフツ…あつ、ミスったなこれ…」

自分の胸の辺りに突き刺さる刀を呆然と見るこゝろしかできない自分に情けなさを抱きつつ、自重するように言葉を選んだ。

あー、これはマジでやばいかもな…死にたくねえとはいつも言ってるけど、まさかこんなところで死ぬとは思ってもなかった。と、意識を手放すアルク。

「あ、アルク…?」

震えた声で紫は名前を呼ぶ、どうしても目の前の光景を現実と認めたくないようだった。事実他の者たちも時が止まったかのように愕然とした目でただ見るこゝろしかできていない。

そう、レミリア・スカーレット以外は。

「死ね」

爆発的な踏み込みと恐ろしい魔力を込めたその拳打は、レミリアが今まで放ったどんな攻撃よりも殺気を帯びていた。

そして、今まで放った「死ぬ」という言葉がおままごとに聞こえてくるほどにその言葉は憎悪に満ちていた。

「ばきゅ」

言葉を発させる暇すら与えずに夜刀は遙か後方へ吹き飛ばされていった。だが、その溜飲は収まる兆しを見せず、ただ増幅していくのみだった。固まっていた他の者達も、その衝撃によりようやく現実を受け入れ、アルクのもとへ走る。

「ありったけの妖力をアルクに回しなさい!! 刀は抜かないで! 出血のショックで即死しかねない!!」

「紫様、私は治癒の結界を張ります。ですので尾を減らす許可を」

「許可なんかいらさないわよ! いいからやりなさい!!」

八雲紫の錯乱した声が木霊する。その横でまるで能面の様な顔をした、尾を5本に減らした八雲藍が正確無比な妖力操作で治癒結界を作っていた。

「あ…ダメ…アルク…しなないで…」

青白い顔になりながら戯言のようにアルクの手を握るフラン、まるで本当に何もできない幼い少女のようだった。

ただ、弟の死に怯えることしかできないそんなフランの様子に、古明地さとりが黙っているわけがなかった。フランの横つ面にさとの張り手が飛ぶ。

「っ!？」

「死なないで、じゃないでしょうが!!今必死でアルクさんは戦ってるんです!!あなたが、いまかけるべき言葉は「がんばれ」以外になにがあるんだ!!」

「フランちゃん、厳しいようだけど私も同じ意見だよ。今ここで私達がアルクくんを応援しないでどうするのさ」

「…っ!!うんっ!アルク、頑張れっ!!」

「私達の妖力も全部あげますから、早く戻ってきてください!!」

「アルクくん!私の親友を泣かせたら地獄まで会いに行ってお説教だからね!!」

全員必死だった、心臓を大きく突き刺され、もはや蘇生作業と言っても過言ではない。紫は脂汗を吹き出しながら能力を使い、必死でアルクの「死と生の境界」を曖昧にしている。そこに割り込むように治癒結界による回復でようやく魂を現世に繋ぎ止めているような状況だった。

「カハッ!!」

アルクが血を吐く、明らかに魂が死の方に寄ってきている。状況は悪くなる一方だった。そのとき、夜刀を痛めつけていたはずのレミリアがフラフラと戻ってきた。

「れ、レミリア姉様!あいつは!？」

「知らん、死なない程度に痛めつけて放置した」

「なっ、お姉様なんで殺さなかったの!？」

「そんなことはどうでもいい」

「どうでもいいって」

「いますぐ私の魂を生命エネルギーに変換してアルクに注ぎ込め」

あまりに急な話に、そこにいた全員の思考が一時停止する。

「は?」

「私は、私はアルクにまだ何もしてやれてない。だが、ここでアルクを生かすには、血が繋がっている姉である私の魂を捧げてアルクを蘇生するしか方法は無い」

「そっ、そんなの私にだってできる!!レミリア姉様よりよっぽど私の方が…」

「一番年長者の私がやるのが筋だろう。それに、お前も私にとつて大切な妹なんだ。みすみすこの役割にさせると思うか?」

「そ、そんなのずるいつ!そんなこと言われたら…何も言えないじゃん…」

涙を流しながら、イヤイヤと首を横に振るフランにレミリアは薄く笑うと、フランの頭を撫でる。

「では、行ってきま」

「おい、バカ姉」

フーツ、フーツ…つと、明らかに異常な呼吸音を出しながら、しゃがまれた声のまま、ありえない人物の声が聞こえる。その人物は血走った目でレミリアを睨みつけていた。

「「アルク（さん）（くん）!!」」

「あ、アル」

「なに、しようとしてた、いま」

「え」

「何を、しようとしてたかと聞いてるんだ…ぐ、カハッ!」

「あ、アルク!もう喋るな!死ぬぞ!」

能面のような顔をしていた藍が、流石のこの事態に焦りを隠せなくなってきていた。いきなり意識が回復したこともそうだが、もし、怪我が無かったら、レミリアに掴みかかっていただろうというほどの威圧感がアルクから出ていたからだ。

「何も嬉しくない、から、やめて。もし、次同じこと言ったら…」

「わかった、もう言わない、約束する。だからもう、喋るのをやめて…」

「あと、夜刀さんは殺さないで…僕が、俺が、決着をつけるから…」

「そ、それは…」

できるわけがない、そう言いかけたレミリアだった。世界で一番大切な弟が拉致され、さらにこんな殺されかけているのに。殺すな、なんてあまりにも酷な話だ、ならば

この渦巻いた殺意と敵意はどこにぶつければいい!!と、レミリアは言いたかった。

「我慢できたらなんでも一回いうこと聞いてあげるから…」

「わかった」

レミリアはチヨロかった。